

鹿兒島県史料

旧記雜錄追録

八

題
字

鎌 鹿
田 児
要 島
人 知
事

例言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「薩藩舊記雜録」を底本とし、そのうち追録卷百六十二から卷百八十二までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜録追録八」として継続刊行するものである。年代は天保六年十月から明治二十八年十二月までの六十一年間である。

一文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。また卷末に文書・記事目録を掲げた。

一文書、または記事が数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

一刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。


イ 文書の所在などを示す原注は、一字下げて首部に付した。

ロ 猶々書は、二字下げにし、その位置は底本どおりにした。

ハ 文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

ニ 附(付記)、但(但し書)は一字下げにし、改行した。

ホ 文書の年月日、差出、宛所の位置などは、底本の体裁にあわせて、ある程度の統一をした。

ヘ 書状は、底本の体裁に従うが、包紙の封じ目は「」に統一し、包紙への注記は底本にならった。

ト 花押は(花押 No.x)と番号を付し、適宜人名を傍注するほか、卷末に花押集を掲げた。

一漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意体裁をそこなわないものは一部当用漢字新字体を使用した。

一 異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、次のような字は特にこれを残した。

尔(爾) 早(畢) 吳(異) 珎(珍) 弥(彌)

一 特殊文字としては、次の字だけを残した。

ノ(しめ) ㇿ(より) ㇾ(まいる) く・ま(くりかえし) ㇼ(候)

一 変体仮名などは、普通の平仮名に改めたが、ニ、ホ、ヌ、ハ、ゐだけはそのまま残した。

一 人名・地名および難解な語句などには、適宜傍注を付した。地名は旧薩藩領域外は国名のみ、また領域内は現在

(昭和五十一年四月一日)の郡・市名で表わした。

但し、国・市の字はこれを省略した。

一 原注には括弧を付さず、新たに注を付する場合には、()で囲んで原注と区別した。

一 欠所部の原注、本マ、欠、スリキレなどは、その部分を□で囲み、本マ、欠、スリキレなどと傍注した。

一 文意の通じない字、またはその箇所は□で囲み、(ママ)、(〇〇カ)と傍注を付した。

一 挿入、付紙、押札などは、右肩に(挿入)、(付紙)などと傍注し、他とまぎらわしい場合には「」で囲んだ。

一 朱書部分は(朱)と頭注し、その箇所を「」で囲んだ。

一 行間の書き込みは、底本の体裁にあわせたが、書き込みの内容が底本に齟齬しない場合は、その位置を示し、関連

箇所文末にまとめた。

一 罫字・平出などは、原則として底本の体裁に従った。

一 漢文は、返り点・送り仮名などは不統一に用いられているが、なるべく底本どおりとした。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

同性・(同姓) 陳・(陣) 蜜・(密) 諷方・(諏訪) 麿・(鹿兒) 船・(船) 相摸・(相模) 詎詔・(訴訟)

飛彈・(飛驒) 大守・(太守) 太輔・(大輔) 諸司代・(所司代)

一次のような字は定本の用字に従って併用した。

(砲 炮) (儀 議 義) (腹 復) (太 大)

舊記雜錄 追錄八 目次

例言 一
 目次 四

卷一六二	天保	六年一〇月—同	九年二月	(齊宣公・齊興公・齊彬公)	一
卷一六三	天保	九年二月—弘化	四年二月	(齊宣公・齊興公・齊彬公)	三三
卷一六四	弘化	五年一月—嘉永	六年二月	(齊興公・齊彬公)	九〇
卷一六五	嘉永	七年一月—安政	五年二月	(齊興公・齊彬公)	一四八
卷一六六	安政	六年一月—文久	元年二月	(齊彬公・忠義公)	一九九
卷一六七	文久	二年一月—	二月	(忠義公)	二四一
卷一六八	文久	三年一月—	二月	(忠義公・久光公)	二七七
卷一六九	元治	元年一月—	五月	(忠義公)	三二七
卷一七〇	元治	元年六月—	十二月	(忠義公)	三六七
卷一七一	慶應	元年一月—同	三年二月	(忠義公)	三九八
卷一七二	慶應	四年一月—		(忠義公)	四五〇
卷一七三	慶應	四年二月—		(忠義公)	四八一
卷一七四	慶應	四年三月—	四月	(忠義公・久光公)	五二九
卷一七五	慶應	四年五月—明治	元年二月	(忠義公)	五六一

卷一七六	明治二年	一月	——	四月	(忠義公・久光公)	六二一
卷一七七	明治二年	五月	——	十二月	(忠義公・久光公)	六六六
卷一七八	明治三年	一月	——	十二月	(忠義公・久光公)	七二二
卷一七九	明治四年	一月	——	一〇月	(忠義公・久光公)	七八三
卷一八〇	明治四年	十一月	——	五年十二月	(忠義公・久光公)	八五二
卷一八一	明治六年	一月	——	九年二月	(忠義公・久光公)	九〇八
卷一八二	明治一〇年	一月	——	同 二八年十二月	(忠義公・忠重公)	九六六
花押集						一〇一一
文書・記事目録						一〇一五

(表紙)

齊宣公	自天保六年十月
齊興公	至同九年十二月
齊彬公	

追
錄
舊
記
雜
錄
卷百六十二

(原寸縦四・三センチ 横一六・七センチ)

御系図 齊彬公御子

一 菊三郎

一 女子

篤姫 篤君 篤姫君 天璋院 從三位

大樹家定公御臺所、

天保六年乙未十二月十九日生、母德川宰相齊敦卿女

篤姫實鳥津安芸忠剛女而、母鳥津助之承久丙女也、齊彬為己子、以伊集院中二兼珍女為實母、然告於大家以德川氏為生母者奉(マ)合命也

安政三年丙辰七月七日為近衛忠熙公養養女、賜

諱敬子、稱篤君、

十一月從瀧谷邸入本丸、

明治十六年十一月二十日逝去、法名天璋院殿敬順貞靜大姉、

2 白木御文書九番箱中 四十二番

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一 私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥

加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相

勤候事、

一 乍恐奉對

齊興樣 齊宣樣 齊彬樣毛頭不可奉存疎意候事、

一 從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣堅可相守候、

若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一 對國王無別心可抽忠勤候事、

一 國中之掟并諸事無龜負親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者、

神文略

天保七年丙申四月二十八日 東風平親方 安度判

3 白木御文書九番箱中 四十三番

靈社神文前書之事

一 去歲豐見城王子跡役私に被 仰付、誠以外聞實儀難有仕合奉存候事、

一 不新儀御座候得共、奉對

齊興樣 齊宣樣 齊彬樣毛頭不挾逆意、專勵忠義可申事、

一 對國王疎略之志有御座間敷候、并國中附鳴々至迄政道正樣可申附候、以邪慾國法猥成仕置曾以仕間敷事、

一 自然惡逆之者有之、國中一味仕候共、至私者同意不仕則可致披露事、

一 於私身上被 聞召上儀御座候者、速被遂御穿鑿明鏡被仰付可被下儀偏奉願存候、少々相掠申儀殘念奉存候故

申上置候事、

右條々偽於申上者、

神文略

天保七年丙申四月二十八日 浦添王子 朝意判

4 齊興公御譜中

天保七年秋九月四日

大家徵_二諸侯 城_一、而以_二用番老中松平和泉守乘寬_一令_二

大樹家齊公欲_レ讓_二將軍職於

内府家慶公、齊興・齊彬共登_レ城拜_二其旨_一、而後齊興謁_二

兩公於座之間、蒙_二懇命_一、

5 齊興公御譜中

先_レ是獻_二金於

幕府、今茲天保七年丙申十一月二十五日老中奉書徵_二齊興_一、乃嫡子齊彬代齊興登_レ營、

大樹家齊公嘉_二賞之_一、賜_二鞍一口・鏡一口_一、

6 白木御文書九番箱中 四十四番

知行目錄

高五百斛

大崎神領村之内

伊集院直木村山之方門之内

川邊野崎村之内

高山野崎村之内

曾於郡田口村之内

鶴田鶴田村之内

栗野恒次村之内

勝岡樺山村之内

阿多白川村作職浮免之内

帖佐住吉村之内

始羅郡山田木津志村之内

志布志月野村之内

高山波見村之内

蒲生上久徳村之内

郡山東俣村之内

市來伊作田村神之門之内

出水下知識村之内

谷山上福元村室門之内

山之口山之口村庄屋浮免之内

伊集院麥生田村久保門之内

曾木永野村之内

蒲生北村之内

帖佐住吉村之内

串良岡崎村窪園門之内

樋脇塔之原村之内

大村下手村之内

高城郡高城湯田村之内

小林南西方村之内

志布志月野村福重門之内

名寄帳在別冊

右者去ル亥年御趣法替被 仰出、初發より右御内用引受

取扱、御國許其外諸所に相掛拔群骨折致精勤、是迄御褒

美等表被仰付置、御趣意通追々御改革之註相立

御満足被 思召上、殊今般別段厚 御内慮之譯被爲 在、

右之通當三月廿五日於江戸拜領被 仰付外條、全可有所

務外、仍如件、

菱刈安房

兼印判

隆觀判

天保七年十一月廿八日

鳴津佐渡

久浮判

鳴津但馬

久風判

調所笑左衛門殿 (広總)

7 御系圖 玉里久光公御子

女子

於儔

天保七年丙申十二月八日生於重富第、母鳴津山城忠公

女、

八年丁酉八月二十四日天亡、法名玉容貞光、

8 白木御文書九番箱中 四十五番

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保八年正月十一日 齊興御判

9

齊興公御譜中

天保八年丁酉春二月十六日以^ニ上使榊斐與左衛門^一賜^ニ

御鷹之鶴於齊興^一、

○三月十三日以^ニ上使水野越前守忠邦^一賜^レ告賜品如例、

内府家慶公亦以^ニ上使太田備後守^一、賜品如例、十五

日齊興登^レ營拜^ニ謝之^一蒙^ニ懇命^一、被^レ賜^レ馬如^レ例、

○三月廿二日齊興發^ニ江府^一、五月九日着鹿兒島、

10 白木御文書九番箱中 四十六番

(の1) 今度就

御代替致誓詞差上度外、此段相伺外、以上、

四月十一日

少將様

御名

(の2) 御伺書一通

但今度

御代替^ニ付、

少將様御誓詞被差上度御伺之儀^ニ付、

御用番御代り

水野越前守様

御用人

柴田勝右衛門

右に持參仕演説之上差出外處被成御落手外旨、右御用人を以被仰聞外、

右之通今朝私相勤、此段申上外、以上、

酉四月十一日

近藤隆左衛門

(猪鬃敷) 尖様

追る申上外、右御伺書之儀、昨夕越前守様御勝手は

半田嘉藤次致持參、御用人松元彌右衛門に致出會、

入御内見外處、思召寄も不被爲在外付、表向被差出

外様、尤右御誓詞御伺之儀老御掛りこゝ之御首尾^ニ

る者無之、御用番様御首尾之由外處、御用番松平和
泉守様御事、昨日方御引入ニ越前守様御用番御代
り被成御勤外付、彼御方ニ差出外様彌右衛門方嘉藤
次承申外付、今朝右之通相勤申外間、此段も申上置
外、以上、

(03)

口裏ニ

松平豊後守ニ

明朝六時過私宅ニ被相越可有誓詞外、

一罰文迄調可有持參外事、

一充所掃部頭・老中三人座並之通、伊豆守ハ相除可被認

外事、

一判形者手前ニ被致、血判者此方ニ可被致外事、

五月十七日

右包紙ニ

右一通也

(04)

追啓、誓詞宛所并伊掃部頭殿連名ニ可被相認外、且

松平伊豆守殿加判列被仰付外得共、此度者連名ニ不

及外、以上、

明十八日於水野越前守殿宅

御代替誓詞有之外間、朝六時過不遲様御出席可有之外、

若御斷之儀表出來外者、越前守殿ニ御届之儀者勿論、神
尾・豊後守出席外間、其趣早く可被申聞外、尤當朝俄御斷
外者、豊後守方ニ表越前守殿宅迄可被申聞外、右之趣被
得其意、廻狀早く順達、留方可被相返外、以上、

五月十七日

松平豊後守殿奉

京極長門守殿

溝口信濃守殿

龜井能登守殿

松平河内守殿

京極對馬守殿

溝口主膳正殿

右留守居

右一通也

(05) 御書付一通

但明十八日朝六時過、越前守様御宅ニ

少將様被成 御出、

御誓詞被遊外様と之儀ニ付

御老中

水野越前守様

御用人
伊藤八太夫

右方被成御達り儀御座り間、今日中私共内壹人罷出り様、御用人中の方之切紙到來仕り付罷出り處、右御書付御用人を以被成御渡り間、差上申り、

五月十七日 半田嘉藤次

央様

追ひ申上り、御承知被遊り上、表方御使を以御受可被仰達儀と奉存り、且又明朝

御誓詞之御書付等、明曉八半時迄に私方江差越り様有御座度儀と奉存、此段も申上り、以上、
右一通也

(の6) 明十八日於水野越前守様御宅、御誓詞之儀に付、大御目

付須田大隅守殿方別紙之通御觸達到來仕り付、本書考書入を以致御順達、別紙寫一通差上申り、以上、

酉五月十七日 近藤隆左衛門

央様

右一通也

(の7) 御誓詞之御人數書左之通

松平右近將監様
(音厚)
右近將監様御養子

松平上總介様
(音良)

少將様

細川越中守様
(肥後熊本、音護)

宗對馬守様
(對馬府中、義實)

秋元但馬守様
(上野縣林、久朝)

但馬守様御養子
(志朝)

秋元左衛門佐様
(伊予六州、泰幹)

加藤遠江守様

松平丹波守様
(下総關宿、広周)

久世隱岐守様

長門守様御嫡子

京極對馬守様

溝口信濃守様

信濃守様御嫡子

溝口主膳正様

松平紀伊守様
(丹波龜山、信家)

藤堂佐渡守様
(伊勢久居、高聰)

龜井能登守様

松平河内守様
(丹波福知山、綱忠)

朽木河内守様

(08)

御差合ニ付今日
御断之由

伊勢守様御嫡子(忠誠)

(信濃高島、忠恕)
諏訪伊勢守様

諏訪因幡守様

御目付

徳山五兵衛殿

右御方々様今朝御誓詞御座外由、

右一通也

起請文前書

一奉對

上様、忠勤之志專一奉存知不可有表裡事、

一御一門方・公家衆并親類縁者其外、挾野心族於有之者

早速可致言上り、勿論一味同心仕間敷事、

一就于

御代替、弥重 公義、御仕置等疎略不奉存可相守外事、

右條々於致違背者、

梵天帝釋四大天王惣而日本國中六十餘州大小神祇殊伊

豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神

部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請文如件、

天保八年五月十八日

(鳥津吉村)
松平豊後守御判

(大考、貞惣)
井伊掃部頭殿

(老中、兼寛)
松平和泉守殿

(09)

(同、忠邦)
水野越前守殿

(同、春造)
太田備中守殿

張紙ニ
此所神尾豊後守殿御名、越前守様於御宅被
書載之

右包紙ニ
誓詞

松平豊後守

水野越前守様

御取次
矢倉權之進

右者今朝越前守様於御宅

少將様 御誓詞被遊外ニ付、私御供相勤申外、依之無御

滞被爲濟外御挨拶之御使、御門前直ニ私相勤、御口上

御相應申述外處、追亦可申上由、右御取次方承申外、

右之通今朝私相勤申外間、此段申上り、以上、

酉五月十八日

井上逸作

右一通也

央様

今般

御代替ニ付、水野越前守様御宅ニ

少將様今朝六時過被成 御出

御誓詞被遊外様、昨夕越前守様方御書付を以被仰渡外

(010)

付、今朝七半時御供揃被遊 御出外、依之 御誓詞御紋附御挾箱に入付、中小姓并御挾箱附御納戸與力宰領ニ私一所ニ越前守様御宅に前に罷越居、 御誓詞箱共御用人伊藤八太夫に相渡、追付

少將様被爲 入外段申達置外、左外御出之節御玄關薄縁に罷出、 御誓詞御用人に相渡外段申上扨所に罷在外處、追々 御誓詞之御方々様御揃之上 御誓詞無御滯被爲濟外由ニ被遊 御退出外、

一御誓詞御宛所掃部頭様・御老中様御三人御座並之通御認有之外處、御掛大御目付衆御名前御先例ニ御書入相成事之由、依之公用人方に認込之儀頼入外處、右御連名之次ニ一字相下外、神尾豊後守殿御名前認込相成外段承申外間、此段申上置外、

一御誓詞案貳通之内一通者御老中は、一通者大御目付神尾豊後守殿に差上申外、

一爲御用心、御本書御同様認方被仰付置外 御誓詞持參仕外段御用人に申達外處、不及差出私方に扣置外様承申外、依之右御扣持歸り、宰領之中小姓を以御右筆方に相納爲申儀ニ御座外、

一今朝御供井上逸作相勤申外間、於御門前相同、越前守

様に御挨拶之御使直ニ相勤申外付、別段逸作方首尾申上外、

一今日御誓詞之御方々様御名書別紙を以申上外、右之通今朝私相勤申外間、此段申上外、以上、

西五月十八日

半田嘉藤次

央様

右一通也

(211)

御代替付

少將様御誓詞御伺之儀、先月十一日御用番水野越前守様に被差出置外處、去ル十八日越前守様より御留守居被召呼、明朝六時被差越、可有誓詞旨別紙之通被仰渡、則日表方以御使者御請被仰上、御誓詞御前書等以御先例認方被仰付、前以御書判被成置、翌十九日越前守様御宅に 御出、御誓詞之儀者御刻限前以御留守居持參、御用人に相渡置、御誓詞無御滯被爲濟被遊 御退去外、

一御誓詞御宛所 掃部頭様・御老中様御三人御座並之通御認有之外處、御掛大御目付衆御名前御先例ニ御連名之次ニ一字相下、神尾豊後守殿御名前認込相成外、

一御誓詞案貳通之内壹通者御老中様、壹通者大御目付神尾豊後守殿に被差出外、

白木御文書九番箱中 四十七番

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一御用心之御誓詞者、御留守居持歸り差出り付、御右筆に相渡り、

一御誓詞被為濟り付、越前守様は御挨拶之御使者御留守居相勤り、

右之通無御滞被為濟り付、此段申越り條、被達

貴聞、可承向は及可被申聞置り、別紙御書付并御誓詞

案、御留守居首尾書等都る相添差越り、以上、

但松平伊豆守様去ル十六日御老中被仰出り得共、此

節者御連名に不及り、此段者爲御心得申越り、

酉五月廿九日

猪飼 央(齋)

嶋津 但馬殿(久馬)

嶋津 伊勢殿(久勢)

菱刈 安房殿(隆親)

調所笑 左衛門殿(廣郷)

(朱) 右一通ノ口裏ニ朱力キ

御代替付

少將様御誓詞被為濟りト之事

六月廿七日夜到來 式日中急便

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐奉對

齊興様 齊宣様 齊彬様毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣堅可相守候、若

企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中之掟并諸事無鼠胤親疎可致沙汰候事、

右條々爲於申上者、

神文略

天保八年丁酉五月九日

三司官

兼城親方

朝惠判

御系図 齊彬公御子

菊三郎

女子

女子

澄姫

天保八年丁酉八月六日生、母酒井主殿忠蓋女、

十一年庚子六月晦日夭亡、法名蓮相院殿實法幻鑑大

禪童女、

13 白木御文書九番箱中 四十八番

寫

覺

一萬石以上之面々、江領知之

御判物 御朱印被下付、本多下總守・井上河内守可

相改旨被 仰付外事、

一御代々之

御判物 御朱印所持之面々、考、

御判物 御朱印ニ寫を差添出之、右兩人 御本書拜見

之上寫を可留置、勿論國郡鄉村高辻注帳面可被差出

之、御朱印無之面々考、領知之高國郡鄉村委細書注

兩人江可被渡之事、

一御加増拜領、或所替之面々、或

御判物 御朱印高之内領知分、其旨趣具書注兩

人迄可被達之事、

右之外可被相伺儀者兩人江可被承合、以上、

酉十月

右包紙、
天保八年酉十一月廿五日安房殿、月番御用人新納次郎四郎

御取次を以平川宗之進へ被成御渡、白木御文書九番箱へ納置候事

14 白木御文書九番箱中 四十九番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保九年正月十一日 齊興御判

15 御系図 玉里久光公御子

女子

於儔

女子

於定 於治 榮松院 島津出雲久靜室

天保九年戊戌正月二十日生子重富第一、母島津山城

忠公女、

慶應三年丁卯三月十一日卒、法號榮松院殿春巖貞操

大姉、

齊興公御譜中 在于天保九年

十代節山公後夫人茂山妙才大姉 槐原三郎太郎弘純女 逝去年月日不詳之、大姉爲帖佐郷龜泉院大檀那、而今見龜泉院所藏

大姉牌陰所記曰、文明十八年丙午二月十七日逝去、則

宜以是日定忌日而祭之、因令史官記之譜、

但海有

一惣梨子地采幣唐團扇高蒔繪

一水色紗綾袷服紗包

一外家箱桐白木萌黃絹眞田緒付鴉目黒之銅

一御鏡 一掛 右同人作

但兩咲

一惣梨子地蒔繪右同斷

一水色紗綾袷袋入

一外家箱右同斷

御鞍鏡

一折紙 二枚 辻山城政信極

但桐白木萌黃絹眞田緒付鴉目黒之銅

右孝天保七年申十一月廿五日

齊興公御登 城外様御奉書御到來付、御名代

齊彬公御登 城之處、先達の御上ヶ金御用途ニ及相成

外趣を以、從

大樹家齊公被遊御拜領付、御厩御讓御道具被

外條、至後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

天保九年戊正月廿日

安房隆觀

白木御文書九番箱中 五十番

御記錄奉行に

茂山様

右孝御逝去年月等は迄不分明外處、帖佐龜泉院

御牌陰に文明十八年丙午二月十七日と有之付、其通御

正忌日被定置外條、此旨帳面可記置外、

二月

(島津久盛) 但馬

右包紙ニ

茂山様御逝去年月等は迄不分明外處、帖佐龜泉院 御牌陰に

文明十八年丙午二月十七日と有之付、其通御正忌日被相定

置外旨被仰渡外御書付巻通、天保六年未二月七日但馬殿より

與倉直介正被成御渡、白木御文書九番箱に納置外事

白木御文書九番箱中 五十一番

覺

一御鞍 一口 伊勢伊勢守貞宗作

伊勢久浮
但馬久風

御馬預

右包紙
書附寫

19

齊興公御譜中

天保九年戊戌春二月九日巳上剋齊興發鹿兒島、三月二
十七日着江府、

○大樹家慶公以宿次奉書賜御鷹之鶴於齊興、齊興在參
府途上受之於伏見驛、

20

白木御文書九番箱中 五十二番

久珍

右考

報七郎様御實名、右之通奉稱外段御到來外、依之珍之字
實名ニ可致遠慮外、同唱之文字者不苦外得共、人々心入
を以致遠慮候儀者、其通可有之旨申渡外間、此旨可承置
事、

右包紙

(朱)五十二番

報七郎様御実名久珍と奉称外旨被仰渡外御書付迄通、天保九

(戌カ)
年酉二月十九日安房殿の五代孫之丞へ被成御渡、白木御文書
九番箱江納置之事

21 齊興公御譜中

先是

大樹家齊公傳ニ位於

世子家慶公、於是隨例下謂之武家
諸法度法令、九年戊戌二月

二十一日嫡子齊彬應徵登營同衆侯一列大廣間、

大樹家慶公臨之、老中太田備後守、告下(實地)法令之旨上、

而後

公入衆退、既而齊彬復同衆侯出大廣間、林大學頭讀

法令、其禮式詳于留守居首尾書、

22 白木御文書九番箱中 五十三番

(01) 武家諸法度

一文武忠孝を勵し可正禮義事、

一參勤交替之儀、每歲可守所定之時節、從者之員數不可

及繁多事、

一人馬兵具等分限に應し可相嗜事、

一新儀之城郭構營堅禁止之、居城之隄壘石壁等敗壞之時

者、達奉行所可請差圖也、櫓屏門以下者如先規可修補事、

一企新規結徒黨成誓約并私之關所新法之津留制禁之事、

一江戸并何國にても不慮之儀有之といふとも、猥に不可

懸集、在國之輩者其所を守り下知を可相待也、何處に

て雖行刑罰、彼者之外不可出向、可任檢使之左右事、

一喧嘩口論可加謹慎、私之靜論制禁之、若無據子細有之

者、達奉行所可受其旨、不依何事令荷擔者其咎本人よ

り重かるへし、并本主之障有之もの不可相抱事、

附頭有之輩之百姓訴論者、其支配に令談合可濟之、

有滯儀者評定所に差出之可請捌事、

一國主・城主・壹萬石以上・近習并諸奉行・諸物頭私不

可結婚姻、惣ゝ

公家と於結縁邊者、達奉行所可受差圖事、

一音信贈答嫁娶之規式、或饗應或家宅營作等、其外萬事

可用儉約、惣ゝ無益之道具をこのミ可致私之奢事、

一衣裳之品不可混亂、白綾公卿以上、白小袖諸大夫以上

免許之事、

附徒・若黨之衣類者羽二重絹・紬・布・木綿、弓鐵

炮之者者紬・布・木綿、其下に至りてハ萬に布・

木綿可用事、

一乘輿者一門之歷々・國主・城主・壹萬石以上并國大名

之息、城主及侍從以上之嫡子、或年五十以上許之、醫

師・僧家ハ制外之事、

一養子ハ同姓相應之者を撰ひ、若無之にをりてハ由緒を

正し、存生之内可致言上、五十以上十七歳以下之輩及

末期雖致養子、吟味之上可立之、縱雖實子、筋目違た

る儀不可立事、

附殉死之儀弥令制禁事、

一知行之所務清廉沙汰之、國郡不可令衰弊、道路・驛馬・

橋舟等無斷絶可令往還之事、

附荷舟之外大船ハ如先規停止事、

一諸國散在之寺社領、從古至于今所附來者不可取放之、

勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無據子細有之者、

達奉行所可受差圖事、

一萬事應江戸之法度、於國々所々可遵行事、

右條々堅可相守者也、

天保九年二月廿一日

(02)

口上之覺

御條目御寫 一通

右今廿二日於太田備後守殿、家來之者に御渡被成、大廣間四品以上之御方は順達可致旨被仰渡り間、右一通以使
者差進り、御承知之御届御銘より備後守殿に御達可被
成と存り、御順達相濟次第右御寫此方に御返可被成り、
御順達之御先く別紙相添申り、

右同様之御寫松平加賀守殿に及御渡申合順達可致旨被
仰渡り付、御同席殘御方に若則加賀守殿より御順達有
之旨に御座り、

早る

右之段兼る申付置り、

二月廿二日

右一涌也

(美作津山、齊長)
松平三河守

使者

次第不同

有馬玄蕃頭様より二月廿五日被差越
松平越前守様互致順達り

(島津首魁)
松平大隅守様

(越前福井、齊藤)
松平越前守様

松平大膳太夫様より二月廿四日被差越
松平大和守様互致順達り

(陸奥仙台、伊達齊邦)
松平陸奥守様

松平三河守様より被差越
松平因幡守様互致順達り

(向波徳島、蜂須賀齊高)
松平阿波守様

松平陸奥守様より二月廿四日被差越
松平右近將監様互致順達り

(武蔵川越、齊興)
松平大和守様

松平大和守様より二月廿四日夜中被差越
有馬玄蕃頭様互致順達り

松平右近將監様

右同断

松平上總介様

松平右近將監様より二月廿五日被差越
松平大隅守様互致順達り

(蜂須賀齊昌兼子、齊隆)
松平淡路守様

松平對馬守様より二月廿三日被差越
松平安藝守様互致順達り

(松平齐興兼子、齐信)
松平大藏大輔様

松平伊豫守様より二月廿三日昼被差越
上杉彈正大弼様互致順達り

(頼徳)
有馬玄蕃頭様

有馬玄蕃頭様より二月廿五日被差越
松平越前守様互致順達り

(由羽米沢、齐定)
上杉彈正大弼様

松平因幡守様より被差越
松平伊豫守様互致順達り

(壬佐高知、山内豊徳)
松平土佐守様

南部信濃守様より被差越
松平大膳大夫様互致順達り

(島津齐彬)
松平豊後守様

松平阿波守様より被差越
細川越中守様互致順達り

(肥前佐賀、鍋島齐正)
松平肥前守様

上杉彈正大弼様より二月廿三日被差越
松平美濃守様互致順達り

(因幡鳥取、池田齐訓)
松平因幡守様

細川越中守様より被差越
松平土佐守様互致順達り

(安芸広島、浅野齐昭)
松平安藝守様

松平美濃守様より二月廿四日被差越
松平肥前守様互致順達り

(備前岡山、池田齐敏)
松平伊豫守様

(陸奥盛岡、利濟)
南部信濃守様

(04)

手扣書一通

右一通也

松平安齋守様より二月廿三日被差越
南部信濃守様江致順達外

(筑前福岡、黒田斉海)
松平美濃守様

松平右近將監様より二月廿五日被差越
松平大隅守様江致順達外

(筑後久留米、頼永)
有馬上總介様

松平伊豫守様より二月廿三日昼被差越
上杉輝正大弼様江致順達外

(山内豊春嗣、豊恩)
松平對馬守様

松平對馬守様より二月廿三日被差越
松平安齋守様江致順達外

(上杉斉定嗣、斉憲)
上杉式部大輔様

松平肥前守様より二月廿四日被差越
松平陸奥守様江致順達外

(長州長門、毛利慶親)
松平大膳大夫様

(伊達斉邦嗣、慶邦)
松平筑前守様
(利濟嗣、利義)
南部甲斐守様

但去ル廿一日被仰出外御法令御寫、松平加賀守様・松平三河守様江被成御渡り由こゝ、有馬上總介様今日被成御順達外付、

太守様御國元江可申上旨御受之儀ニ付

御掛御老中
太田備後守様
御取次
恒岡傳八郎

右江持參仕演説之上差出外處、可申聞旨右御取次方承

申外、

(05)

右之通今日私相勤、此段申上外、以上、

二月廿五日 井上逸作

央様

追申上外、今日右御法令御寫御到來ニ付る者、先達の方申上置外通、

太守様御承知之上、追申御受書可被差出儀と奉存外、

此段申上外、以上、
右一通

太田備後守殿御渡り御書付寫壹通相達外間被得其意、御嫡子方江及可有通達外、答之儀若土屋紀伊守方江可被申聞外、以上、

二月十九日 大目付

松平大隅守殿
留守居

右一通

(06)

御法令被 仰出外付、

口裏ニ
大目付江

二月

廿一日

廿二日

右兩日共ニ登 城之面々

御本丸相濟、西丸に仕御祝儀可申上り、

一病氣幼少ニ出仕無之面々ハ、掃部頭・老中伯耆守・

備中守宅に使者可差越り、在國在邑之面々ハ承次第使

札可差越り、

但隱居之面々ハ不及此儀外、

右之通可被相觸り、

二月

右一通

右ノ包紙ニ

松平大隅守殿

留守居

大目付

(07)

右ノ添書左ノ通

御法令來ル廿一日廿二日右兩日被 仰出り儀ニ付、太田

備後守様を被仰渡り御書付之御寫壹通、大御目付衆を御

添書を以只今到來仕り間差上申り、尤御受之儀者毎之通

相仕出申り、此段申上り、以上、

戌二月十九日

近藤隆左衛門

央様

右一包中ニアリ、又別包アリ左ノ如シ

(08)

二月廿一日

一御代替付、御法令依被 仰出、御三家始萬石以上之面

々、且交替寄合登 城半のしめ、

一御座間 御着座御のしめ、

(徳川家齊男、齊順)
紀伊大納言殿

(同、齊通)
尾張大納言殿

(徳川齊昭)
水戸中納言殿

右順々被出席、一同着座之時、今日御法令被 仰出之

段 御意有之、目出度被存旨年寄共言上之、退去、

(徳川家齊男、齊世)
田安中納言殿

(齊通)
徳川宮内卿殿

(慶昌)
徳川刑部卿殿

右次第同前、

一御黒書院 出御、

御先立

水野越前守

御刀

御上段 御着座、

松平加賀守

右出席

御目見、御法令被 仰出之旨 上意有之、掃部頭・年

寄共及御取合、大廣間御次之間迄退去、

右次第同前、

松平大藏大輔

松平讚岐守

右次第同前、

松平兵部大輔

松平越中守

右次第同前、

松平阿波守

松平右京大夫

右御同所溜こゝ

井伊玄蕃頭

御通かけ 御目見、

酒井左衛門尉

一大廣間 渡御、

小笠原大膳大夫

御先立 水野越前守

右一同出座 御目見、御法令被 仰出之旨 上意有之、

御中段 御着座、御下段御左之方備後守・掃部頭・和

掃部頭・年寄共及御取合退座、

泉守・越前守・中務大輔・伯耆守・備中守かきの手こ

松平近江守

着座、

松平式部大輔

一御同所 御右之方

右次第同前、

松平讚岐守・松平越中守・酒井左衛門尉・小笠原大膳

養父看病御暇

松平三河守

太夫列候、

右次第同前、大廣間御次之間迄退座、

一御同所西之方板縁鷹間詰御奏者番・同嫡子、菊之間縁

松平越前守

頼詰・同嫡子伺公、

右次第同前、

松平大和守

一御同所疊縁こ若年寄 大御所様若年寄 右大將様若年

右次第同前、

松平右近將監

寄伺公、

右次第同前、

松平上總介

一大廣間 出御以前こ御下段之上四疊目方御次男にかけ

右次第同前、

松平左兵衛督

四品以上并壹萬石以上之面々・同嫡子・交替寄合並居

右次第同前、

松平淡路守

一同 御目見、此時御法令被 仰出之旨備後守傳達之、

上意有之、掃部頭・年寄共及御取合、早々入御、

一入御以後、御法令御文臺ニ載之、御帳臺方中奥御小姓持出之、御中段ニ置退、其後林大學頭罷出讀之、此節

御次間より松平加賀守・松平三河守・松平越前守・松

養父有柄御親

平阿波守・松平大和守・松平右近將監・松平上總介・

松平左兵衛督・松平淡路守・松平大藏大輔・松平兵部

大輔出席、松平右京大夫・井伊玄蕃頭・松平近江守・

松平式部大輔及罷出、何々謹々承之、掃部頭・年寄共

及挨拶退出、

以上

右横折一冊トス

少將様御用之儀御座外間、今朝五半時御熨斗目御半袴被爲 召、御登 城可被遊旨一昨日御老中様方御連名之御奉書御到來ニ付、今朝六時御供揃ニ御登 城、殿上之間に御扣被遊外處、御目付大澤主馬殿・柳生伊勢守殿御寄せ被申上、

公方様 出御以前大廣間御下段上外四疊目に御着座、

尤西御敷居際三尺程明ケ、夫々東之方に御三人宛五頰

ニ御着座、御譜代御大名様方・柳之間御大名様方ニ及

二之間にかけ御順々御着座之由、尤右御寄せ以前御下

段に被爲入、溜詰之御方々様并下之御部屋之御方々様

と御法令御拜聞之節、御着座之儀共御打合御座外由、

一御錠口明キ御座間并御黒書院

御目見相濟る大廣間に 渡御、此節御當主之溜詰之御

方様御下段西之方に東向キ御着座、御老中様方御下

段東之方外二之間にかけ御列居、于時御法令被 仰出

外旨、太田備後守様御傳達、

上意有之、御直御請被仰上、同時ニ御取合有之、即刻

入御、

一入御以後、御同席様方御一同御立被遊、此度々西御

敷居際一間半程明ケ、東之方に如最前御着座、此節松

平加賀守様御始、下之御部屋之御方々様三之間之方外

御出座、御同席之御並ニ西之方に御着座之由、尤加賀

守様ニ老少々御進々角かけて御着座之由、此時御部屋

住之溜詰之御方様ニも、西之御縁之方外御出座、御下

段西之方に東向ニ御一同御着座、左外御法令御文臺

ニ載せ、御帳臺方中奥御小姓衆被持出御中段ニ被差置、

其後林大學頭殿御出席御法令被爲讀、何れも御拜聞早

々御掛太田備後守様に大學頭殿方御法令被差上外節、

溜詰之御方々様・御老中様方御前ニ御進々出、恐悦之旨

被仰上、御大老様・御老中様方御座を被爲立、御中段

を後こして御着座、此時松平加賀守様御上座松平陸奥

守様方恐悦之旨被仰上、御一同御平伏、御老中様方御

挨拶有之御退座之由、

一 右早る於帝鑑之間御縁煩

右大將様江之御祝儀、御奏者番松平伊豆守様に被謁り

る被仰上り由、

一 右相濟西丸江御上り、於大廣間御奏者番堀田加賀守様・

九鬼長門守様に被謁りる御祝儀被仰上り、大御目付神

尾山城守殿、御目付一色主水殿・松平四郎殿御詰御座

り由、尤御老中様方に御廻勤ニ不被爲及御先例ニ付、

此度表御廻勤無之、直様被遊御歸殿り、

一 右通御法令被 仰出り段

太守様御承知之上御觸達之通り、御使札を以御祝儀可

被仰上儀と奉存り、

一 中將様方老御觸達之通り、何表御勤向無御座り、

一 御法令御式書、御坊主星野求珉方差越り付、爲御見合

寫相添差上申り、

右之通今朝御登城、御供私相勸此段申上り、以上、

戌二月廿一日 半田嘉藤次

央様

追る申上り、御法令御寫御同席様方御順達被爲在

りハ、太守様御承知之上御請書可被差出儀と奉

存り、尤外々様御在國之御列承合り處、別段御請書

被差出り旨承申り間、此段表申上置り、以上、

右一通

(10) 一 御條目寫壹通

一 右ニ付書付二通

一 御廻狀寫壹通

一 横折帳壹册

俱御留守居首尾書相添

右老

御代替初る御法令被 仰出り付、右之通江戸より到來

り間、先例之通御記録所に可納置り、

三月

右包紙ニ覺トアリ
右取合四包ナリ、紙數十八枚也

23 白木御文書九番箱中 五十四番

今度西丸御普請ニ付、御内縁之譯ヲ以致上納金度内願之

趣申上り處、御用途ニ可被差加旨被 仰出、其段一統

承知之通ニ、引次上納金殊ニ改革中、其上領國一統困窮之折柄氣毒ニ、共、此節考義理合ニ拘難捨置譯ニ

ヘハ、上納金相備リ様各申談可取計リ、尤身邊迄モ萬事加省略リ心得ニ、改革中耆勤事之外、客來并音信贈答相斷合ニ條、厚汲請可取扱リ、委細直ニ申聞外通ニ

外間、諸事取調行届外様ニ可取計リ、

四月

家老中ニ

右包紙ニ 御筆仰出トアリ

外包ニ 御筆仰出御書附卷通

(朱)五十四番

右仰出早晚大奉書半切被遊 御書認外処、近年 御手被遊御振

付付、此節耆 少将様御他筆を以被仰出答付得共、御家老衆方

御願之趣有之、御下書之儘被相下外段、伊勢殿方御口達を以

坂元金十郎致承知外事

24 齊興公御譜中 在天保九年

夏四月先レ是

幕府造ニ西丸ニ、故齊興請ニ獻ニ金以助ニ其費被允レ之、而

今也當ニ國中上下疲弊ニ、而有ニ是事ニ、困苦固不レ可言、

亦所ニ以出ニ乎不レ得レ已也、宜下更加ニ節儉ニ作中ノ之備上、乃

令ニ家老一如レ左 余今手願皆握筆、故欲使齊彬代書之、而家老有所謂、故不改照書付之云

25 齊興公御譜中 在天保九年

夏四月十三日

大樹家慶公以ニ 上使松平和泉守乘寬ニ問ニ參府、下ニ

懇命、十五日齊興登レ營述ニ參府之禮、更親蒙ニ

懇命、

○今茲天保九年戊戌夏、清國道光帝冊使翰林院修撰林鴻

年・副使翰林院編修高人鑑來ニ琉球國、撰レ吉授ニ與勅

書、至レ冬歸、

26 齊興公御譜中 在天保九年

秋七月二十五日

大家以ニ 上使松平甲次郎ニ賜ニ御鷹之雲雀於齊興、

27 御系圖 齊彬公御子

男女三人

女子

邦姬

天保九年戊戌十月二十四日生、母酒井主殿忠蓋女、

十一年庚子五月二十四日天亡以五月二十三日為忌日、法名淨臺院殿
玉露蓮香大禪童女、

28 齊興公御譜中

吉貴公夫人靈龍院殿之薨也、元文四年己未八月置_二其靈牌於江府谷中瑞輪寺_一、而寬延元年戊辰瑞輪寺災、其靈牌燒焉、後安_三其靈牌於吾菩提所江府大圓寺_一、不_三復置_二之於瑞輪寺_一、今茲天保九年戊戌十一月再安_三之於瑞輪寺_一、爲_二祭資_一附_二金若干等_一、

29 白木御文書九番箱中 五十五番

口裏 伊勢殿_六被相渡_レ御書付_レ之爲

靈龍院様御位牌、谷中瑞輪寺_江 御安置被爲 在_レ外處、寬延元年辰年瑞輪寺類燒之節 御位牌御燒失、御屋敷より程遠_レ付御再興無之、大圓寺_江 御安置被成置_レ得共、此節 思召之譯被爲 在、本之通瑞輪寺_江 靈龍院様御位牌一基 御安置被 仰付_レ、左_レの寬延元辰年御祠堂銀百枚被召附置_レ得共、此節又_レ金百兩御寄附被仰付_レ條、右貳株を以御日牌無懈怠御回向申上、御遠忌之節_老寺役御法事被仰付、左_レの住持_江別段

從御内_レ銀五枚被下、御番頭御代參被 仰付_レ、一瑞輪寺_江盆_二付爲水御手向料、銀二枚・鬼頭御燈爐一對、塔頭惠遠院_江

御廟所掃除其外見舞爲引請料、米五石年_レ御寺納、都_レ有來通被附置_レ、

一此節 御位牌 御安置被爲 在_レ得共、以來瑞輪寺_老勿論惠遠院迄_老何様及破損_レ共、御修甫等御構無之、其外何_レ付訴詔_ケ間敷儀_老屹と不申出様、右兩寺_江分_レの相達候様被仰付_レ、

一靈龍院様御位牌、谷中瑞輪寺_江 御安置被爲 在_レ外處、寬延之度類燒之節 御位牌御燒失、御再興無之、大圓寺_江 御安置被成置_レ得共、此節 思召之譯被爲 在、本之通瑞輪寺_江 御位牌 御安置被仰付_レ、然共大圓寺 御位牌之儀表、矢張只今迄之通被建置_レ、御佛餉米貳拾石之儀_老引取、別段爲御佛餉料銀拾枚此節新_二御寄附被仰付、御遠忌之節_老御法事執行_二不及、御香奠銀三枚御寺納_二の奥向 御代參被仰付_レ、

一此節谷中瑞輪寺_江 靈龍院様御位牌 御安置被仰付_レ、然處五廟以前之御遠祖様_老盆又_老月次 御代參等無之事_レ得共、御

菩提寺之儀者 御直參序 御拜被爲 在、御代參之節及同様之事外處、瑞輪寺之儀者 御遠忌迄之 御代

參之、右様 御拜等及不被爲 在外付、

靈龍院様に老別段之 思召を以毎年益之付、當番頭

御代參被仰付外、

右之通於江戸被仰付外旨申來外、此旨御記録奉行に

可申渡外、

十一月

(島津久徳) 伊勢

右包紙^二 天保九年戌十一月廿三日、月番御用人川上孫左衛門取次を以

上村休兵衛^五被相渡外付、白木御文書九番箱へ納置之事

30 齊興公御譜中 在九年 十一月

嚮 (重考)

大信公之薨也 (古貴考)

淨國公遷^二祢廟^一、則如^二祭祀費^一亦宜^レ隨^二他祢廟例^一、又如^二

大信公祭資^二附^二高百五拾石^一、一依^二

圓德公例^一、乃命^二其事^一如左、

31 白木御文書九番箱中 五十六番

口裏^二 但馬殿^六被相渡外御書付之寫

御高百五拾石

右

大信院様に被遊 御寄附、御物計を以年々福昌寺に被相

渡候儀共、都る

圓德院様御寄附高同前被仰付外、左外近日

御判物御書付、大目附御使者之御寺に被相渡、御家老

中添書表新番を以同日相渡筈外條、福昌寺に被申渡外儀

共先例通可被致取扱旨、寺社奉行に申渡、御記録奉行其

外可承向に及可申渡外、

但日限之儀者追可申渡外、

十一月

(島津久徳) 但馬

32 白木御文書九番箱中 五十七番

靈龍院殿位牌貴寺に安置被致置外處、寛延元辰年三月

御類燒之節位牌燒失、屋敷^六程遠^二付再興無之^一、菩提

所大圓寺に安置被致置外得共、此節存寄有之、以前之

通貴寺に 靈龍院殿位牌一基被致安置外、左外寛延

元辰年祠堂銀百枚被致寄附置外得共、猶又此節金百兩

被致寄附、右貳株を以日牌無懈怠御回向有之度、尤遠

忌之節者御寺役之^二法事被致執行^一、左外貴寺に別段

從内々白銀五枚被相贈、番頭代參被申付外、

一 貴寺に盆ニ付、爲水向料白銀貳枚・鬼頭燈燼一對、御

塔頭惠遠院に廟所掃除其外見廻爲引請料、米五石年々

寺納之儀者都る是迄之通被申付、

一 右通祠堂銀被相重、寺納ニ付る者遠忌之節、御寺役法

事者勿論、靈屋修復等都御寺役ニ御取計、且貴寺并

惠遠院何様及破損、修復等一切差構不被申、其外

何ぞニ付御訴詔ケ間敷儀被申出間敷、此段兼る屹と

御斷被申、

一 御轉任又者役僧御代合之時、證文新ニ御差出有之度、

一 貴寺近火之節、位牌御持退手當之儀、委細證文ニ御書

記可被差出、

一 右位牌安置ニ付、五廟以前之遠祖者益又者月次代參等

無之事、得共、菩提寺之儀者直參序拜被致、代參之節

及同様之事、處、貴寺之儀者遠忌迄之代參、直參者

不被致、然處、靈龍院殿に者別段之存寄を以、毎年

盆ニ付番頭代參被申付、

右旁相逢、様家老共申聞、此段御達申、以上、

十月

井上逸作

半田嘉藤次

近藤隆左衛門

瑞輪寺様

(02) 此度谷中瑞輪寺に

靈龍院様 御位牌被遊御安置ニ付、其段相逢、様被仰

渡、去ル五日役僧旌壽院召呼、別紙之趣相達、別紙

之通御請書瑞輪寺持參差出、間差上申、此段申上、

以上、

戌十月十一日

半田嘉藤次

央様

別紙左ノ如シ

(03)

以書付御禮申上、

去ル元文四未年八月申

靈龍院様拙寺に被遊 御入、其後寛延元辰年類焼之節

御尊牌焼失仕、奉恐入、御館方程遠ニ付御再興無之、

御菩提所大圓寺に御安置ニ相成、此度格別以 思召、

如先年之 靈龍院様御尊牌拙寺に被遊御安置、猶又爲御

祠堂料と金百兩御寄附被成下、深く難有仕合御禮奉申上

外、以上、

十月

瑞輪寺

井上逸作様

半田嘉藤次様
近藤隆左衛門様

33 齊興公御譜中 天保九年

十二月五日齊興應 レ徵登 レ營謁 ニ

大樹家慶公於御座之間、殊蒙 ニ懇命 ニ被 レ任 ニ宰相、十五日登 レ營拜 ニ謝昇官 ニ焉、夫余之昇 ニ此官 ニ也特遇也、而用番老中以 レ書見告、以下客年

大家有 レ慶故三家及有 ニ姻故 ニ諸侯等皆昇進、如 ニ齊興 ニ亦有 ニ

御臺所姻戚 ニ故爾 ル矣、然聞 ニ之 ニ近侍 ニ曰、齊興平生務奉 ニ公事 ニ、且國政家道皆得 レ當故所 ニ以特賞進 レ官、而難 ニ見 ハ言 ニ之 ニ實 ニ云、可 レ謂 ニ令聞 ニ矣、

34 白木御文書九番箱中 五十八番

(卷「五十八番」)

天保九年戊十二月五日

太守様宰相就御昇進、御用番様より御達振御書附寫

右ニ付江戸詰御家老衆御問合書寫

御記錄所

右一冊ノ蓋紙也
(卷)「御転任付、御達振之儀ニ付而之事

十二月廿九日到來 極々急飛脚便」

(01) 御轉任付御達振之儀、別紙御書取寫之通、於御白書院御

縁類御老中様御列座、御用番太田備後守様より被遊 御

承知付、別紙之通御役人中に可申渡旨 御沙汰被爲

在外付相添、此段申越り條、其許御役人中に被申渡り儀

者、何分及可被取計り、此段申越り、以上、

但御記錄奉行は老別段相達置り、此段者爲御心得り、

成十二月六日 猪飼 央

鳴津但馬殿

嶋津伊勢殿

菱刈安房殿

(02) 寫

松平大隅守

其方儀正四位下中將ニ付、此上昇進之儀者難被及御沙汰

筋ニ付得共、去年稀成 御慶事被爲 在、右ニ付御三家

始、御續柄之面々等格別之昇進被 仰出り、就る者當時

御由緒有之、

大御所様より厚被 仰進り御旨及有之、旁出格之

思召を以、目出度宰相昇進被 仰出外、誠ニ此度ニ限外儀ニ由、向後之家格ニ者不相成儀勿論之事ニ外、此段急度可申聞旨 御沙汰ニ外、

〔卷〕右御書附式通天保九年戌十二月晦日、安房殿被成御渡可致書留置旨、得能彦左衛門致承知之、右通相濟、御本書者即日安房殿へ彦左衛門差上之外事

〔案〕御書取ニ而 白木御文書九番箱中 七十九番 今般宰相被 仰付外付、諸御祝儀且勤向等之儀先日以御内意申上置外處、未御差圖不被成下外、此度之儀者格別厚 思召を以難有被仰付外間、松平加賀守家格ニ相拘外外、拜任之廉相立外様猶又 御内意を以相願外、月次年頭等差掛外付、加賀守宰相拜任後諸勤向等例書相添差上申外、何分此涯被成御差圖可被下外、以上、

(の1) 35

十二月十八日 松平大隅守

例書 松平加賀守事、年頭之御禮、中將之節者御太刀目錄致持參外得共、宰相拜任後者御老中方御持出御披露ニ相成、御太刀疊目及進、御黒書院御下段下より四疊目下ニ相成外事、

(の2)

例書

但御盃・御吸物共御三方ニ戴、御服臺及南北に長く置頂戴、
一八朔之御禮、中將之節者御太刀目錄持參ニ外得共、宰相拜任後者年頭之通、御老中方御持出御披露ニ相成外、御太刀疊目及年頭之通ニ御座外事、
一月次之御禮御黒書院是迄之通、進退等相替儀無之、御老中方御披露有之外事、
一五節句御禮、中將之節者御白書院御縁頰に出席、夫より着座御祝儀申上外得共、宰相拜任後者御縁頰に不致出席、御三方同様直ニ御下段に入御祝儀申上、御老中方御披露有之外事、
一惣出仕、中將之節者櫻之間於御床前謁有之來外得共、宰相拜任後者御白書院黒鷲之御杉戸涯ニ謁ニ相成外事、
一諸爲御禮登 城、御白書院於御縁頰御奏者番謁有之、都の歸座之節、宰相後者黒鷲之御杉戸涯迄御奏者番送有之外事、
一宰相後者 御直判之 御内書頂戴仕外事、
一參勤并御暇之御禮、是迄御黒書院ニ由申上外處、宰相

後者於御座之間

松平大隅守

御目見、御手自御熨斗炮頂戴仕外事、

一宰相後御禮事等都御白書院御縁頰謁、御老中方御直

達之節者黒鷲之御杉戸涯に御達有之外事、

一諸不時御禮之節、着座仕外事、

一御能之節、竹之間に御三方相伴有之外事、

一四ヶ所献上之節

公方様御分於檜之間、御奏者番謁有之外、

御臺様御分於平川口、御留守居謁有之外事、

一都の御禮之節者溜詰之上に罷出外事、

一雲雀五十、以 上使拜領仕候事、

右之通兼承及候、

十二月

(03)

松平大隅守

宰相被 仰付外付、正月二日登

城之節、御太刀目録老中披露、

一御盃并引渡三方に被下之、

右之通向後可被心得外、

以來五節句・八朔共御白書院老中披露、尤八朔御太刀
目録老中持出外、

一右御禮之節、御敷居之内に罷出老中披露、直に

御右之方着座、老中及御取合退去可被致外、

但溜詰松平近江守次松平三河守前可被罷出外、

右之通可被相心得外、

松平大隅守

以來月次ハ御黒書院御縁頰に罷出老中披露、御敷居之

内

御右之方着座、老中及御取合退去可被致外、

但溜詰松平近江守次松平三河守前に可被罷出外、

一若菜御禮も右同斷、

右之通可被相心得外、

(余)

一口裏 御転任三付 御勤向等之儀御伺相成外付而之事、

正月廿六日到來 式日中急使」

(04)

此節御轉任付、諸御祝儀且

御勤向等之儀、別紙寫之通例書被相添御伺被遊外處、朱

書之通御書取を以御用番太田備後守様より被仰渡り、
 一年頭并五節句・八朔・月次御式向等之儀共、別紙寫三
 通之通、御書取を以御用番右御同人様より被仰渡り、
 右之通被仰渡り間、爲御心得此段申越り條、御記録奉
 行等ニ被達置り儀共、何分及可被取計り、以上、

戊十二月廿九日

猪飼 央

嶋津但馬殿

嶋津伊勢殿

菱刈安房殿

白木御文書九番箱中 五十九番

口裏ニ

安房殿ノ被相渡り御書付之爲

一御銀百五拾枚

右者

淨國院様御佛餉高百五拾石被召附付置り得共、此節引
 替右之通御銀被召附、爲利足御銀壹貫宛年々可被相渡

り、

一御銀拾五枚ツ、

右者

(光久室、平松氏)
陽和院様

(綱久室、松平氏)
眞修院様

(綱貴室、松平氏)
常照院様

(綱貴御室、二階堂氏)
蘭室院様

(吉貴室、松平氏)
靈龍院様御佛餉米六石ツ、被召附置り得共、此節引替

右之通御銀被召附、爲利足 御銘々様ニ御銀五十四匁

壹分八厘ツ、年々可被相渡り、左り

陽和院様

蘭室院様

靈龍院様ニ是迄被召附置り御銀之儀者今成被召置り、

右之通被仰付 御判物御書附并御家老添書之儀者只今

之通被召置、銀子御物ニ被差置、爲利足右之通年々可

被相渡り條、右利足ニ御佛餉等差上り様被仰付り、

左り得者

御六靈様御佛前廻其外都る之儀格別減少之筈外得共、

右利足を以相濟り様被仰付り、御掃除等之儀ハ其住持

々より無怠慢仕り様被仰付り、御高御米之儀者都る表

方に被差出り様被仰付り、

右之趣福昌寺・淨光明寺・興國寺に被申渡り儀共可被

致取扱旨寺社奉行に申渡、可承向にも不洩様可申渡り、

十二月

但馬

伊勢
安房

右包紙ニ
天保九年戌十二月廿八日、月番御用人二階堂右八郎より與倉

直介正被相渡外付納置外事

37
白木御文書九番箱 六十番

知行目錄

高貳百斛

谷山中村之内

始羅郡山田上名村之内

薩摩郡山田山田村之内

大崎井俣村之内

高城郡高城城上村之内

曾木里村之内

出水武元村壹浮免之内

樋脇塔之原村七浮免之内

曾木永野村二浮免之内

大崎神領村天神園門之内

谷山下福元村湯屋園門之内

阿多宮崎村稻田門之内

谷山中村萬浮免之内

同所下福元村下大窪門之内

同所同村下玉利門之内

東郷南瀬村三浮免之内

名寄帳在別冊

右考去亥年御趣法替被 仰出外初發より被掛置外處、
分る 御趣意を汲受、抜群骨折致精勤、追々御改革之
詮相立、 御褒美被 思召上外、依之別段之以 思召、
右之通拜領被 仰付外條、全可有務務外、仍如件、

天保九年十二月廿五日

菱 安房

隆觀判

嶋 伊勢

久浮判

嶋 但馬

久風判

三原藤五郎殿

右包紙ニ
知行目錄寫トアリ

33
白木御文書九番箱中 六十一番

知行目錄

高百斛

樋脇塔之原村之内

市來伊作田村之内

野尻江平村之内

小林細野村東園門之内

伊集院郡村貳浮免之内

阿多中津野村坂口屋敷之内

志布志安樂村徳丸門之内

曾木永野村三浮免之内

名寄帳在別冊

右考無據家筋、殊先祖軍功未有之、當時專致精勤、分御用立付、別段厚

恩召被爲 在、右之通當四月廿五日於江戸拜領被仰付
外條、全可有所務り、仍如件、

天保九年十二月廿五日

菱 安房 隆觀判

鳴 伊勢 久浮判

鳴 但馬 久風判

淀山八郎右衛門殿

右包紙ニ
知行目錄寫トアリ

(の1)

天保九年戊戌十二月四日

一御用之儀外間、明五日五半時可有登 城外、以上、

十二月四日

脇坂中務大輔

太田備後守

水野越前守

松平和泉守

松平大隅守殿

(の2)

天保九年戊戌十二月五日

一太守様齊與公今朝五時早目御供揃こゝ、御服紗御小袖

被爲 召、表御式臺より 御出御登 城、大廊下下之

御部屋に被遊御扣、御留守居半田嘉藤次より御坊主組

頭を以、御目付佐々木三藏殿に御届申上置外、左外

御目付大澤主馬殿御寄被申上付、御錠口より内若年

寄小笠原相摸守様御案内こゝ 御通り、御老中御詰有

之於 御座之間、

公方様家慶公被遊 御目見候處、御懇之被爲蒙

上意、御直ニ宰相被任候旨被爲蒙 仰、御請御禮被

仰上御退座被遊候、再黒鷲御杉戸涯こゝ御大老井伊掃

部頭様・御老中御列座、御用番太田備後守様左之通

御書付被成御渡り、

(03)

一

松平大隅守

其方儀正四位下中將ニ付、此上昇進之儀難被及 御沙汰筋ニ候得共、去年稀成御慶事被爲 在、御三家始御續柄之面々等、格別之昇進被 仰出候、就ル者當時御由緒有之、

大御所様より厚被 仰進候御旨有之、旁出格之

思召を以目出度昇進被 仰出候、誠ニ此度ニ限りハ儀

ニ付、向後之家格ニ者不相成儀勿論之事ニ付、此段急

度可申聞旨 御沙汰ニ候、

右付御奏者番本多下總守様・大御目付衆・御目付衆被

相詰り、右被爲濟御引續

大御所様家齊公御附御老中松平伯耆守様・土井大炊頭様御列座、

右大將様家祥公御附御老中堀田備中守様御出席、御拜任之御禮御謁ニ被 仰上候、御奏者番加納遠江守様・

大御目付衆・御目付衆被相詰り、右被爲濟 御退 城、

夫より御大老并御老中ニ御禮 御廻勤被遊候、

但西丸者炎上後ニ別段御上り無之、

天保九年戊戌十二月十四日

一明十五日五時家來壹人 御城ニ可被差出旨御老中ニ被

仰渡り、右ニ付御留守居半田嘉藤次致登 城、御坊主組

頭河野邊修徳を以、御目付一色主水殿ニ御届申出外處、

御同人引進ニ、躑躅之間ニ御衝立之外ニ罷出外

處、同所上之間ニ御用番太田備後守様御出席ニ、口

宣御奉書御直ニ被成御渡り、

(04)

一松平大隅守事爲中將之處、今度宰相位階被 仰出候間、

口 宣等之儀相調り様傳奏衆迄可被申入り、恐々謹言、

天保九戌

十二月五日

脇坂中務大輔 安董判

太田備後守 資始判

水野越前守 忠邦判

松平和泉守 乘寬判

(京都所司代、詮勝)
問部下總守殿

右ニ付御奏者番阿部伊勢守様・大御目付神尾山城守殿・御目付林内藏頭殿被相詰り、依之御大老并井掃部頭様其外兩御丸御老中ニ御禮御使者嘉藤次相勤り、

但中將ニ被任り節ハ、口 宣御奉書之儀老御老中御宅ニ御留守居御呼出こゝ被成御渡り、御承知之上表方御使者を以御請被 仰達り事、

一 太守様齊興公宰相御拜任後、年頭・八朔并五節句・月次其外御登 城之節、營中御禮席等被爲替り御形行左之通、

一年頭御禮被仰上り節、御太刀目録御老中御持出、御白書院御下段下より四疊目下ニ御備御披露、直ニ御敷居内御左之方ニ 御着座、御盃并御引渡御三方ニ御頂戴、御服臺々南北ニ長ク被召置 御頂戴、

但中將御任官中年頭御禮被仰上り節老、御白書院御下段下より三疊目之上ニ御太刀目録御持參、御敷居之内ニ御禮、直ニ御左之方ニ 御着座、御引御盃御引渡こゝ 御頂戴 御復座、引續御服臺出、

東西ニ長ク被召置 御進ミ 御頂戴被遊り事、

一月次 御登 城之節、御黒書院御縁類ニ 御出座、御老中御披露、御敷居内御右之方ニ 御着座、御老中御

取合其外是迄之通ニ、

但中將御任官中月次御登 城之節老、御黒書院御縁類ニ 御出座、御奏者番御披露、直ニ御闕内御右之方ニ 御着座、御祝儀被 仰上候事、

一 若菜ニ付 御登 城、右同斷、
一 八朔 御登 城、年頭御同斷、

一 五節句 御登 城之節、御白書院御縁類ニ 御着座無之、御三家御同様直ニ御下段ニ被爲 入御老中御披露、直ニ御右之方ニ 御着座、御祝儀被仰上、御老中御取合有之、

但中將御任官中御白書院御縁類ニ 御出座、御奏者番御披露、夫より御下段御闕内御右之方ニ 御着座、御祝儀被仰上、御老中御取合有之、

一 歳暮御祝儀被仰上候節老、兩御丸共ニ中將御任官中ニ被爲替り儀無之、是迄之通ニ、

一 御參勤并御暇之御禮被 仰上り節、月次御禮日ニ表別段 御觸立御黒書院ニ御禮被 仰上候事、

但中將御任官中兩御禮之節老御白書院ニ被仰上り、一何そニ付宰相御拜任後

御登 城、御奏者番御調之節老都御送り有之、

右

宰相御拜任後 御差別右之通被爲在御座候條奉承知、

御記録奉行江及申達置候様

御沙汰ニ候、

丑五月

御取次
碓山將曹

右外包ニ
〔朱〕六十二番

太守様御転任ニ付、御勤向等御伺相成外御書付并御書取等之寫、

右ニ付江戸詰御家老衆御問合書寫

〔朱〕此包中御家老御問合書不相見得候

(の1)

(表紙)

追 録 舊 記 雜 録 卷百六十三	齊 宣 公	自 天保九年十二月
	齊 興 公	至 弘化四年十二月
	齊 彬 公	

40

白木御文書九番箱中 六十三番

(朱)「六拾三番」
天保十年

太守様御轉任ニ付、白綾被遊御着用度御伺相成り、御書付并御書取ニ御着用不苦旨被仰渡、右ニ付江戸詰御家老衆御問合書壹通、

右一冊ノ蓋紙ニアリ

寫

私十代之祖大隅守家久代、官服等近衛家より御讓相成、

(朱)「御書取 書面内意之通、白綾着用不苦候事、

同人宰相拜任後白綾致着用外、此度宰相被 仰出外付の

右同 別紙被申聞候白綾之儀ハ、五所紋有之候品ニ而、惣辨紋柄有之品ニハ無

41

白木御文書九番箱中 六十四番

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

(の2)

悉、先代之通白綾相用申度、此段御内慮相伺外、以上、

之儀と存候事」

十二月廿八日

御名

(朱)「口裏」
白綾御着用被仰渡り付而之事

正月廿九日到來

年頭中急便」

此節 御轉任付、白綾被遊御用度旨、別紙寫之通御内慮被遊御伺外處、

御着用不苦旨、御書取を以別紙寫朱書之通、御用番太田備後守様より舊臘廿九日被仰渡り、此段爲御心得申越外條、御記録奉行等ニ被達置外儀若何分可被取計外、以上、

亥正月三日

猪飼 央

鳴津但馬殿

島津伊勢殿

菱刈安房殿

右一冊トス

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保十年正月十一日 齊興御判

齊興公御譜中

天保十年己亥二月五日^三 上使河野權右衛門、賜^三御

鷹之鶴於齊興^一、

○十三日以 上使太田備後守^(資始)、賜^レ告、賜^レ品如^レ例、

大御所家慶公以 上使土井大炊頭^(利厚)、賜^レ品、

右大將家定公亦以 上使堀田備中守^(正尊)、賜^レ品如^レ例、十

五日齊興登^レ營拜^三謝之^三蒙^三懇命^一、且被^レ賜^レ馬如^レ例、

○三月六日發^三江府^一、五月三日午上冠着^三鹿兒島城^一、

43 御系圖 久光公御子

一女子二人

一女子

於哲 於珍 入來院恰公寬室

天保十年己亥二月二十日生於重富第、母島津山城忠

公女、

文久二年壬戌七月四日卒、法名觀室妙音、

44 白木御文書九番箱中 六十五番

太守様御國許^レ之御暇被 仰出、御禮被 仰上^レ段者別

紙申越通^レ、然處是迄月次御席^三候得者、御白書院^二の

御禮被仰上^レ得共、此節より御黒書院^レ御引上ケ^二の御

禮被仰上^レ儀者、舊冬

宰相御拜任被爲蒙

仰^レ御廉^二の、右通御手重之御取扱相成^レ段、御留守居

申出^レ付、御記録奉行^レ及相達、此段申越^レ條、其元御

記録奉行等^レ相達被置^レ儀共者、何分及可被取計^レ、以

上、

亥二月廿二日 調所笑左衛門

鳴津但馬殿

鳴津伊勢殿

菱刈安房殿

45 旧御番所御文書三番箱中

口裏^二

仰 二天保十
廿四

おつまの宰相より、今度昇しんの御禮として、黄金百兩・

御きぬ三十疋しん上おハしまし^レ、ひろう申て^レへ者、

おもしろく思しめし^レよし、よくこゝろえ^レて申せ^レとて

外、御こゝろへりてつたへさせられりへくり、かしく、

御いまの御局へ
る申給へ

箱蓋ニ
齊興公参議女房奉書

白木御文書九番箱中 六十六番

口裏ニ
松平大隅守江

松平大隅守

宰相被 仰付りニ付、正月二日登

城之節、御太刀目錄老中披露、

一御盃并引渡三方ニ被下之、

右之通向後可被心得り、

右包紙ニ
御達書

口裏ニ

松平大隅守江トアリ

松平大隅守

其方儀正四位下中將ニ付、此上昇進之儀老難被及御沙汰

筋ニ得共、去年稀成御慶事被爲

在、右ニ付御三家始御續柄之面々等、格別之昇進被 仰

出外、就る者當時御由緒有之、

大御所様より厚被

仰進り御旨も有之、旁出格之

思召を以、目出度宰相昇進被 仰出外、誠ニ此度ニ限り

外儀ニ有、向後之家格ニ老不相成儀勿論之事ニ外、此段

急度可申聞旨、御沙汰ニ外、

右一通也

口裏ニ

松平大隅守江トアリ

松平大隅守

以來月次ハ御黒書院御縁類ハ罷出老中披露、御敷居之

内 御右之方着座、老中及御取合退去可被致外、

但溜詰松平近江守次松平三河守前ハ可被罷出外、

一若菜御禮も右同斷、

右之通可被相心得り、

右一通也

口裏ニ

松平大隅守江

松平大隅守

以來五節句・八朔共御白書院老中披露、尤八朔御太刀

目錄老中持出外、

一右御禮之節御敷居之内ハ罷出老中披露、直ニ 御右之

方着座、老中及御取合退去可被致外、

但溜詰松平近江守次松平三河守前に可被罷出り、

右之通可被相心得り、

右一通也

三通包紙ニ 御達書トアリ

右外包ニ

(余「六十六番」)

太守様 宰相就 御昇進、御用番様を御達之書付四通トアリ

47の1 白木御文書九番箱中 六十七番

一門中に

我等常く公務者素も國政・家政専心掛合精勤り處、今般厚以 思召稀成被任宰相、家之面日此事ニ、此後國政等不行屆時者、對

公邊無申譯りニ付、以來下知を加り事ニ、各方も相應成私領もりへ者、家政萬端行届り様被心掛、定例ハ勿論俄之役目相當りゆゑも、無吳儀速ニ被勤り様、かねて心掛可被申り事、

右一通

我等常く公務者勿論、國政并家政専心掛り處、今般厚以思召稀成被任宰相り、誠ニ家之面目此事ニ、抑兼く加判之列諸事心を用、國政等行届り故、我等精勤之廉も顯り外事と存り、若此後政事向不行屆儀有り之りハ

公邊に對し無申譯りニ付、

御先代被居置り御規定、其以來追く申渡り品々、到後年不戻り様、猶厚申談可取計り、

家老中に

右一通

右包紙ニ

御筆仰出トアリ

47の2 御筆を以被 仰出候御書面之内、三拾ヶ年餘 御精勤被

遊り御文字書加、諸向に申渡り様 御沙汰ニ候、

御取次

五月 碓山八郎右衛門

右包紙ニ 御沙汰書トアリ

47の3 我々三人

御休息所に被爲 召り段承知仕、安房ニ者痛所有之、唐子之問に扣居、但馬・石見

御前に罷出り處、舊臘 御昇進之儀ニ付、段々 御意之

趣被爲 在、其上 御筆を以御別紙之通被 仰出、猶又

御沙汰被爲 在り者、表向

公邊より之御書取ニ者 御由緒等々有之、 御任官被

仰出り筋、 御書面ニ得共、御懇意被申上り御小納戸

頭取之内より、御内實之儀調所笑左衛門迄極密洩達有之
外者、御家督後御國政御行届、萬端穩成との御譯合、
殊に三十ヶ年あまり御精勤被遊、旁之御譯合之由り得共、
其通細、

公邊御書取表難被遊由、右之趣御内、御直に奉承知り、
依之後年爲見合此段表記置り、左りる三人再御用部屋に
罷出、碓山八郎右衛門に相付御請御禮申上置り、尤御側
詰若年寄・大目附に老水仙之間之格ある、於御家老座拜
見有之り様申達、諸向に老毎之通御家老中致添書、御一
門方を始月次御禮罷出り面、并諸士・諸郷迄表、夫、御
先例通申渡、

御本書老御記録奉行に相渡り事、

亥五月

右一通也

右外包

〔采〕六拾七番

御筆仰出并御沙汰書等四通トアリ

白木御文書九番箱中 六十九番

久

右老二男以下久・郷之二字、依人被被相用旨被 仰付
置り得共、此節願之趣有之、別段之 思召を以、二男

迄實名右久之字可被相用、依 仰如件、

天保十年九月十五日

(今和泉家、忠禱)
嶋津安藝殿

嶋津 登

續印判
久備判

49の1

白木御文書九番箱中 七十番

知行目録

高五百斛

曾木里村之内

出水下識村之内
(知脱之)

同所同村之内

大口大田村之内

栗野北方村之内

串良岡崎村之内

大村下手村之内

薩摩郡山田山田村之内

百次百次村之内

串良岡崎村之内

谷山和田村之内

伊集院苗代川村之内

同所同村之内

同所同村之内

出水下知識村之内

曾木里村之内

谷山下福元村庄屋浮免之内

東郷南瀬村四浮免之内

志布志月野村平瀬門之内

同所同村徳丸門之内

百次百次村庄屋浮免之内

帖佐西餅田村柵門之内

高原麓村内門之内

鶴田神子村下大迫屋敷之内

市來養母村永作浮免之内
名寄帳在別冊

右考今般

宰相御轉任付御用掛相勤、別々致出精付付、別段之

思召を以右之通拜領被

仰付外條、全可有所務外、仍如件、

天保十年十月朔日

調所笑左衛門
廣郷判

鳴津登
久備判禁印判

菱刈安房
隆觀判

鳴津石見
久浮判

鳴津但馬
久風判

猪飼 央殿

知行目錄

49の2

高貳百斛

市來養母村之内

同所同村永作浮免之内

始羅郡山田上名村庄屋浮免之内

川邊小野村之内

鹿兒島郡吉田本城村之内

志布志蓬原村之内

大村上手村之内

阿多中津野村庄屋浮免之内

大崎井俣村新平良屋敷之内
出水下知識村之内

白木御文書九番箱中 七十一番

同所武本村三浮免之内

諸縣郡高城大井手村庄屋浮免之内

曾木里村之内

大口青木村四浮免之内

名寄帳在別册

右者今般

宰相御轉任付御用掛相勤、別由致出精付付、別段之

思召を以、右之通拜領被

仰付外條、全可有所務外、仍如件、

天保十年十月朔日

調 笑左衛門
廣郷判

嶋 登
總印判
久備判

菱 安房
隆觀判

嶋 石見
久浮判

嶋 但馬
久風判

碓山八郎右衛門殿

御時服二

一 緋御熨斗目一

一 白綾五所葵御紋織出一

右二共御裏御中綿解放

一 淺黄服紗包

一 桐白木箱入萌黄絹真田緒付

右者

齊興公宰相御轉任後、天保十年亥正月二日年頭御祝儀

被 仰上外節、

大樹家慶公被遊御拜領外付、御納戸御讓物之内致格護、

後年紛敷無之樣可記置者也、仍如件、

天保十年亥十月十六日

笑左衛門廣郷

登 久備

安房隆觀

但馬久風

御納戸奉行

50の2

白綾御官服一

但十文字御紋織出

一 淺黄服紗包

一 桐白木箱入萌黃絹眞田緒付

右者

齊興公宰相御轉任後、天保十年亥正月二日御登城之節、被爲 召付付、御納戸御讓物之内致格護、後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

天保十年亥十月十六日

笑左衛門廣郷

登 久備

安房隆觀

但馬久風

御納戸奉行

51 齊興公御譜中 天保十年

冬十二月六日應 徵南部伊勢守(信順)代齊興一登レ營、忝三

大樹家慶公賜三刀備前長船清光一腰、見レ賞三齊興會獻三西丸修築費

金一也、

52 白木御文書九番箱中 七十二番

御記録奉行

(重兼男、信順)南部伊勢守様末高輪鬻之渡御住居之内、御妾腹御出生之朝様御事、此節鳴津但馬殿實子之筋被仰付、讚岐(實典)

殿嫡子鳴津又四郎殿ハ縁組被仰付旨、當九月十六日但馬殿ハ内達有之、讚岐殿ハ及御内々御達相成り、尤

お朝様御出生年月日、又御母俗生等別紙之通外間、此旨帳面可記置事、

十二月

南部伊勢守様末高輪ハ被爲 入内御妾よき妊娠ニ由、當亥二月十九日朝五ツ時比 御女子様御出生、御名お朝様と申上り、

一 右よき事

公義御廣敷伊賀之者、渡邊昇右衛門娘ニ由、當年十九歳ニ罷成、お朝様御誕生後致御暇、以來不通之者ニ

候事、

右包紙ニ天保十年亥十二月七日石見殿ハ五代孫之丞五被成御渡、白木御文書九番箱へ納置外事トアリ

53 白木御文書九番箱中 七十三番

吉書

一 神社佛閣修造興行事、
一 可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保十一年正月十一日 齊興御判

54 白木御文書九番箱中 七十四番

口裏

松平大隅守に

唐物技荷御制禁之段者、前より度々被 仰出有之、別
ゐ安永・享和之度嚴重に相違ひ趣も有之、且又近年琉球
國爲救助、唐物類長崎表賣捌方被申立外節々、拔荷取締
方之儀、嚴重に可被申付旨相違置り、然處近頃薩州邊密
賣多く、同國鳴々等には漂着之唐船にも疑敷筋有之、鹿兒
嶋邊に唐物仕入に罷越ひ者も有之、并長崎表交易代り物
に可相成松前産之俵物類、薩州に抜ケり儀も有之哉に相
聞、弥相違無之を以て者以外之事に、前々被 仰
出之御主意行届り様厚世話被有之、領分中者勿論屬嶋并
琉球國共密賣買之筋相止り様、嚴敷取締可被申付り、若
向後右之風聞於有之者遂吟味、急度
御沙汰之品も可有之外條、可被得其意外、

右年月日ナシ、七十三番ノ次ニ載置也

55 齊興公御譜中

天保十一年庚子三月十一日

近衛内府忠熙公賜ニ官服於齊興一、遣ニ使者一贈ニ之於齊興旅
次伏見驛一、

56 御系圖 玉里久光公御子

一女子三人

一忠徳

壯之助 又次郎

天保十一年庚子四月二十一日生於重富第、母島津

山城忠公女、

安政五年戊午十二月升襲ニ大統一、

57 白木御文書九番箱中 七十五番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥

加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相

勤候事、

一乍恐奉對

齊興様 齊宣様 齊彬様、毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣、堅可相守候、

若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中_レ之掟并諸事無臆貞親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者

神文略

天保十一年庚子五月八日

小祿親方

良恭判

齊宣公御譜中

天保十一年庚子冬十二月四日齊興代登_レ城、於_二白書院

縁類_一老中列座、太田備後守傳_レ命曰、當今以_レ有_二由緒_一

故特典以見_レ彼_二正四位上_一、

白木御文書九番箱中 七十六番

寫口裏ニアリ

(島津齊興)
松平大隅守

(島津齊宣)
松平溪山事、御由緒柄格別之 思召を以、正四位上被

仰付之、

右一通

(02) 中將様御位階御昇進付、御達振之儀、別紙御書取寫之通、

於御白書院御縁類御老中様御列座、太田備後守様より

太守様被遊 御承知_レ付、御役人中_レ申渡、此段申越_レ

條、其元御役人中_レ被仰渡_レ儀とも、何分表御取計可被

成_レ外、以上、

但御記錄奉行_レ者別段相達置_レ、此段爲御心得_レ、

子十一月五日

(久遠)
鳴津主計

鳴津但馬殿

鳴津石見殿

菱刈安房殿

鳴津 登殿

猪飼 央殿

右ノ口裏ニ朱力キ

(朱) 「中將様御位階御昇進付御達振付而之事」

十二月廿九日到来

急飛脚使」

右外包ニ左ノ如

(朱)「七十六番」
天保十一年子十二月四日

中將様正四位上御位階御昇進_二付、御用番様_レ御達振御書付迄

通、右_二付江戸詰御家老衆御問合書巻通、子十二月晦日安房殿

平田助之進_レ被相渡、旁帳ニ写取、御本書之儀ハ町田二郎四

郎差上之、右写白木御文書九番箱_二納置_レ事

吉書

- 一 神社佛閣修造興行事、
- 一 可專勸農事、
- 一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保十二年正月十一日 齊興御判

天保十二年辛丑正月二十五日以 上使太田備中守(實受)、

賜告、且賜品如例、

大御所家齊公以 上使井上河内守(正道)、

右大將家定公以 上使堀田備中守(正篤)、各賜品如例、

二十八日齊興登城拜謝之蒙懇命、且被賜馬

如例、

○閏月十九日齊興發江府、三月十二日着鹿兒島、

中將様御位階御昇進付、位記口 宣等御頂戴之御使、

物頭之場之川上拾郎左衛門江被仰付、京都江被差越

外處、先月五日徳大寺様御亭江御官物相納、口 宣等無御滯御渡有之、御献上物等相濟外、尤御敘位日之儀、每表於江戸被願出外日 宣下爲有之筋相成事外得共、此度者觸穢中其通難被成、先月四日被敘外筋相成外趣、傳奏衆雜掌澁賀右馬大元より相達、且拾郎左衛門事

近衛様江 御目見被仰付、勤方相濟、先月廿三日御當地江到着之筈外處、御日柄之儀故、八後於 高輪御殿御頂戴被遊外、右付則日御留守居御使を以、其段御大老様并兩御丸御老中様方江被仰達外、

一 京都御所司代牧野備前守様江御禮之儀者、拾郎左衛門着當日京都江飛脚差立、

中將様より御書を以被仰達外、尤

近衛様を初其外様江御禮之儀表御先例之通可取計、女房奉書被相渡外儀ニ付る者、猶又都合能可取計旨御留守居申越外、

一 右付月次御禮罷出外面く、席く謁る外

御三殿様江御祝儀申上外、其許御祝儀之儀者何分表可被申談外、

一口 宣等其元江被差越外儀者、女房奉書御到來之上、

一所ニ可差越_レ、

右申越_レ條

御内證様ニ可被申上_レ、先以無御滯 御頂戴被爲濟、
恐悅御同意奉存_レ、以上、

但觸穢中ニ付、先月四日被敍_レ筋相成_レ趣、御記録
奉行ニ被申渡置_レ儀共、何分_レ可被取計_レ、

丑二月三日

嶋津主計

嶋津但馬殿

嶋津石見殿

菱刈安房殿

島津 登殿

猪飼 央殿

(朱)「口裏ニ朱力キ

中將様御位階御昇進付、位記口 宣等被遊御頂戴_レ付_レ之事

二月廿七日晝到来

式日中急便」

63

白木御文書拾番箱中 一番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥
加不淺云々略、

外ヶ条例ノ通故略

袖文略

天保十二年辛丑四月二十四日

國吉親方

朝章判

64

御系圖 玉里久光御子

— 忠徳

— 久治

初久中 篤次郎 右近 圖書

天保十二年辛丑四月二十五日生於重富第、母島津忠

公女、

爲島津圖書久寶養子、

明治五年正月四日卒、神號靈文新治彦命、

65

白木御文書九番箱中 八十番

口裏ニ

安房殿_レ被相渡_レ御書付之寫

御臺様御筆

御懸物 一幅

護國權現之御文字

一表粧牡丹唐草金欄中縁もる地葵御紋散し風帯一文字綾
地龍之模様軸唐木

一紅もる不洗包

齊宣公御筆御銘書金泥

一 白木内箱

但縁いかけ銀金物絹眞田緒付紫不洗包

齊興公御筆御銘書金泥

一 右同二重箱

但いかけ銀金物絹眞田緒付紫不洗包

齊彬公御筆御銘書金泥

一 右同三重箱

但いかけ銀金物絹眞田緒付紫不洗包

齊宣公御筆御銘書金泥

一 黒塗四重箱

但泥縁銀金物絹眞田緒付紫不洗包

一 箱蓋裏こ

齊宣公御由緒書有之

右に御家老切封

一 右同五重箱

但泥縁銀金物絹眞田緒付紫不洗包

一 薄溜塗外家箱

但金物赤かね絹眞田緒付

右に御側御用人・御側役之間切封

右考高輪

御神殿殿に御額御文字右之通

御筆を以被相下り付、寫を以御備こ相成、御本書考御懸

物こ御取仕立、護摩所に被納置り條、別る入念龜抹之儀

無之様可被致格護置り、左りる壹ヶ年一度ツ、致虫干等

り様被仰付り付、當夏虫干之節方以來黒塗四重箱こ御家

老切封、外家箱考御側御用人・御側役之間致切封り様被

仰付り條、到後年無間違様取扱可有之旨、天保七申二月

十九日

中將様被 仰出り付、寺社奉行に申渡置り間、以來其通

相心得り様被仰付り條、寺社奉行其外向こに可申渡り、

五月

安房

右包紙三十八番一

天保十二年丑五月十四日安房殿を坂本金十郎に被成御儀、白木御文書九番箱に納置り事

66

雜抄

齊宣公御筆之寫

嘶にて申聞り答ながら、事長き故書付りて左に申聞り、

我等事先達龜鶴問答を認めりてより、猶又致工夫り處、兎

角人君たる者ハ難勤大職と心付り、其故ハ大身・小身・

庶人といへとも、人臣たる者ハ其身一身の事のミにてり、もし心得ちかひある時ハ朋友と申者あつて、互ニ議論に及べハ其心得違ひの事も取直し安し、人君たる者ハ朋友と申者もなく皆人臣のミ、朝夕罷出ても、君の善惡の議論をいふことなし、しかあれハ人君の心得ちかひも心つかす、弥増長して後にハ民のくるしミを受けるに到るゆへに、人君たる者ハ小事を慎むへし、其ゆへハ事ハ小事より起るもの也、塵もつもれば山となるのたとへのごとし、此後も致工大りては、猶以國家を治むること恐ろしく相成り、奥向之人々ハたとへハ朋友も同事にて、朝夕罷出る者なれハ、わか惡敷ころを何とぞ無遠慮いひ聞せり様ニ存り、日本にてハ唐土とちかひ國政之役者大職のあつかる所なれハ、諸役人のかゝはる所にあらず、我が身の上の事ハ國政と申にてハ無之、我身の事にり得者、誰ニも委心付りものハ無遠慮申聞りても咎不可有、其申所の善惡ハ此方にて用捨する事なれハ其所ハかまひなく、何とそ身の上之儀承り度り、我も人ニり得者何もかもよきこと計りハなく、我心付り處ハ取直しりへ共、あしき事ハわか身ハ身にて見えぬ者にてり、困窘之脇目八目のたとへと同し、とかく人君のよき所ハ申上り者多く、あ

しきところハ申者少し、是人君の第一毒ニあり、能ことノミきく時ハ猶驕慢つのり、放心に到る者なり、よき所を申上り事故聞敷り、よき所ハ人君のしらでもよろしく、おのつから善ハころに知る也、惡き事ハ夢にもしらぬ事あるなれハ、あしきを申上り様に致度り、戰場ニある一番鎗と申とも是にハ及申聞敷り、第一の忠と我等ハ存り間、何とぞ承度り、龜鶴問答書出しりまでニある者、表向のミにて心かゝりぬれハ、右之趣を相晰し、老若によらす我身の上ハ申聞り様ニ、それに出過り杯と遠慮には及す、國家のためなり、近年國中の者共苦寒いたしり者君の知る所なり、早竟我等不徳の所大に成立り得者、近年中ニ素本之通りに取直し不申りある者叶ぬ事にてり、夫も何故かと申せば、我が一身にあることなれハ、心得ちかひを直し度存り、是迄とハ事かはり、只ひたすらに心懸り心得るり問相咄り、其所を能く相考り上ニある若申かねりハ、字のよしあしにハ無之の間、書付ニる目立ぬやうニ差出り様致度存り、是又奥向者表方庶人の目當となる所なれハ、禮儀を不亂、動向ハ勿論諸事こいたり手本となるべき様ニ心掛可申、ケ様ニ成立り得者心得違ニる只かたく相成、御前詰にもかたく見えりてハ不宜、

敬して和し、和して敬する所第一の事ニなく、其所能ク相考可申外、此旨相咄り惡書宜敷様ニ披見可有之外事、不備、

天保十二年三月

67 齊宣公御譜中

天保十二年辛丑春三月二十日 上使松平玄蕃頭忠惠來高輪邸、賜_二

文恭廟公_{家齊}遺物短刀_{相模國一腰}、

68 全御譜中

○十月十三日病薨_二於江府高輪邸_一以十月十日為忌日、享年六十有九、法號大慈院殿舜翁溪山大居士、二十七日

幕府遣_二牧野山城守節成_一、贈_二香燭銀五十枚_一、

○十一月十七日

大慈公靈櫬發江府_{以下文為史臣之辭從旧例}翌年壬寅正月八日入藩内出

水、十二日入麴府福昌寺、八十五日行葬送之儀、是日

齊興公詣福昌寺_一燒香拜杓於客殿、及暮 靈櫬將出自

客殿趣葬場、會

齊興公病遽起而不能奉 神主、於是一門島津安藝忠剛

代 齊興公奉 神主、從 棺前廻葬場三遍、畢授木主於龜者僧、而就

祭主齊興公位於發心門側茅筵之上坐焉、御代之太刀其他法式悉與 齊興公、躬親行禮莫一異矣、

謹按若 公在江府、不能躬奉神主、則無御代之太刀、

是先例也、然今如 齊興公在國親奉神主、則宜有御

代之太刀之式也、

○自二十日至二十四日修中陰法事於福昌寺、

蓋

公之寢_レ病也、禱禳醫藥莫所弗盡力、且歸葬薩府其殯

殮之法祭祀之典悉莫不如

先公之例、今欲記其詳、莫文獻以徵之、夫於國之大

故大禮、事實闕略如此、宗高把筆至此、可勝慨歎哉、

69 齊興公御譜中

先_レ是以_レ今秋率_二疏使_一參府_上故、請_レ借_二金米_一於

大家_上、今茲辛丑七月二日應_レ徵、秋月筑前守種任代_二齊

興_レ登_レ城、拜_レ借_二金_一二萬兩_一之許_上、月番老中堀田備中

守_レ、傳_レ之、

天保十二年十月十三日 父公病薨於江府高輪邸、十一月十七日 靈柩發江府、翌十三年正月十二日入麿府福昌寺、十五日行送葬之禮、事詳於 父公譜、

松平大隅守殿

間部下總守

井上河内守

二通共包紙ニアリ

松平大隅守殿

外包紙ニ

(朱)七番

安房殿方町田二郎四郎被成御渡旨、天保十二年丑十二月十八日致承知、白木御文書拾番箱へ納置外事

詮勝判

同氏溪山卒去之段及

上聞外處、可為愁傷と被 思召り、此由可相達旨、依

御意如此り、恐々謹言、

十月廿七日

眞田信濃守

幸貫判

土井大炊頭

利位判

水野越前守

忠邦判

松平大隅守殿

71の2 同氏溪山卒去之段及言上外處、可為愁傷と被 思召り、此由可相達旨依 御詮如此り、恐々謹言、

十月廿七日

井上河内守

正春判

間部下總守

知行目錄

高五拾斛

蒲生上久徳村之内

川邊平山村之内

帖佐豊留村米満門之内

清水姫城村今吉門之内

曾於郡松永村華山屋敷之内

名寄帳在別冊

右者御改革初發より被掛置、年々三都江被差出、晝夜骨折別る御用立外付、追々當御役迄被仰付、就中極御内用懸心頭御都合取計、近比大坂居付迄被仰付、拔群

致精勤外付、別段之以 思召、右之通當二月十二日於大坂拜領被 仰付外條、全可有所務外、仍如件、

天保十二年十一月八日

猪 央 尚敏判

鳴 登 久備判

菱 安房 隆觀判

鳴 石見 繼印判 久浮判

鳴 和泉 久風判

高崎金之進殿

73 白木御文書拾番箱中 三番

(義弘) 松齡様

御肖像

御一躰

右者從

義弘公泉州堺居住田那邊屋道與江御直拜領被仰付置外

處、攝州住吉邊ニ草庵致建立、號松齡院 御安置申

上置外處、其后道與子孫京都相國寺之内林光院江又々

御安置申上置外段、

宰相齊興公被 聞召上、此度右 御肖像御畫像江御引替被遊御取返外、尤 松齡様御寺伊集院妙圓寺之御事外得共、別段厚 思召之御譯被爲 在、御手許御取計ニ、此節

御歸國之上大乘院 御内佛殿江被遊 御安置、勤行被

仰付外條、永久無怠慢到後任聊不可有緩疎之狀如件、

天保十二年十一月九日

猪飼 央

繼印判 尚敏判

鳴津 登 久備判

菱刈安房 隆觀判

鳴津石見 久浮判

鳴津和泉 久風判

大乘院

74 齊興公御譜中 在十二年十一月九日

慶長五年

松齡公自關原役ニ退至泉州ニ也、堺浦今井道與者爲ニ相

識ニ故、潛入ニ其家ニ、道與待遇懇厚、因得免ニ危急ニ焉、

後道與有、所請

公賜肖像、及公歿後、道與築庵安肖像、號松齡

院、而逮其曾孫某爲僧、爲京都相國寺内林光院住持、

移肖像於林光院、大玄公之時元祿二年佛餉料年々寄附

白銀十枚之事、則詳載于其譜焉、齊興今聞其肖像仍

在林光院也、以

公畫像而使吏奉肖像下、自京都、而安之於廳府大

乘院、命住持祭祀莫怠如左令書、

75 白木御文書拾番箱中 四番

御上下 一具

御紋桐

嶋津和泉殿(久風)

右者別段之以

思召御家老職被 仰付外處、多年致精勤、殊御勝手方に

被掛置、當時專引請出精相務、旁

御満足ニ被

思召上候、依之出格之

思召を以、右之通拜領被 仰付、右桐御紋嫡々代々定紋

同前相用候様、於

御前碓山將曹御取次を以、三月十七日被、仰付候事、

右包紙

天保十三年寅三月十八日石見殿、得能彦左衛門江被成御渡、白

木御文書拾番箱江納置之外事

76 白木御文書拾番箱中 五番

立久公御畫像 壹幅

一風帶并一文字青地金欄

一中縁白地金欄金筋立

一上下并脇縁繻珞

一紫絹啄木

一かな軸七子地御紋付唐草毛彫

一淺黄羽二重袷不洗包

一内箱中眞塗金粉銘書

一環黒々銅絹眞田緒付

一外箱薄溜塗朱漆銘書

一木綿眞田緒付

右者從往古

立久公御畫像市來龍雲寺江御納之處別、御古ひ、御面形

而已分明被遊御知、其外者凡之 御様子迄被爲殘外段

齊興公達

御聽、尚此上御損^レ及^レ者全被爲及御傳失、御遺憾之御事被 思召上^レ、依之今度奥醫師格奥繪師馬場伊歲^ハ臨寫被仰付、御衣紋等御知無之分者、其時代相應之御行粧有職家伊木七郎右衛門勘考之趣、猶又被加御吟味、御紋所之儀者、永正七年記錄見聞諸家紋と題號之本^ハ有之御家紋被相用、全御成就^ニ付、古代 御畫像之儀者寺社方格護被仰付^レ條、到後年無龜抹可被致格護^レ、左^ハ古代本行御寫之 御畫像龍雲寺^ニ被納置^レ付、是又後年無龜抹致格護^レ様可被申渡者也、仍如件、

天保十三年三月廿一日

寺社奉行

鳴津和泉

繕印判
久風判

77 齊興公御譜中

先^レ是

大樹家齊公讓^ニ職於

世子家慶公^一、

家慶公任^ニ征夷大將軍^一、今茲天保十三年壬寅中山王遣^ニ正使浦添王子朝意・副使座喜味親方盛普^一賀^レ之、正使六月

五日、副使六日着^ニ鹿兒島^一、八月二十一日副使盛普發^ニ鹿

兒島^一、二十二日齊興率^ニ正使朝意・發^ニ鹿兒島^一、十一月八日着^ニ江府^一、正副使亦同日着^ニ江府^一、翌年三月二日正副使歸到^ニ鹿兒嶋^一、

78

御系圖 玉里久光公御子

一男女五人

一包次郎

天保十三年壬寅七月晦日生於重富第、母島津忠公

女、十四年癸卯四月七日夭亡、法名曉夢法大、

一女子

於寬 喜入多門久博室

天保十四年癸卯閏九月七日生於重富第、母同上、

文久二年壬戌七月二十七日卒、法名金莖妙蓮、

79の1

白木御文書拾番箱中 六番

御官服

一御差貫

但御色緯白御紋柄烏襷

一御表袴

但御紋柄窠霰

一御袍

但御紋柄龍膽立踊

一桐箱蓋表御官服と御銘書有、蓋裏御拜領之件并右御品

く御入付之譯記有之、

右孝天保十一年子三月十一日於伏見驛、從

近衛内府忠熙公以御使者

齊興公被遊御拜領外付、御納戸御讓物之内に致格護、

後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

天保十三年寅八月廿日

一御三所物地赤銅れいしの色繪裏咄金

一御罌二重上下共金着

一御切羽右同斷

一御縁赤銅七子

一御鐙赤銅磨

一御頭角

一御柄鮫白黒糸巻

一御鴟目金

一御鞆黒

一御下緒紫

一御小刀壽命

一御袋紺緞子裏白ぬめ緒紫糸打房付

右孝天保十年亥十二月六日

齊興公爲御名代、御一類中様御壹人御登 城外様被

仰渡、御名代南部伊勢守様御登 城之處、西丸御普

請付御上金御用途ニ表相成外趣を以、從

大樹家慶公被遊御拜領外付、御納戸御讓物之内に致格

護、後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

天保十三年寅八月廿日

登 久備 央 尚敏

79の2

右全包中

御刀

備前國長船住清光
長貳尺三寸七部半
代金貳拾枚折紙有

一腰

御納戸奉行

和泉久風

石見久浮

安房隆觀

登 久備

央 尚敏

齊興公御譜中 九十三年九月

先考大慈公之薨也、
(續書)

有邦公遷祧廟、則祭祀宜從他祧廟例、故今更換祭

安房隆觀

石見久浮

和泉久風

御納戸奉行

80 白木御文書拾番箱中 八番

花崎

御記錄奉行

(越前二男家、久倫)
嶋津鞆負

右者此節二男致出生外付、家號拜領被仰付被下度、左外
嫡家由緒之譯を以、花崎家號内願之趣有之外付、以來
二男以下右之通家號拜領被 仰付外間、此旨帳面可記置
外、

八月

石見

右包紙
(卷八番)
天保十三年寅八月廿八日石見殿を東郷半兵衛に被成御渡、白木

御文書拾番箱へ納置之外事

資一如左、

白木御文書拾番箱中 九番

口裏
石見殿を被相渡り御書付之寫

一 御銀百五拾枚

右者

有邦院様御佛餉高百五拾石被召附置り得共、此節引替
右之通御銀被召附、爲利足御銀壹貫目ツ、年々可被相
渡り、

一 御銀百枚

右者

(續書)
淨岸院様御佛餉高百石被召附置り得共、此節引替右之
通御銀被召附、利足として御銀三百六拾壹匁貳分ツ、
年々可被相渡り、

一 御銀拾枚三拾七匁三分九リ壹毛

右者

(續書)
瑞仙院様御佛餉米三石被召附置り得共、此節引替右之
通御銀被召附、利足として御銀三拾九匁貳分六リ壹毛
ツ、年々可被相渡り、

一 御銀貳拾五枚

右者

(吉費御室)

月桂院様御佛餉高貳拾五石被召附置り得共、此節引替

右之通御銀被召附、利足として御銀九拾目三分ツ、年

々可被相渡り、

一御銀拾八枚四匁九分八リ五毛

右者

(繼豐御室)

妙心院様御佛餉米五石被召附置り得共、此節引替右之

通御銀被召附、利足として御銀六拾五匁四分三リ四毛

ツ、年々可被相渡り、

一御銀拾枚三拾七匁三分九リ壹毛

右者

(繼豐御室)

嶺松院様御佛餉米三石被召附置り得共、此節引替右之

通御銀被召附、利足として御銀三拾九匁貳分六リ壹毛

ツ、年々可被相渡り、

右之通被仰付、

御判物御書附并御家老添書之儀者只今之通被召置、銀

子御物に被差置、爲利足右之通年々可被相渡り條、右

利足なる御佛餉等差上り様被 仰付り、左り得者

御六靈様御佛前廻、其外都る之儀格別減少之筈り得共、

右利足を以相濟り様被仰付り、御掃除等之儀者其住持

々より無怠慢仕り様被仰付り、御高御米之儀者都る表

方は被差出り様被仰付り、左り而

瑞仙院様

妙心院様

嶺松院様は是迄被召附置り御銀之儀ハ今成被召置り、

右之趣福昌寺・淨光明寺・良英寺は被申渡候儀共可被

致取扱旨、寺社奉行に申渡、可承向に及不洩様可申渡

り、

九月

石見

安房

右外包

天保十三年寅九月六日月番御用人小笠原轍と與倉直介に被相渡

り間、納置り事

齊興公御譜中

天保十三年壬寅十二月朔日以三月次之賀儀に登り城、用番

老中堀田備中守、使(正憲)大目附神尾山城守、傳(元孝)令曰、

齊興宜賀儀後滞 城、既而賀儀罷、齊興於白書院緣

頰、忝下以

大家特旨一拜中、敍正四位上、堀田備中守、傳之命、

旧御番所御文書四番箱中
口裏
口 宣案

上卿 德大寺大納言

天保十三年十二月一日 宣旨

正四位下源齊興朝臣

宜敍正四位上

藏人左少辨兼右衛門權佐春宮大進藤原資宗奉

右一通

薩摩宰相

上卿 德大寺大納言

職事 日野左少辨

右一通

正四位下源朝臣齊興

右可正四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宜申
榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

天保十三年十二月一日

二品行 中務卿韶仁親王宣

正四位下行中務大輔臣卜部朝臣行學奉

正四位下行中務少輔臣藤原朝臣隨資行

正二位行權大納言兼右近衛大將臣(花山院)家厚

正二位行權大納言臣(醍醐)輝弘

正二位行權大納言臣(德大寺)實堅

正二位行權大納言臣(廣幡)基豐

正二位行權大納言臣(三条)實萬

正二位行權大納言臣(中院)通知

正二位行權大納言兼左近衛大將春宮大夫臣(廣司)輔熙

正二位行權大納言臣(清水谷)實揖

正二位行權大納言臣(一条)忠香

正二位行權大納言臣(廣橋)光成

正二位行權中納言(久我)建通

正二位行權中納言臣(山科)言知

正二位行權中納言臣(四条)隆生

正二位行權中納言臣(兼室)顯孝

正二位行權中納言臣(柳原)隆光

正二位行權中納言臣(藤谷)為脩

正二位行權中納言臣(橋本)實久

正三位行權中納言臣(姉小路)公遂

正三位行權中納言兼左近衛權中將臣幸經等言
制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

天保十三年十二月一日

制可

朱イン

月日辰時正四位下行大外記兼掃部頭助教

中原朝臣師德

右中辨俊克

關白太政大臣從一位朝臣

(鷹司政通)

(二条齊信)

(元季尚忠)

(近衛忠房)

從一位行右大臣朝臣

兵部卿闕

從四位上行兵部大輔定德

正三位行右大辨兼勘解由長官聰長

告正四位上源朝臣齊興奉

制書如右、符到奉行、

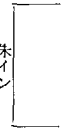
從四位下行兵部少輔兼因幡守嘉純



(天皇御體)

少錄

大錄氏萬



少錄

天保十三年十二月一日

白木御文書拾番箱中 拾番

御記錄奉行に

(齊實男、久珍)

(久道)

報七郎様今日種子嶋伊勢名跡相續被

仰出外條、帳面可記置外、

十二月八日

安房

右包紙

(朱)十番

天保十三年寅十二月八日安房殿と奥勇蔵江被相渡外付、納置外

事

86

白木御文書十番箱中 十一番

松平大隅守

御代替之御祝儀、琉球人召連參府之節、昇進被 仰付外

先格有之得共、其方儀御由緒柄格別之譯を以、追々官

位昇進被 仰付外上之儀ニ付、最早昇進之難被及御沙汰

外得共、

(家齊幸、重繁女)

一位様追々被爲及

御高年外處、此度其方昇進之儀、深被遊 御心痛、度々

厚被 仰進ハ段無御據事被 思召、其儘ニも難被成置、
依之正四位上被 仰付ハ者、全被對

一位様ハ御事ハ間、誠出格之儀と可被心得リ、此段急
度可申聞旨 御沙汰ニ外、

右外包ニ
天保十三年寅十二月十九日安房殿ヲ平川宗之進江被成御渡外
付、白木御文書十番箱へ納置ハ事

87 白木御文書九番箱中 十二番

御記録奉行ハ

種子嶋報七郎殿

年頭五節句其外何ぞ付登 城之節者、嶋津若狭一列上
口より被罷上ハ様被仰付ハ、左ハ右ハ扣席者水仙之間下
之休息所ニ被相扣ハ様被仰付ハ、

一五節句并月次御禮席之儀者、御座之間二之間末御敷居
(置カ)
より三重目ニ、御一門方・家督・部屋栖一列相濟ハ
後、引續被罷出ハ様被仰付、不及着座御側御用人名披
露、

一御留守年者御座之間御禮ニ準、於鶴之間御一門方謁後、
引續被罷出、謁御家老御祝儀御禮等被申上候様被仰付
外、

一年頭八朔者家格通於 御對面所、持參太刀ニ御禮着
座被仰付、若狭一列之頭ニ被罷出ハ様被仰付、扣席者
若狭一列同席ハ被相扣ハ様被仰付ハ、

一此世此世文字相用ハ様被仰付ハ、

一一世御一門方次嶋津若狭一列頭ニ被仰付ハ、
右者別段之以

思召、右之通被仰付ハ旨被
仰出候條、帳面可記置ハ、

十二月

安房

右包紙ニ
(宋)十二番

天保十三年寅十二月廿四日登殿ヲ東郷半兵衛江被成御渡、白木
御文書拾番箱江納置ハ事

88

白木御文書十番箱中 十三番

(宋)拾三番
天保十四年卯正月

太守様賀慶使被召列 御登 城之節、御狩衣・御立烏帽
子被爲召度旨、御伺書二通、右ニ付御留守居首尾書二通、
江戸詰御家老衆御問合、

御記録所

右一冊ノ蓋紙也

(01)

私儀先達（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事の宰相拜任被仰付、格外之

御恩澤國中老不及申、琉球國迄表一同感服仕（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事儀（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事こゝ、誠以難有仕合奉存（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、然處賀慶使召連登 城之節計、何卒宰相相當之服着用仕（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り昇進之廉目相立、吳國人迄得意爲仕度奉存（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、幸先祖代近衛家より織物狩衣被相贈（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り付、右之狩衣・立烏帽子着用仕度奉存（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、尤立烏帽子先相共着用之儀表有之、旁（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事以官位相當之服（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事こ御座（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り得共、是迄之着服と老相替（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り間、此段御内慮相伺（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、以上、

五月廿一日

松平大隅守

(02)

私儀先達（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事の宰相拜任被仰付、誠以格別之奉蒙（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事

御恩澤難有仕合奉存（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、左（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り其後初（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り

中山王賀慶使召連登 城仕（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り付、其節立烏帽子着用之儀不苦儀（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事に可有之哉、追（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り昇進表被 仰付（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り儀付、可相成老、立烏帽子着用仕度奉存（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、此段御内慮相伺（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、以上、

十一月十四日

松平大隅守

(03)

御書付一通

但 太守様御事、先般宰相御拜任被爲蒙 仰（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り付、賀慶使被召列 御登 城之節計、御狩衣・御立烏帽子 御着用被遊度御内慮御窺（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事之儀付、

右に相添御書取一通

六月御用番
水野越前守様
御用人
關善左衛門

右に御達被成（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り儀御座（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り間、今日中壹人御勝手迄罷出（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り様、御用人中（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り之切紙到來仕罷出（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り處、御書付に御書取御添、右御用人を以御渡被成（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り間、御國許に可申上旨申述置（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、御書付御書取差上申（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、

右之通今晚私相勤、此段申上（采）書面之趣ハ無用ニ被致候方可然候事り、以上、

寅八月廿九日

近藤隆左衛門

笑左衛門様

(04)

一御書附一通

但 琉球人被召連 御登 城之節、御立烏帽子被遊御用度との儀に付、
一右に相添御書取一通

御用番

水野越前守様

御用人
松元彌右衛門

右を被成御達ハ儀御座ハ間、今日中壹人御勝手迄罷出
ハ様、御用人中ハ之切紙致到來罷出ハ處、右御書付ハ
御書取被成御添書、右御用人を以被成御渡ハ間、可申
上旨申述置ハ、御附并御書取差上申ハ、
(番附カ)
右之通今晚私相勤、此段申上ハ、以上、

寅十一月十七日

近藤隆左衛門

主計様

追ハ申上ハ、被遊 御承知ハ上、今晚中私共御使者
を以御請可被仰達儀御座ハ間、御門前ニハ時刻見合
立歸り、御用人右彌右衛門ハ出會御相應申述ハ處、
追ハ可申上旨承申ハ、此段も申上ハ、以上、

(の5) 琉球人被召列

御登 城之節、織物御狩衣・御立烏帽子被爲 召度被

思召上ハ間、右御内意宣取計旨

御沙汰之趣承知仕ハ付、御向ニハ御内意之上、當六月

御用番水野越前守様ハ、別紙一印之通御願書被差出置ハ

處、書面之趣無用ニ被致ハ方可然旨、八月廿九日御書

取を以被仰渡置ハ、然處又々此節

御參府之上、御立烏帽子被爲 召ハ儀、可被仰立との御
事ニハ、去ル十四日御用番右越前守様ハ別紙二印之通御
内慮御伺書被差出ハ處、書面立烏帽子着用之儀不苦旨、
同十七日御書取を以被仰渡ハ、依之琉球人被召連、同十
九日・廿二日

御登 城之節々御立烏帽子・御直垂被遊 御着用ハ御
事ニハ、御留守居首尾書共都ハ六通相添、此段申越ハ條、
御記録奉行ハ表被達置ニハ可有之ハ、以上、

寅十一月廿九日

調所笑左衛門

嶋津和泉殿

嶋津石見殿

菱刈安房殿

嶋津 登殿

猪飼 央殿

右一冊也

89 白木御文書十番箱中 十四番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

天保十四年正月十一日 齊興御判

90 齊興公御諧中 二十四年

先_レ是國家財用空耗三都負債夥多、是以行節儉之道改_ニ革制度二十二年于茲_一、雖_レ如_ニ稍就_レ緒、然更慮_ニ吏員怠慢致_ニ之瓦解_一、出_レ令戒_レ之如_レ左、

91 白木御文書十番箱中 拾五番

外包_一

御筆

仰出

所帶方連年不練合成立、文政亥子年比_ニ老極_ニ差迫_ニ、於三都當借之手便_ニ盡果_一、既_ニ公務_ニ調兼_一、江戸詰人數賄方十ヶ月餘_ニ相滯_レ外程之儀_ニ外_一へハ、餘事老右_ニ準_レ形行_ニ外_一、

故三位様_ニ凌御聞通_一、別_ニ御心痛被爲_一 在外付、品_ニ深

く御談申上改革申渡、夫迄之大借元利共_ニ一往斷置、年々之產物料を以、江戸常式續金、京大坂入用老勿論國元之用分、又老臨時諸拂迄も相辨_レ様趣法申附、大坂表銀

主共_ニ爲申掛_レ處、積年之借入金數百萬兩_ニ相及_一、皆共無餘儀譯筋を以致出銀置_レ末_ニ外_一へハ、容易_ニ承知可致儀_ニ老無_一之、却_レ品々難題之儀而已申立、勿論新_ニたのミ入_レ者共_一老、右様古銀主之迷惑眼前_ニ外_一へハ、誰迎も改革之本手引受_レと申もの無_一之、一節老乍雙方手切_ニ成立_一、實_ニ必至之時節_ニも爲相及由_レ處、重疊無和理申込、

乍漸熟談相調、先可也致出銀_レ付、夫より繰登之仕向分_ニ綿密_ニ爲取計_レ處、掛置_レもの共厚汲受致世話_レ折柄、吉凶之入價打續、加之兩度之上納金、度々之疏人參府等_ニ外_一、莫大之及金高_ニ、大坂表差繰必至と難澁之時節、第一砂糖直組儲と下落、旁太粧之手違相成、其上改革之初迄ハ家廻雨洩さへも修覆調兼、或老一統_ニ江遣分も分限_ニ應し引迄も申付、其外右_ニ準_レ外砌故、難捨置拂方等相滯居_レ外分も太分有_レ外得共、向_ニ金割押_レ相定、稠鋪取縮方爲致_レ外へハ、眼前難澁之振合相心得居_レ外故、己と儉約を相用_レひ、其詮も相見得申_レたる事_レ外處、近年ハ大坂續金又老兎哉角無滯繰立、當座_ニ不事欠程成立候_一と隨ひ、一統油斷之姿_ニ外_一也、尤改革取附よりハもはや十ヶ年餘も相立、過去_レ儀老等閑_ニ相成_レ儀人情之常_ニ外_一、物毎何となく鹿略_レ之方_ニ傾き、近年ハ向_ニ改革之取扱殊

之外相弛レ様相聞得、夫故年々嵩續相増レ付、漸々大坂新借も相嵩、今通ニる者利拂本濟共及違約外有之間鋪、左レ時者新組之銀主とも出銀斷可申出儀ハ必定ニ付、若改革已前之時宜ニ共成立レハ、此上外ニ可頼入手筋も無之レ付、誠ニ一大事之時節と存レ間、夫々此譯を能く相辨得、急度右様之時宜ニ不及様、兼る取扱不致レる不叶事ニ付、依之今般身邊之儀ヲ格外之省略相用ヒ、夫々定置レ續料ヲ初減少申渡レ付、一統此旨を存、聊緩急之儀有之間鋪レ、就る者毎度申聞レ通、所帶之根本ハ産物繰立レ手續第一之事ニ付、弥綿密取計、猶有來産物迄ニる者、其品格別下落之節者礪と補調兼レ付、先度も申付レ通、手廣之領内ニ付間、嵩之産物も仕登可取計レ、夫ニ付るハ定る品々故障之筋も可有之レ得共、改革ニ付る者舊式ニ不相泥様可相心得レ、次ニ者於國元ハ何様行届レる者大坂拂口之評儀精疎ニ依、格別之相違ニ相成由レ付、誠實ニ心掛、決る大形無之様可取計旨可申附、就中江戸之儀ハ向々之拂日々太粧之金高ニ相及レ間、掛役々能く精微之取扱不致レる者、定置レ金高引足間鋪、尤是迄話人數々追々相減、其外家作等此種手入ニ不及様永久之仕向相改レ付、當分ニる者以前之入用ヲ者格別相減

外半、殊ニ改革初迄ハ定兼レ儀ももはや治定之儀も可有之レ間、此節猶又金割相定、京大坂ニるも同様相究置、聊並も超過不致様可取計レ、何分ニ者此基本緩立レハ、改革者目前ニ崩立レ付、其處深く相心得レ様可致レ、就る者江戸・京・大坂・國許共改革方ハ掛置レ者者勿論、其外向レ申渡レ趣堅相守り、互ニ一致いたし緩疎なく可取計レ、且又近年一統驕奢之風俗押移、着類又ハ持道具等ニ至迄、分限不相應之儀有之故を以、身上差迫レもの不少、別る如何之至ニ付間、向後質素儉約を相守、決る取違之儀無之様可心掛レ、今般從

公義及譯る節儉之儀を被仰渡、至極之御趣意ニ付間、屹と致忘却間敷、扱又分限之程ニ應し、知行扶持方も遣置レ付、別段救筋等申出レ儀ハ無之賦レ得共、是迄心得違レものも有之レ付、以來者何様申出レ共取揚間鋪レ、右等之趣度々申渡レ得共、兎角程過レハハ弛立不可然事外條、此度申聞レ儀者厚相含致世話、屹と不戻様可取計レ、

二月

家老中レ右上包ニ卷一拾五番一太守様御筆仰出御書附レ通

右天保十四年卯四月二日和泉殿より平川宗之進江被成御渡、白木御文書拾番箱江納置外事

右納置

齊興公正四位上女房奉書一通トアリ

92 齊彬公御系図中

95 白木御文書拾番箱中 拾六番

天保十四年癸卯二月九日改稱修理大夫、

御高百五拾石
安房殿より被相渡り御書付之写

93 御系図 齊彬公御妹

右
大慈院様に被遊

女子

勝姫

天保十四年癸卯齊興養爲子、

御寄附、御物計を以年々福昌寺に被相渡り儀共、都る

明治八年六月十日卒、神號奇靈眞勝姫命、

大信院様御寄附高同前被 仰付り、左り近日御判物御

94 旧御番所御文書四番箱中

仰 天保十四年二月廿七

通可被致取扱旨、寺社奉行に申渡、御記録奉行其外可承向にも可申渡り、

さつまの四位より、今たひ位階の御禮として、黄金百兩・

俱日限之儀者追可申渡り、

御きぬ三十疋しん上おハしまし、ひろう申て外へはおも

十二月 (彦川隆観) 安房

しろく覺しめし外よし、よくころえ外て申せとて外、

御心得りてつたへさせられ外へく外、かしく、

御いまの

御局へ

奉申給へ

96 白木御文書拾番箱中 拾七番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
天保十五年正月十一日 齊興御判

97 齊興公御譜中

天保十五年甲辰二月六日巳刻齊興發鹿兒島、三月二
十五日着江府、

○大家以宿次奉書賜御鷹之鶴於齊興、二月十八日齊
興在參府途上、受之於豐前小倉驛、

○夏四月三日齊興發江府詣
日光廟、十一日歸江府、

98 白木御文書拾番箱中 拾八番

口裏 松平大隅守江

松平大隅守

御本丸御普請ニ付、上納金仕度旨内願之趣達
御聽、尤之儀御機嫌被

思召外、依之内願之通金拾五萬兩上納被 仰付、右御普
請之御用途ニ可被差加旨被 仰出外、

101 齊興公御譜中

右包紙
〔采〕拾八番

此節 御本丸御普請付、金拾五万兩上納被為蒙 仰外御書附
宅通、天保十五年辰六月十七日主計殿より榎本新兵衛江被成御
渡、白木御文書拾番箱江納置外事

99 齊興公御譜中

天保十五年秋八月三日
大家以 上使本田丹下、賜御鷹之雲雀於齊興、

100 御系図 久光公御子

一男女七人

一珍彦

初紀寛 忠鑑 敬四郎 又次郎 周防 常陸 備
後

天保十五年甲辰十月二十二日生於重富第、母島津忠
公女、

文久元年辛酉四月父忠教去重富家而大歸於本室、
故忠鑑繼其後、

天保十五年甲辰十二月三日改元弘化^一、

○冬十二月二十五日以^三上使牧野備前守[、]、賜^レ告、且

賜^レ品如^レ例、

右大將家定公以^二上使戸田山城守[、]、賜^レ品如^レ例、

二十八日登^レ城拜^二謝^一之、蒙^二懇命^一被^レ賜^レ馬如^レ例、

白木御文書拾番箱中 拾九番

包紙^ニ知行目録写トアリ

知行目録

高三拾斛

伊集院麥生田村之内

帖佐住吉村福元門之内

谷山五ヶ別府村浮免之内

名寄帳在別冊

右者御改革初發より被掛置、當年迄拾八ヶ年京都・大坂

江相詰、披群骨折致精勤、別者御用立外付、別段之以

思召、右之通當三月十八日於京都拜領被

仰付外條、全可有所務外、仍如件、

天保十五年十二月廿八日

猪 央

尚敏判

鳴 登

久備判

菱 安房 隆觀判

鳴 石見

續印判
久浮判

鳴 主計 久寶判

田中善左衛門殿

右包紙^ニ 天保十五年辰十二月廿八日石見殿を東郷半兵衛に被成御渡、白木御文書拾番箱に納置外事

右之目録中十八ヶ年ヲ逆算スレハ文政十年ニ当レリ、御改革ノ発起參考アルヘン

白木御文書拾番箱中 二十番

寵姫様御實母

お百十之方事

眞如院之方親

亡橘川次郎兵衛

橘時吉

右お百十之方事、天保三年辰閏十一月二日、嶋津但馬

親隠居嶋津樵嵐養女、但馬妹ニ被仰付外旨被仰渡置外、

澄姫様

御影女
御姫様御實母

久羅親

酒井主殿殿

源忠蓋スミ

右老

御三方様御母之親姓名實名、又老御母之内他人之養女等
ニ相成居外人有之老、養父之姓名實名迄表相糺、可申
出旨被仰渡趣承知仕、江戸詰同役方江問合越置申外處、
右之通御座外旨、此節使方申越外間、此段申上外、以上、

辰十二月廿三日

御廣敷御用人

右包紙ニ

〔采〕日番一

籠姫様

邦姫様御母附并右親姓名実名御書付老通、天

保十五年辰十二月廿八日石見殿方町田孫一郎江被成御渡、白木

御文書拾番箱可納置外事

104

白木御文書拾番箱中 二十二番

〔采〕蓋番

御暇之御礼於御座之間被 仰上外と之事

正月十九日到来

式口中急便」

太守様御國許江之御暇被仰出、御禮被 仰上外段老、別

紙申越通外、然處此跡

宰相御拜任被爲蒙

仰外御願之、去ル亥年御暇御禮被仰上候節、御黒書院

江御引上之、是迄御禮被 仰上事外處、當時於西丸老

月並 御登 城之節逆老、於御座之間

御目見被仰付儀ニ外間、此度御暇之御禮於御座之間被仰

上度御願之趣有之外處、御暇之御禮於御座之間被 仰付

ニ可有之外、尤御黒書院之格ニ可被心得旨、御書取を

以被仰渡外間、此段爲御心得申越外、以上、

〔采〕 「弘化九年」辰十二月廿九日 赤松主水

嶋津主計殿

島津石見殿

菱刈安房殿

島津 登殿

猪飼 央殿

右包紙ニ

〔采〕二十一番一

弘化二年巳正月廿四日石見殿より得能彦左衛門江被成御渡外

付寫取、白木御文書拾番箱へ納置外事

105

白木御文書拾番箱中 二十二番

弘化二年巳正月

〔徳川家齊室、島津氏〕

廣大院様御法號御國許 御菩提寺江 御安置一件付

御伺書壹通、右ニ付御留守居首尾書三通、江戸詰御家老

衆御問合書壹通寫、

御記錄所

調所笑左衛門

右一冊之蓋紙也

(朱)口裏

廣大院様御法號御國元江 御安置一件

正月十八日曉到來

急飛脚便

嶋津主計殿

嶋津石見殿

菱刈安房殿

嶋津 登殿

猪飼 央殿

(の1)

廣大院様御事、不外御由緒付、

御法號御國元御菩提所江 御安置、御法事御執行及被遊

度旨、別紙寫之通御用番阿部伊勢守様江被成御伺外處、

可爲伺之通外、

御法號等之儀者久世出雲守江可被承合旨、去ル十二日御

付札を以被仰渡外付、同十四日右久世様江御留守居付役

勤淵邊仁右衛門被差出外處、

御法號別紙之通被相渡外付、

御兩殿様達 貴間、大奥 其外様江申上、御記錄奉行

にも相達、此段申越外條、

(齊興半母)

寶鏡院様江被申上、寺社奉行并福昌寺江被相達外儀共、

何分及可被取計外、別紙御伺書寫等相添差越外、左外

御法號之儀者一箱入付ニ差越外、以上、

辰十二月廿三日

赤松 主水

(の2)

廣大院様御事不外御由緒付、

御法號御國元御菩提所江奉安置、御法事御執行及仕度、此段相

伺外、以上、

十二月三日

松平大隅守

(の3)

御書付一通

但廣大院様

御法號御國元御菩提所江御安置被遊度等之儀

御用番

阿部伊勢守様

御用人

山岡衛士

右御勝手江持參仕、御用人服部九十郎に出會、示談之上
表江相廻り、御用人右衛士江差出外處、御退出前ニ付御

歸宅之上可申上旨、右同人も承申り、

右之通今夕西筑右衛門相勤申り間、此段申上り、以上、

辰十二月三日

半田嘉藤次

主水様

(の4) 御書付一通

御付札有

但廣大院様

御法號御國元御菩提所に御安置被遊度等之儀

御用番

阿部伊勢守様

御用人

町野平助

右の、御達被成り儀御座り間今日中壹人罷出り様、御用人中之切紙到來仕罷出り處、

御書付に御付札被成、右御用人を以被成御渡り間、可申上旨申述置り、

御書付差上申り、

右之通今晩私共差支、御留守居付役川崎四郎左衛門相勤申り間、此段申上り、以上、

辰十二月十二日

半田嘉藤次

主水様

(の5) 廣大院様御法號一枚

寺社御奉行

久世出雲守様 (伝馬)

右に今夕罷出、寺社役淺井傳八郎に出會、

廣大院様御事不外御由緒付、

御法號御國元御菩提所に御安置、御法事御執行も被遊度旨、阿部伊勢守様に御伺被置り處、昨夕御付札を以可爲

御伺之通り、

御法號等之儀若此御方様に承合り様被仰渡り趣申述相居り處、無程

追り申上り、本文之趣被遊 御承知り上、今晚中表方御使者を以御請可被仰達儀ニ奉存り得共、夜陰にも罷成申り付、明朝御請可被差出旨、出會之御用人に談置申り間、明朝御使者被差出度奉存り、且又大御目付衆に御届之儀若、毎之通御留守居付役名前之書付を以、御用御頼神尾備中守殿に申出爲置り、久世出雲守様御方にて

御法號等承合之儀若私共申談、明朝相勤可申り、此段も申上り、以上、

御法號右傳八郎を以被成御渡り付、可申上旨相應致返答
置申り、依之 御法號差上申り、此段申出り、以上、

十二月十三日 御留守居付役勤
淵邊仁右衛門

半田嘉藤次殿

追ひ被遊 御承知り上、表方御使者を以御請可被仰
達儀ニ御座り得共、右御請御使者迄も私相勤罷歸申
り付、別段御請御使者被差出ニ不及り、此段も申出
り、以上、

(の6) 右之通相勤申出り付、

御法號差上申り、此段申上り、以上、

辰十二月十三日

半田嘉藤次

主水様

右一冊トス

106 齊興公御譜中

弘化二年乙巳正月二十五日齊興發江府、三月九日着鹿
兒島、

107 齊興公御譜中 弘化二年

今茲齊興欲巡視菱刈・眞幸・日州諸郷、三月二十一日
朝六時發玉里假館、家老調所笑左衛門廣郷隨行焉、是
夜宿入來、二十二日發入來宿鶴田、二十三日發鶴
田留興天堂尾、又休曾木宿大口、二十四日詣忠
元靈社、又詣水天宮、覽曾木瀧、休羽月、見下之木
場倉庫、歸宿大口、二十五日詣宇佐八幡及白木觀音、
二十六日發大口、休馬越、經湯之尾、覽湯之元、宿栗
野、二十七日發栗野、休吉松、宿加久藤、二十八日微
行、經加久藤城内、訪三徳、聽地神經之樂、越白鳥
山、歸宿加久藤、二十九日發加久藤、休飯野、宿小林、
四月朔日發小林、尋神徳院及錫杖院等、宿野尻、二
日發野尻、休紙屋、宿高岡、三日詣法華嶽寺、覽身投
嶽、過善哉坊、歸宿高岡、四日尋香積寺、詣栗野社、
五日發高岡、休去川、宿高城、六日發高城、休通山、
宿福山、七日發福山、休敷根、宿國分、八日發國分、
休加治木、又休重富梅山別莊、乘船而着磯假館下、
上陸憩館暫時、而後歸玉里假館、此行也、經日十有七
日、陟郷殆三十、豫有所令、而道路之修築及上下之供
給、凡休憩止宿所至皆、要事易簡省略、而使郷郵務
莫費雜用也、

御系圖 玉里久光公御子

一男七人

一珍彦

一女子

於直 於貞

弘化二年乙巳五月二十八日生、實島津兵庫久長女、

母喜入多門久通女、

文久二年壬戌六月久光爲義子、

九月追擬齊彬之養女、

一忠欽

初紀堯 英之進

弘化二年乙巳十一月二十三日生於重富第、母島津山

城忠公女、

爲島津安藝忠敬養子、

御系圖 齊彬公御子

一男女四人

一寛之助

弘化二年乙巳七月二十八日生、母横瀬三郎兵衛克己

女、嘉永元年戊申五月五日夭亡以五月七日為忌日、法名麗光院殿

天質惠明大禪童子、

神社佛閣調中

一齊興公御壽像

但弘化二年巳九月六日御安置

右老千眼寺

(重)大信院様御影御相殿に被遊御安置外付、以來護國殿と

相唱外様被仰付外旨、弘化二年巳九月安房殿を被仰渡

外、

一御高貳百石

千眼寺

右老 (重)三位様御壽像等及御安置に付る老、寺務旁難澁

付、追々寺領高三百石被召付、右を以取續居外處、寺

家廻等手廣御再建、殊

太守様御壽像等御安置付るハ、猶更年中之御祭料等難

澁之替外付、此節右之通被相重、都合五百石被召付外

條、所務之儀ハ是迄被召付置外御高仕向同様取計外様

被仰付外旨、弘化二年笑左衛門殿を被仰渡外、

知行目錄

高五百斛

鹿兒嶋犬迫村之内

曾於郡重久村之内

清水郡田村之内

鹿兒嶋小山田村之内

國分向花村之内

同所同村之内

鹿兒嶋草牟田村之内

谷山山田村上之門之内

伊集院德重村之内

郡山東侯村宮下門之内

伊作與倉村前原屋敷之内

同所小野村之内

本城荒田村之内

加久藤灰塚村之内

飯野上江村之内

加久藤永山村之内

出水下知識村之内

勝岡蓼池村之内

小林細野村三浮兔之内

出水武元村二浮兔之内

末吉深川村之内

同所同村之内

志布志原田村之内

横川上之村之内

同所同村之内

財部下財部村之内

同所同村之内

串木野上名村之内

同所同村之内

大村北方村福丸門之内

同所同村米永門之内

名寄帳在別冊

右者御所帶方連年御難澁被爲及、殊御借財年々致増長、
既

公邊御勤向等及難被爲調程ニ相成り付、無御據

故三位様ハ 御相談被 仰上、文政十一子年より御改革

之御趣法被相立、右御内用取扱切發より被仰付、江戸・

京・大坂其外ハ及繁々被差出り處、必至ニ差はまり晝夜

懸心頭、格別骨折致精勤レ故萬端行屆、殊不容易極、御
内用取扱被 仰付置レ處、

御趣意通全相備、別レ御仕合 思召レ、且又諸郷勸農一
件者分レ被 仰付置レ處、是又

御趣意深汲致指揮レ故、勞郷々漸々榮立、今般

御巡見之郷々耕作等行屆、且難場之川普請迄々致成就、

運送等付レ者勞百姓共至極救助筋相成、一統進立窮民開

眉之時宜成立、別レ 御満足 思召レ、早竟

御趣意厚汲受諸差圖行屆レ故と被 思召上、先年

故三位様被 仰談レ

御趣意相貫、旁 御満悦 思召レ、依之拔群之勤功難被

捨置レ付、別段厚 思召を以爲御褒美、當四月廿一日右

之通知行拜領被

仰付レ條、全可有所務レ、仍如件、

弘化二年十月廿二日

猪飼

央

辨印判

尚敏判

鳴津

登

久備判

菱刈安房

隆觀判

鳴津壹岐

112

白木御文書拾番箱中 二十四番

副書

御家御系圖一册

右者

御家全備之

御系圖被成御拜受度御願之趣、

太守宰相齊興公達 貴聞、寫之早、何そ付右を以

公邊并他所被書出、或書籍編集之引用等被成レ儀共、

堅 御禁止レ條、到後代被存其旨可被有御笥藏、其譯私

共致副書加判形可差上旨、依 仰如件、

弘化二年十二月二日

猪飼

央

辨印判

尚敏判

鳴津

登

久備判

菱刈安房

隆觀判

鳴津壹岐

久武判

鳴津豊後

久寶判

調所笑左衛門殿

〔白河在土原、忠憲〕
嶋津淡路守殿

嶋津豊後
久實判

〔外包〕

島津淡路守殿依御願 御家御系図被遣付、御家老衆御副書志
通、弘化二年巳十二月二日央殿を平川宗之進江被成御渡、白木
御文書拾番箱江納置外事

白木御文書拾番箱中 二十五番

知行目録

高五拾斛

鹿兒嶋小山田村之内

國分向華村之内

伊集院戀之原村西門之内

鹿兒嶋犬迫村小浮免之内

名寄帳在別冊

右考連年御所帶方御難澁成立、追々御儉約被

仰出外得共何分不行届外付、文政十亥年比ニ至リ必至之

御危難御到來付、

故三位様に被 仰談、御改革御趣法替被 仰付、調所笑

左衛門に取扱被 仰付、追々同人に被召附、江戸・京・

大坂・御國許諸所に被差出外處、晝夜致精勤別る御用立

外付、追々被相轉、當御役迄表被仰付、當時一往大坂居

付こる相話、猶更御用立、殊不容易極御内用方に表被掛

置、初中後差はまり出精相勤、抜群勤功表有之外付、一

往居付に考御高拜領不被仰付事外得共、別段厚

思召を以、當五月十四日於大坂右之通知行拜領被

仰付外條、全可有所務外、仍如件、

弘化二年十二月廿二日

嶋 登
久備判

菱 安房
隆觀判

嶋 壹岐
精印判
久武判

嶋 豊後
久實判

高崎金之進殿

〔外包〕

〔外〕二十五番
弘化二年巳十二月廿二日壹岐殿より汾陽彦次郎江被成御渡外

付納置外事

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

弘化三年正月十一日 齊興御判

115

齊興公御譜中

弘化三年丙午春二月四日已剋齊興發鹿兒島、夏四月二

日着江府、

○四月十三日

大家使_三 上使青山下野守_、、來問_三齊興參府_、、十五日

齊興登_レ城述_三參勤之禮_、、更蒙_三懇命_二如例_、、

116

齊興公御譜中

弘化三年閏五月十九日齊興生母鈴木氏_{於八百今}卒、法名寶

鏡院殿圓爾妙鑑大姉、年七十五、葬福昌寺、

○是月日齊彬賜_レ告、是以_三異國船來_三琉球_、、代_三齊興_二爲_三

警備_二下_レ國也_、

117

齊興公御譜中

弘化三年六月朔日齊興・齊彬因_三月次之賀儀_二登_レ城、

又欲_レ謝_三齊彬賜告之恩_二焉、老中阿部伊勢守_、、使_三大

目附深谷遠江守_、、傳_レ令曰、齊興・齊彬宜_三賀儀後帶

城_、、既而賀儀罷、

大樹家慶公臨_三座之間_二兩人拜_レ謁之謝_レ恩、又蒙_三懇

教_、、因親拜_三命辱_二退座_、、又老中列_三座黑鷲杉戸_二涯_二兩

人更就_レ之而謝_三懇命之辱_、、

○六月六日齊彬發_三江府_、、七月二十五日着_三鹿兒島_、、

118

白木御文書拾番箱中 廿七番

諸御役人并書役小役人等、近來昇進又考賦重身分沙汰等

專年數_三相拘_レ様成立、勤功者薄成行_レ間、其器量有之、

拔群御用立_レ者者年數無構御取譯可被仰付、其外年功迄

之者者是迄之年數より及格別相重_レ御取扱可有之_レ間、

以來右之心得を以致取調_レ様被 仰出候、

七月 御取次 二階堂志津馬

右外包_三朱_二廿七番_一 仰出寫亭通

右弘化三年午八月朔日壹岐殿方可致格護旨、伊藤彦介致承知、

白木御文書箱拾番江納置之件事

119 齊興公御譜中

千眼寺者曾安^二 大父故三位公像^一、附^三寺高三百石^一、而頃日寺宇再建、更加^二廣大^一、且齊興壽像亦安^レ之故、今茲弘化三年丙午十月十二日又增附以^三二百石^一、使^三國老連署以傳^二之命^一、

120 白木御文書箱拾番箱中 二十八番

知行目錄

高貳百斛

末吉深川村之内

内高貳拾五石

木之下門

高五拾三石三斗貳升八石五夕五才 大始良大始良村之内 瀬筒門

高拾石 高山後田村新原門之内 浮免

高拾四石五斗 加世田川畑村上之門之内 浮免

高貳拾石 伊集院大田村之内 田中門

高六石壹斗六升四合壹夕六才 伊集院上神殿村之内 柿内門

高三拾六石七合貳夕九才 飯野杉水流村之内 柏木門

高拾石 樋脇市比野村大水流門之内 浮免

高拾石 伊作中之里村久保門之内 浮免

高拾五石 財部南俣村八ヶ代門之内 浮免

名寄帳在別冊

右考

故三位様御像

御安置被爲 在、寺務旁難澁付、追々寺領高三百石被召附、右を以取續居^レ處、此節寺家廻等手廣御再建、殊

太守様御壽像

御安置付^ル考、猶更年中之御祭祠料等難澁之筈^レ付、右(ツ)之通被相重、都合五百石被召附^レ條、全可有所務者也、仍如件、

鳴津將曹

縫印判

弘化三年十月十二日

久徳判

鳴津石見

久浮判

鳴津壹岐

久武判

千眼寺

右外包ニ

(卷二十八番)

弘化三年午十一月十日將曹殿より奥勇藏江被成御渡、白木御文書拾番箱江納置外事

齊興公御譜中

121

弘化四年丁未春正月十三日以 上使阿部伊勢守正弘賜告、且賜品如例、

右大將家定公以 上使松平和泉守、賜品如例、十五

日齊興登、城拜謝之、蒙 懇命見賜馬如例、

○十九日齊興發江府、三月八日午上剋着鹿兒島、

○三月十五日齊彬發鹿兒島、五月十日着江府、

122

白木御文書拾番箱中 二十九番

弘化四年未二月

寛之助様御縁組一卷ニ付、御家老衆御問合書等留二册

右蓋紙ニアリ

(の1)

寛之助様ニ

近衛内府様御妾服御出生之御姫様

愛君様御縁組被爲整度、拙者ニ御内約之儀致取扱下様被

仰付置下付、

近衛様諸大夫に致入魂置、猶又先月廿九日

近衛様二條之於御屋敷、諸大夫佐竹主税頭・中川宮内少

輔・北小路刑部權少輔・今大路民部權少輔に出會、

近衛様御儀舊來格別之御由緒悉有之、其上近來

廣大院様御續合、且

郁君様御入與旁當時厚御問柄之御事下付、

愛君様御縁組被成下下ハ、乍此上御親敷被爲成度、御

内々、御口上之趣御相應申述置下處、去ル二日參殿之儀

申來致參殿下處、中川宮内少輔出會ニ御内々被 仰進

下趣、委細被成御承知下、當時殊更御厚御續柄ニ下得者、

旁以御縁與御取結之儀、於此御方不斜御満足被 思召、

則幾久敷御縁組御内約被成下趣、別紙寫之通御返答承知

仕下付則達 貴聞、先以早速御領掌被成下下段、幾久敷

目出度忝被

思召下趣を以、翌三日

近衛様御方并

郁君様御方に不拙者御内御禮之御使者ニ、鮮鯛一折ッ

、被進相濟下、此段極御内用を以申越下條、

少將様可被達 御聽候、左下未末

寛之助様御事御弘等も無之事ニ、世間ニ響合レハル者不
宜譯ニハ間、大目附以上御側御用人・御側役・御使番・
御記録奉行ハ者極内被達置可然存レ、先以御縁組御内約
表被爲濟、幾久敷恐悦奉存レ、以上、

未二月九日

調所笑左衛門

鳴津壹岐殿

鳴津石見殿

鳴津將曹殿

此度修理大夫様御嫡男ハ此御方姫君愛君御方御縁組被爲
整度、尤從來不外御由緒柄之儀ハ得者、御速ニ御領掌ニ
表相成レ様御内ニ被仰進、委細御承知被成レ、當時殊更
御厚御續合ニハ得者、旁以御縁組御取結之義、於此御方
表不斜御満足被思召、則幾久敷御縁組御内約被成レ、仍
此段被仕合レ事、

二月

(02) 近衛様ハ之御口上

修理大夫嫡男寛之助儀、追々縁組表爲仕度御座ハ處、其
御許様ハ者古來より格別之御由緒表有之、其上近來

廣大院様御續合、猶又

郁君御方御入與旁當時厚御間柄之御事ニ表御座ハ得者、
愛君様御縁組被成下レハ、乍此御親罷成レ儀付、此間
より右一條御内ニ調所笑左衛門を以相願レ處、當時殊更
御厚御續合ニハ得者、旁以御縁組御取結之儀御満足思召
ハ付、幾久敷御縁組御内約被成下レ旨御返答承知仕、先
以早速御領掌被成下レ段、幾久敷目出度忝奉存レ、仍不
取敢以使者御禮申上レ付、目錄之通進上之仕レ、

二月

薩摩宰相内使者

調所笑左衛門

(03) 郁君様ハ之御口上

寛之助様ハ
愛君様御縁組之儀、先日以來御内ニ以御使者御願被仰進
ハ處、當時殊更御厚御續合ニハ得者、旁以御縁組御取結之
儀不斜御満足思召ハ付、幾久敷御縁組御内約被成レ段、從
内府様御返答之趣被成御承知、速ニ御領掌被成進レ段、
幾久敷目出度忝思召、仍不取敢以御使者御禮被仰進レ
付、御目錄之通被進之レ、

二月

宰相様御内使者

調所笑左衛門

弘化四年未五月

寛之助様御縁組一卷ニ付、御家老衆御問合書等留二册

右一册ノ蓋紙ニテアリ

(の1) 愛君様此節御縁組御内約ニ付る者、

此御方様より被仰入、被應御趣意ハ御事ニハ處、猶又

思召之譯被爲 在、拙者ハ被仰付置趣有之、

少將様御着坂之上致上京、

近衛様御方諸大夫等ハ及頼談趣有之ハ處、去ル十七日御

用之儀有之ハ間、參 殿有之ハ様別紙寫之通承知參 殿

仕ハ處、

寛之助様追々御成長之趣 聞召、

愛君様御似合敷御年齢ニ付、

御縁組御取結被成度、尤從來格別之御由緒柄、其上

郁君様御入與後猶更御續柄ニ表ハ得共、

彼御方様より未御入與表不被爲在、幸之御時節柄ニモハ

間、右通 思召之段別紙御書取之通被仰渡ハ、右付る者

最初笑左衛門殿取扱之事故、別紙申越趣有之ハ付、同人

より可被達 貴問候段申越ハ付、御心得旁此段御内用を

以申越ハ、以上、

未四月廿四日

嶋津 壹 岐殿

嶋津 石 見殿

末川 久 馬殿

調所笑左衛門殿

嶋津將曹(久徳)

寫

修理大夫様御嫡男

寛之助様追々御成長之趣被 聞召ハ付る者、

此御方姫君愛君御方御似合敷御年齢ニ被爲 在ハ得共、

今般御縁組御取結被成度思召ハ、尤其御方様之義者從來

格別之御由緒柄、其上

郁君様御入與後、猶更御厚御續柄ニ表御座ハ得共、往古

より

此御方姫君未タ御入與も不被爲在ハ付、幸之御時節柄に

もハ間、此度右御縁組御取結被成度被思召ハ間、此段被

仰入ハ事、

四月

御用之義有之り間、今日御參可有之 仰り、以上、

四月十七日

今大路民部(孝光)權少輔

嶋津將曹殿

124
原書在御邸

家老中に

文政亥了年比ニ到り外の者所帶方極々難澁成立、既公務表整兼り付、不得止改革申渡、其後連々年嵩申付、當年迄二拾ヶ年程相及び得共、未所帶方立直兼り儀、專吉凶之大禮、臨時之用途追湊過半大坂表借入を以相辨、今通ニの者改革成就之期不相見得、却る者以前之通難澁之時節可及到來者案中ニ外間、甚心痛之事ニ外、是程迄趣法相立段々運立、且又掛置り而々骨折相勤、其外逆々出精之末再難澁落入り外者別々殘多事り條、深及思慮り處、兎角産物料を本ニす及、拂之分限を定り外無之、然者改革初者産物等之取扱表届兼り付、先凡之見賦を以爲究置事り得共、到當節り外者右躰之儀者平均之程表可有之り付、右之内より三都・國元之入用を見賦、次ニ者臨時之備を差分置、たとへ不時之費有之り共新借ニ不及様可取計り、右付る者改革以來向々省略之上、又々減少之取

計別ル不容易筈り間、改革之儀當年限之事り得共、引續今三ヶ年嵩申付り間、舊規常例ニ不相泥無用捨取計、年限中無相違所帶方立行り様可致り、亥子年比迄者役々未々迄表賄料等拂方相帯、其外右ニ準り儀能心得居り付、自取縮向没受り得共、二拾ヶ年餘ニ表相及、於向々其時分より相勤居り外者表相少、近比者當座之繰合無滞相辨、目前之儀者都合宜形ニ外間、所帶方立直り事之様相心得、何となく役々緩疎ニ有之由、以之外之次第ニ外、趣法者何程宜り外者執行り役々不行届り外者、更ニ其詮表無之事ニ外條、一統誠實ニ心を用ひ、急度三ヶ年之間ニ其驗相見得り様可致精勤り、若改革以前之振合ニ成立り外者、第一 公務不相調、次ニ者近年諸郷改正之儀申渡、尤昨年大口邊より口州迄致巡見、委敷及見聞り處、困窮之場所餘多有之、田地川々普請等是より手を不附り外不叶所而已有之、且又海岸を相拘り國柄ニ得者、防禦之手當等旁勝手向不如意ニ有之り外者調兼り付、國體之根本強弱之勢ニ表相拘不輕事り條、人々其旨を相心得、只管可盡精勤儀肝要ニ外、且又質素節儉之儀者追々申渡置り通り得共、何分ニ表世上之驕奢ニ見習、自然と緩ミ立り哉ニ相聞得、領内之儀者不應士少、高之儀者人々心得之前

ニハ間、餘國より表分の儉約を用ひ取續ツハてハ難立行事ノハ處、不勵之族看ミ及衰微、心付向等毎度願出、或者家格之勤方ニ不相調、甚不埒之至ニハ、向後者無故右躰ニ及ハ面ニ者屹ト其咎可申付、勿論勤方等閑ニ相心得ハ者表同斷ニハ、就ル者國中ノ風俗第一之事ハ間、其儀者前ニより申渡置ハ通ニハ、然者是迄連テ年限嵩ニ表相成來ハ得共、此節者累年之趣法成就之時節ニハ間、不容易事ハ付、右者大意之事ハ條、猶直ニ表申聞通、其餘者家老中篤ト評儀、向テハ瑣細申渡ハ儀共宜取計ハ事、

四月

右汗簡知レス、弘化ニ、四年ニヨリルカ、一卷ノ原書ヲ以テ寫置、此ニ歸國タリ

白木御文書拾番箱中 二十番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、今般三司官役被 仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公人念可相勤候事、

一作恐奉對

齊興様 齊彬様毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣堅可相守候、若

企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、
一對國王無別心可抽忠勤候事、
一國中ノ擬并諸事無眞眞親疎可致沙汰候事、
右條ニ僞於申上者、

神文略

弘化四年丁未五月七日

座喜味親方 盛普判

126の1

白木御文書拾番箱中 二十八番下

包紙ニ 覺寫トアリ

勢至菩薩 一軀

但御厨子伽羅内箔磨

佛師康湛作

七條左京康敬極狀相添

右者

太守宰相齊興公多年御側ニ

御安置、別ル被遊御信仰、靈驗新成御像ニハ處、今度

思召之御譯被爲 在、華尾山御内陣ニ被遊

御安置候條、謹テ奉得其旨、到後年動行無怠慢可令修行

之旨、依 仰執達如件、

調所笑左衛門 繕印印判

弘化四年丁未九月廿八日

平等王院

廣郷判

包紙ニ
副狀寫トアリ

右大將頼朝卿
御笏

一本

此御笏者平産并田地虫除之符と唱、鎌倉法華堂御別當相承院に傳來之處、昔年薩州之佛工鳥居如見より、院主良蹊法印に内々遂所望守下り致箇藏來り、産符に用る時者流川之水を川下りに汲取、水を器物に移シ器中に御笏を浸シ、其水を産婦に飲しめは、不致平産者無之、又田地之虫を除クニ此御笏を守りて其田間を歩行すれば、悉ク虫除て稲苗繁茂す、靈驗如此依著明、文化十二年亥十二月如見五代之孫鳥居長八獻上之、右者今度

太守宰相齊興公 思召之御譯被爲 在、華尾山に被遊御奉納外條、到後年宜實護之者也、仍副狀如件、

弘化四年丁未九月廿八日

平等王院

調所笑左衛門
總印判
廣郷判

御軍役方

右者別段 思召之譯被爲在、右之通被召建外條、向々に可致通達外、

十月

笑左衛門

御軍役方

御名代
嶋津山城殿

右者近年御領内并長崎其外に異國舟來着に付、從 公邊援兵等可被仰出儀も可有之段被仰出外付る者、不時出張被仰付外儀も可有之外付、右之通被仰出外、此節 思召之譯有之御軍役方被召建、御役々被掛置、御手當向取調被仰付外間、御用之節々出席、御用被承届候様被仰付外、右之通内匠殿者名代島津又八郎殿に、御名代島津讚岐殿に被仰付外條、表方に致通達、奥掛御勝手方にも可相達外、

十月朔日

笑左衛門

御軍役方

副御名代
嶋津豐後殿

右者近年御領内并長崎其外に毎度吳國船來着付、從
公邊不時出張被仰渡儀も可有之に付、右之通被仰付、
左に有 御名代出張之節差副可被差出、乍然兼有御
城代被仰付置付、御留守之節別段之事に、且此節
思召之譯有之、御軍役方被召建候に付、御手當向之儀調
所笑左衛門申談致吟味に様被仰付、

御軍役方
惣奉行

調所笑左衛門

右者此節思召之譯有之、右之通被仰付、左に有御軍
役方被召建付付る者、御趣意之旨細く被仰出通、御
先代様方 御家流に基取調、勿論御手當向之儀專致主宰、
萬端不行届之儀無之、屹と御規定相立に様可致取扱、
且 御出馬御供又者 御名代等出張之節に者可被差出、
右之通 御名代嶋津讚岐殿に被仰付に條、表方に致通
達、奥掛御勝手方へも可相達、

十月

壹岐

右之通被仰付、左に有此節御軍役方被召建付、取調
者勿論御手當向之儀都る致差引、右に相拘り御用者向
に申出に儀も何篇致吟味、時々可奉伺、且御出馬御供
亦者 御名代等被差出に節者可被召附に旨、以 思召被
仰付、此旨向に可申渡、

十月

笑左衛門

異國方御手當之儀者以前に被定置に得共、段々不連續之
儀も有之、急速之出張等調兼、勿論天保之度 公義御觸
渡之通、變異之諸國者專大砲等相用に付、和漢戰鬪之向
に者相變、殊更當時之御手當古來に 御國風に相背に
廉くも有之、旁以 思召に不被爲に付、多年被遊 御
工夫 (島津實久) 貫明様 (義久) 松齡様御時代之御軍法を基本に
相立、其外和漢之作法用捨斟酌いたし、一家之流儀等不
相混、何れも宜に隨取調、外國防禦之御手當致全備に様
可取扱、左にハ、猶又 御直可被遊 御差圖旨被 仰出
に、

御軍役方
惣頭取

海老原宗之丞

御軍役方
御取次

二階堂志津馬

右考此節 思召之譯被爲在、御軍役方被召建、御直

御差圖ニ付、右之通被 仰付、左の御軍役方にも時

々致出席、御用取扱何篇達 御聽、様被 仰付、旨名代

に申渡、此旨向、に可申渡、

十月朔日

笑左衛門

御軍役方御手當向之儀別紙之通被仰出、付、謹る奉承

知、様御役人限詰衆に申渡、寫取、様可申渡、

十月

笑左衛門

一御軍役方御座之儀、驚之間次之間に明後十七日、被召

建候條、掛之面、に可申渡、

十月十五日

笑左衛門

別紙之通被仰渡、間、此段致通達、

未十月十六日

海老原宗之丞

二階堂主計

川上東馬

右御軍役方掛被仰付置、條、向、に可申渡、

十月

笑左衛門

別紙之通被仰渡、付致通達、也、

十月

海老原宗之丞

御軍役方取調ニ付、諸士其外人數又ハ武具類取調被仰付

付、御軍役方、時々案文等相渡、支配頭に可及問合、

勿論及遲、仰、る者別、不都合ニ、間、日限等之儀問合通

り速ニ相辨、御用不相滯様支配下等、に厚可被申渡旨、向

、に不洩様可申渡、

十月

豊後

128

齊興公御譜中

慶長三年十月泗川之役、及十一月番船破之戰、距今茲丁

未、正二百五十年矣、故齊興欲、吊、當年戰死之靈、而施及、

敵兵數萬之亡魂、九月二十一日、茲、日、以於、麿府妙谷

寺、使、福昌寺住持獨山爲、導師、行、施餓鬼會、而追薦、

於、是安、

貫明公

松齡公

(久保、義弘男)
一唯公

〔家久〕琴月公靈牌於架上、遣家老調所笑左衛門廣郷、代拜之、

又召戰死者子孫於法筵、拜禮而賜飯、且施僧侶粥焉、夫

松齡公躬自于役於征韓、則伊集院妙圓寺爲其菩提所、故宜行之於此、然妙圓寺則土地邊鄙不便于事、而以下

貫明公出陣肥前名護屋、遙指揮征韓事、故行之於其菩提所妙谷寺者云、戰死者子孫人名錄于左、

〔百興譜ニハ戰死者四十八名列記ナリ〕

129 齊興公御譜中

弘化四年冬十一月修二

賴朝公六百五十年回法會於花尾山三日、自二十一日至十三日、

130 御系圖 齊彬公御子

一男女五人

一盛之進

弘化四年丁未十一月二十九日生、母田宮安知女、

嘉永三年庚戌十月四日天亡、法名盛光院殿廓然慧照

大禪童子、

131 糶抄

一諸士知行高之儀、往古方先祖之勲勞又老家筋勤場之高下、依、夫、被下置り高頭ニ應し、公務者勿論非常之備迄及分限を以可致置事故、

大中様方 大玄院様迄 御代々様分る被仰出置、其上享保十三年御規模帳を以高上、高持成等之儀、屹と被仰出置、其後追々御規模被居置り處、到當分持高名實行違、別る致混雜居り段被聞召上り、全躰御高之儀者

治亂共御國政之根本ニ有、諸士知行高表同様之事故、賈賈等猥ニ取計り儀屹と御禁止之事り處、太切之知行高自己之物之様差心得、先祖之勲功等を以被下置り家

柄之面々猥ニ致附屬、格式相當之勤方被仰付りる及無滯相動り儀表調兼、平常質素節儉之心得無之、内證驕

ニ所帶致衰微、其身之恥辱者勿論先祖之功勞及空敷相成、其外小身逆表右準驕奢之振舞有之り處方、傳來之知行高賣拂り時宜ニ表成立、別る不埒之到り、勿論高

上・高持成等之儀、家筋勤場之譯を以被成御免事り處、豪富之者共御格迦、内々過當ニ知行高買取居り哉ニ相

聞得、分限表不顧、甚以心得違之儀ニ付、右ニ付之者夫々御法通ニ御取揚可被仰付儀外得共、此節者別段之以思召不被爲及御沙汰、舊來之御規定被復外段被仰出外、依之取樣向之儀左之通被仰付外、

一 高直不相濟筭之者、借銀返辨亦者利拂之方杯ニ内々ニ之務務相請取外儀、且高上御免無之者内々ニ之高相求置、別人名前ニ之召置所務外儀、堅御禁止之事外處、前文通、當時餘人之名前高令支配、所務請取外者有之哉ニ付間、右様之者者來申三月限速ニ有躰ニ高直願出、又ハ脇方ニ致附屬度者者其通ニ之限月内屹ト高直可願出外、萬一限月相過外之者高直等不願出者者屹ト可被爲及御沙汰外、

一 内々ニ之買取置、未名前不相直高并借銀返辨之方ニ相請取致取納外高有之面々者、高員數并鄉村門名者勿論抱地高之譯委細ニ相記、一帳を以來申二月限高奉行所ニ可申出外、右届書相糺外上相違之筋可有之者御取揚可被仰付、疎略之儀有之付ハ、可及迷惑付間、雙方引合入念可申出外、

一 自分持高并買取置外高、内々ニ之脇方ニ名前相頼置外表有之哉ニ相聞得、御法違之事外ニ付、前條同断届可

申出外、

一 取込拜借滞納有之人、高賣拂外儀亦者高相求外儀、不相成御法ニ付得共、此節限者取込拜借有之人ニ之表高直御免可被成外、乍然取込拜借等返上外ニ付之者、右高之内方追之御吟味次第上納可被仰付儀も可有之付、一 跡職不相究亦者幼少ニ之勤方無之者者、高直不被仰付御法ニ付得共、是又此節限高可被成御免外、

一 高賣渡置高直不願出、高主・證據人共ニ死去等之者者、當分存生之者之賣渡證文無之外者者高直御免不被仰付御規ニ付處、右之内ニ者琉球嶋方渡海之者者可有之、往返日込ニ者可相成事外付、別段之御吟味を以、高賣渡置所務米買主方ニ致取納外儀無相違外ハ、此節限者儘成親類兩人之賣渡證文・御法之證據人相立願出外ハ、高直御免可被仰付外、夫共當人ニ掛合不致外ハ、相成譯表外ハ、其譯合願出外ハ、何分可申渡外、

一 江戸・京・大坂・長崎詰之者高直付、掛合不致外ハ、不相叶譯表外ハ、親類等方致掛合、左外ハ其段委細高奉行所ニ可申出外、其上高奉行方御趣法掛御側御用人ニ申出外ハ、江戸詰同役亦者兩御留主居方掛合、速ニ返答有之外様取計、是非限月中相片付外様可取計外、

一 鹿兒嶋高諸郷に遣り儀、且諸郷高鹿兒嶋に買入り儀御禁止之事り處、抱地高等諸郷に内々なる賣渡置、諸郷抱地高内々鹿兒嶋に買入、亦者現高諸郷に致取納り及有之哉に付、本々之通差返り敷、又者高可相直人の致附屬り敷、兩様之間取計、來申三月限屹と高直等前文同様可願出り、郷士其外身分違之者に借銀返辨之方杯に持高・抱地高等遣り儀有間敷儀り得共、若右様之儀於有之者糺方之上無用捨取揚可申付り、

右者別段御寛宥之 御沙汰を以右之通被仰付り條、人々難有御趣意之程厚奉汲受、來申三月限高直等可願出り、乍此上若等閑之者者屹と可及迷惑り、此旨向々に不洩様致通達、諸郷等に及可申渡り、

十一月 豐 後

壹 岐

石 見

久 馬

笑左衛門

一 此節格別之 思召を以御軍役方取調に付、給地高御改正被仰渡り付る者、高持成・高上等之儀夫々御法及有

之、先達を申渡置り通に問、御法通向々に相付申出り儀者其通可有之り得共、萬一心得違内意等申出り儀有之りる者御軍役方取調付妨相成り問、一切内意等申出問敷り、勿論取納相掛り面々内意承りハ、可及迷惑り、此旨向々に可申渡り、

十二月 豐 後

笑左衛門

一 寺社方并御廐・宗門方御在銀拜借之面々、給地高差上所務代銀を以差引返上被仰付來りへ共、此節御改正に付る者諸人同様之譯に問、右拜借銀返上なる差上置り高相下ケり様可致、若返上方不相調面々に成行當月十五日限可申出り、此旨向々に不洩様可申渡り、

十二月 豐 後

笑左衛門

一 給地高御改正之儀、先達を被仰渡通に、御高之儀者治亂共御國政之根本なる、屹と御規定被居置り處、近年富家之面々内々過分に買圓致取納、御作法に相背、夫故諸士追年相勞、御國役第一之御軍賦及不相調程相

亂れ居り處方、厚以 思召御改正被仰付候儀なる、別
 る不輕御取扱に、右に付當秋取納先夫々百姓方相糺
 申出り様、請持郡奉行に申渡置り處、近來被召出り者
 二の表に哉、庄屋又老百姓方に取納先取繕申出呉り様
 頼入り表有之哉に相聞得、右様御軍令に相掛り大切成
 御軍役、厚 思召を以被仰渡り儀を心得違之儀共有之
 けり老、別る不届之到に、若其通之儀跡達る於相顯
 老、右高御取揚之上、其身老屹と被及御取扱、所役并
 郡奉行迄表可及迷惑り、最早差出相成り表有之けり得共
 申下ケ、今一往間違無之様再調いたし、鹿兒嶋高・諸郷
 高取分ケ二册こいたし、所役々連印を以、當月限無間違
 可差出り、此旨向々に申渡、請持郡奉行に表可申渡り、

十二月

豐 後
 笑左衛門

面々兼る高利を被下置、右様厚 御趣意之程、自分
 汲受表有之筈に得共、此涯萬一散高被買圓り儀共有之
 けり老 御趣意に表相戻り、殊に大身之面々老諸士之
 目當に表可相成儀に處、此節給地高下直に相成りを幸
 二買入方有之けり老風儀にも相掛、奉^(違ふ) 御聽り節不都
 合相成りる老不可然事に間、限月内老假令高上等被成
 御免り向表買入方勘辨可有之に、此旨向々に不洩り様
 早々可致通達り、

十二月

豐 後
 笑左衛門

一 御當國之儀、諸士株不相應給地高相少、其上近來高上
 等之儀御格式相弛々、富家之面々過當に買圓、當時之
 形勢なる老諸士追年疲勞および、御軍役等相勤り文無
 之に付、厚以 思召御改正被仰付り儀、早竟右高諸士
 中に行渡、往々延立り様と之 御趣意にに間、大身之

一 諸士給地高之儀老御軍賦之根本にに間、當分通富家之
 面々兼併いたしけり老諸士追年致疲勞、御軍役表勤兼
 けり處方、此節厚 思召を以御改正被仰渡、誠々不容易
 大切之御取扱に處、 御趣意汲受薄面々、間々是迄之
 通内々なる名前脇方に相頼置所存之者表有之哉に相聞
 得、別る不埒之到に、乍此上右躰之者老夫々間合之
 上右高御取揚、急度可被及御取扱に、且又御法迦買取
 置り高并永代賣渡置り高、色々致疑惑片付方埒明兼り
 哉に相聞得、旁不届之到に間、支配頭方引受高奉行方

江表引合、支配中之面々江篤と申論、先達而被仰渡置
外通、來二月限成行届申出外様可取計外、萬一支配中
之内不正之手筋有之外歟、又來三月相過外歟、不片
付者及外ハ、高御取揚、其身御取扱者勿論、支配頭可
爲越度候、此旨向々江不洩様早々可致通達外、

十二月

豐 後

笑左衛門

一給地高御改正ニ付る者追々被仰渡置外通、夫々御格及
有之儀ニ外處、凡下之者共持高并抱地高等内々買取居
外哉こも相聞得、右躰之者此内被 仰渡置外通、夫
々糺方之上ニ御取揚可被仰付外、凡下者方高買取外
者者勿論、假令相對不買入手越シ買入外共御取揚被仰
付候條、高主旁之儀共入念買入方不致外者可及迷惑
外、若又大形ニ相心得買入居外者有之外ハ、本主江
相返、其届高奉行江可申出外、此旨向々江不洩様早々
可致通達外、

十二月

豐 後

笑左衛門

一是迄屹と立外御役相勤、亦者地頭職被下置外者者千石
内之高上り御免被成外得共、此節別段御吟味之譯有之、
給地高御改正中者五百石ヲ限り御免被成外、

一祖父・曾祖父代屹と立外御役相勤外者、又者地頭職被
下置外者之子孫、小番相勤來外者五百石成、小番迄未勤
來外者者四百九拾九石餘迄之高上り御免被成外得共、

同斷御改正中三百石を限り高上り御免可被成外、

一新番相勤外者者三百石御免被成外得共、前條同斷御改

正中貳百石を限り高上り御免可被成外、

一御小姓與之儀、貳百石成御免被成外得共、前條同斷御

改正中百五拾石を限り高上り御免可被成外、

右者今般厚以 思召給地御改正被仰出外付、致治定

迄者右之通被仰付外、左外者持來外者者有來通外、

尤家筋俗生等ニ應し差別可被仰付儀者是迄之通ニ外

條、此旨向々江不洩様早々可致通達外、

十二月

豐 後

笑左衛門

一此節給地高御改正之段被仰渡趣有之外處、御法迦買圓
置外面々、高主又者高上り等可相濟向江、高代錢年府

入付之取組ニ讓渡ハ致内約ハ者共有之由相見得、其通
ニ考、限月限被定置ハ趣ニ表相背、全躰此節考現
ニ相片付、給地高引渡リ、一統御軍役無滞相動ハ様と
の御事ニ有、格別成 御趣意汲受薄筋ニ相當リ、別有
如何之次第ニハ、是迄高之本意を不辨、御法迦之致買
圓ハ儀表御寛宥之 思召を以、御沙汰不被及ハ付
考難有奉承知、屹と心得違之取計等致間敷事ハ處、今
以種々之手筋取企甚不埒之到ハ、乍此上内密ニ申談ハ
る表通背御法ハ廉無之ハハ、一往考高直可相濟儀表
可有之ハ得共、追ハ内々取組之次第又考取納先等微細
ニ取調相成答ハ付、紛敷致引結等ハ者考其高無用捨御
取揚被仰付、雙方共可及迷惑ハ、不能存慮儀有之節考
其譯高奉行ハ可得差圖ハ、此旨向々ハ不洩様可致通達
ハ、

十二月

豐 後
笑左衛門

一此節御改正ニ付、先達給地高出入其外現事之處取調、
同案貳通ツ、差出置ハ處、又々急々御用御見合相成ハ
間、先日差出置ハ通、此節考壹通ツ、來ル九日限ニ取

揃差出ハ様監物殿ハ被仰渡趣致承知ハ間、各來ル九日
限無間違様拙者宅ハ可差出ハ、此段致通達ハ、本文無
滞名次ニ早々被相廻、留ハ返納可被成ハ、

正月六日

小番新番綱支配
村田休右衛門

一寺社方并御廐・宗門方ハ高差上拜借銀被仰付置ハ面々、
此節拜借返上不相調向餘人高相求ハ儀考、自由ケ間敷
筋合ニハ得共、小身者ニ有考拜借銀返上考不相叶ハ逆
表、纔計之高相求度表可有之、右躰之者御改正中現地
五拾石以下之者ニハハ、高相求ハ儀可被成御免ハ、
且又是迄取納仕來高直之儀考別段之事ハ、此旨向々ハ
不洩様可致通達ハ、

未十二月

豐 後
笑左衛門

口達之覺

一此節諸人持高附屬之儀ニ付有考、追々分ハ被仰渡趣有
之、各承知之通ニハ、然處當分高直成至極下落之向ニ
も相聞得ハ處、其上ニも致下落ハを相待、又考過當之

高直ニ賣拂り含こゝ、右兩様見合り所存之者表有之哉
ニ相聞得、格別成知行高賣物之様相心得り者若風儀
も相拘、別ゝ不可然事付、時宜相當之直成を以、早
く賣買相片付り様、支配中ニ無屹と可申渡事、

一 知行高餘人ニ賣渡置、亦若附屬高受合置り面く、速ニ
名前替相談決着之不致返答、又若高直證文名寄帳等不
引渡向も有之哉ニ相聞得り、高直之儀御限月も被定置
り處、別ゝ不勘辨之至り條、右様之取計有之段聞得之
向表りハ、屹と可被及御沙汰旨、豊後殿・笑左衛門
殿方御口達を以被仰渡り間、聊心得違有之間敷事、

一 此節給地高御改正被仰渡、人々奉承知通こり、右ニ付
る者當分餘人方名寄帳相受取、所務米不相請取者又若
餘人名寄帳無故致格護置り者有之りハ、其譯相記、名
寄帳相添、來正月限屹と御勘定所ニ差出り様、向くハ
不洩様早く可致通達り、

十二月

豊 後

笑左衛門

一 給地高御改正治定之上、持高之分限ニ應し、御軍賦被
相定替り付、不容易手數こゝ手數ニ表相拘賦り、然

若御改正中被定置り御作法通、高上等不被仰付面く、
御改正之儀若暫時之儀と相心得、高名寄相頼置、追々
自己之名前ニ可相直と之含こゝ、其間名前預置り儀を
申談り者も有之哉ニ相聞得、其通こゝハ矢張付高同前
之儀若勿論御軍賦差支、別ゝ不都合之至り、右躰之者
若夫々糺方之上、付高同様高御取揚之上雙方共屹と可
及迷惑り、此旨向くハ不洩様可致通達り、

未十二月

豊 後

笑左衛門

右之通被仰渡り條、支配中ハ不洩様寫を以早く申渡、
本文無滞相廻、留り明後廿三日限返納可有之り、以上、

齊興公

自弘化五年正月

齊彬公

至嘉永六年十二月

追
錄
舊
記
雜
錄
卷百六十四

132 白木御文書拾番箱中 三十一番

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

弘化五年正月十一日 齊興御判

133

雜抄

一 此節給地高御改正ニ付、取納高現事之形行銘々差出取

揃相成り處、是迄金銀錢借付、利錢之方は高相受取置、

所務米者本高主方に取納いたしり上相對ニ米相受取、

又者互之相談ニある年々米價之代銀相受取り仕向之者ハ

百姓直取納不致り逆、此節之差出不載面々可有之哉ニ

相聞得、御改正之御趣意ニ相戻り差支相成り付、百姓

直ニ取納不致りるも、最初利錢之方ニ高所務米を以致

引結り者ハ當月中無間違可差出り、此旨向々は不洩様

早々可致通達り、

申正月

(島津久忠)

豊後

(調所広輔)

笑左衛門

一 諸人持高内々買取、餘人ハ名前迄相頼置致取納來り者

者、此節自高々相立り儀難計向者、名前相頼置り者ハ

賣渡り儀餘人ハ高直願出り様、向々は早々可致通達り、

正月

豊後

笑左衛門

134

雜抄

一 給地高御改正ニ付昨冬々當春相成高出入餘多り間、去

秋出米總迄者本高主方に相圓總書は何某ハ賣渡り段相

記、總可相遂^レ、勿論買主^方も本高主に引合無滞可相遂^レ、此旨向^レ江不洩様可致通達^レ、

正月

豊 後

笑左衛門

右之通被仰渡^レ條、支配中に不洩様寫を以申渡、本文無滞相廻、留^方來八日限返納可有之^レ、以上、

一 諸人出米總之儀、去ル丑年申渡^レ趣表有之^レ付、等

閑相心得^レ儀者無之筈^レ處、限日差掛^レる表總不相遂、

高奉行^方受催促^レ上乍漸總相遂^レ習俗、別^方不埒至極

之事^レ、以來^者高奉行^方催促等^者有之間敷^レ條、精

々差急、限日不差掛總可相遂^レ、勿論限月相過^レハ、

御法通高御取揚可被仰付^レ條、追々被仰渡置^レ御趣意

厚奉汲受、聊等有之間敷^レ、此旨向^レ江不洩様可致通

達^レ、

正月

豊 後

笑左衛門

一 現地被下置^レ一所持貳拾一家之面々、餘人名前高永代

買取置、年々取納被致來^レ高たり共、此節^者高直不被

成御免^レ、乍然現地貳千石以下之向^者永代買取被置^レ高^者、貳千石限^者高直可被成御免^レ、現一所持之儀^者、家來等^レ表夫々配當被申付置、夫丈ケハ郷高同前之譯

二 付右通可被仰付^レ、

一 餘人^方付高受合居、自分名前直居^レ高たり共、自高^レ被致^レ儀^者一切不被成相^レ、且又自分名前之高一旦餘人^レ被賣渡置^レ株^者、現高貳千石以上^レハ、被受返

儀遠慮可有之^レ、貳千石以下之向^者貳千石限^者被受返^レ儀可被成御免^レ、

但 貳千石以上之向も一所之高餘人^レ被賣渡置^レ株^者、

自分名前之外高を以繰替いたし度向^者可被願出^レ、

一 現地不被下置^レ一所持^方寄合・寄合並迄、右之面々餘

人名前高永代被買渡置^レ、年々取納被致來^レ高たり共、

此節高直不被成御免^レ、乍然現地千石以下之向^者永代

被買取置^レ高^者、千石限^者高直可被成御免^レ、

一 餘人^方付高請合居、自分名前^レ直居^レ高たり共、自高

二 被致^レ儀不相成^レ、且又自分名前之高一旦餘人^レ被

賣渡置^レ株^者、現高千石以上^レハ、被受返^レ儀遠慮

可有之^レ、千石以下之向^者千石限^者被受返^レ儀可被成

御免^レ、

御免^レ、

右者此節給地高御改正中右之通被仰付外條、此旨向、
に不洩様早々可致通達外、

但御改正中散高被買入外儀者先達の申渡通、

正月

豊 後

笑左衛門

右之通被仰渡外條、支配中には不洩様寫を以早々申渡、

本文無滯相廻、留方明後十二日限返納可有之、

一寺社方并御廐・宗門方は高差上拜借之面々、上納不相

調外ハ、右高御取揚可相成外間、精々高申下ケ外様可

取計外、此旨可承向に可申渡外、

正月

豊 後

笑左衛門

右之通被仰渡外條、支配中へ不洩様寫を以早々申渡、

本文無滯相廻、留方明後十四日限返納可有之、以上、

一此節給地高御改正ニ付、小番・新番・御小姓與・諸與

與力は迄致取納來り現高人數并御改正被仰渡外以後、

新規買入高石數、別紙案文ニ應しケ條取納帳面ニ仕立、

向々支配頭前ニ取揃、來ル十日限無間違差出外様、

向々支配頭に可申渡外、

但無高并新規買入高不致ものハ成行書付を以可申出

外、

シレス

豊 後

笑左衛門

雜抄

一容貌之儀者應身分ニ、夫々年輩相當ニ髮月代衣服正敷、

毎朝未明ニ相仕廻、其上髮結之儀も手髮ニ無之外へ

ハ、分ニおひてハ差支も可有之外ニ付萬端心掛、急速

之御用何ニも相動外様、且者身分違に不紛様可相嗜

外處、近代士分之者共髮形少ク、髮形相應有之外ハ

結様不頓着之者も有之、第一士者内心ニ強勇を含ミ容

貌等乙名敷、律儀相守外こそ當然ニ有外處、甚心得違

之儀ニ就中月代中剃迄剃通し、つかなく外有者甲冑

解髮相成り節之辨表無之、別有嗜之事ニ外、且古來

者本結製作等表家内之者共至極相清、武運を祈製作い

たし外もの、由外處、近來者右之下風表薄相成、旁士道

之嗜無之、尤衣服之儀も質素節儉之御趣意ニ基き、成

程致龜服外儀者勿論ニ有外處、問ニ者不頓着之爲躰ニ

の罷居ひ者も有之、僥暴輕薄を強勇之様心得違之習俗
 以之外成儀こひ、乍然容貌之外見飾江戸外方之風儀等
 二相習、美麗過ひ様成立ひる者却ひ見分違こ糸紛敷、
 御趣意こも相戻り事ひ間、容貌言語共相應こ於何國こ
 表御國風を不失様心掛ひ儀題目こひ、

右者此節笑左衛門殿二階堂志津馬に御沙汰被為在、
 奥向之面こ容貌御取直シ有之、諸士年若之者共生
 立柄迄も別ひ被遊御世話、士風正敷一統御用立ひ様
 との格別深 御思召之程奉承知、何共恐入難有 御
 趣意容易ならさる御事ひ條二統奉感服、年若之者共
 老父兄親類ひ片時も無油斷致教育、急度 御趣意通
 立直ひ様無ひる者、我こ共こ至り無申分事ひ間、
 小與中人別召出申渡ひ上、銘こ御請之屈可申出事、

月日無之、此後正月ナルへ

一若年之者共腰こ手拭提間敷との儀者、以前ひ度こ被仰
 渡、先達委曲申渡通こる、自分取違者無之管ひ得共、
 猶又急度可相守、乍此上取違者身分違之者に可相紛
 々間、能こ勘辨可有之ひ、且晴天こ木履用間敷との趣
 表折こ被仰渡事ひ處、未間こ心得違之者有之哉こ相聞

雑抄

得、士以上之者者上下尊卑之辨も有之、御政道こ背ひ
 儀者有間敷事ひ、於身分不似合、別ひ不乙名敷儀ひ間、
 向後屹と仰渡之 御趣意こ基き萬端取違有之間敷ひ、
 乍此上不守之者者可及迷惑ひ、此旨小與中に不洩様可
 申渡ひ、

正月

豊後

笑左衛門

諸藝練熟之上被召出ひ家之儀者、其藝を請次子孫こいた
 り、其道を以御用立ひ様可心懸、若取違藝道取止ひもの
 ハ本之俗生通可被仰付旨、先年分ひ被仰渡置ひ得共、以
 來藝道家筋之者、三代目迄ハ其藝道を以御用立ひ様、四
 代目ひ者其藝道を請次こ不及、御小姓與等衆並之御奉公
 可被仰付ひ、尤右通被仰付ひ付ひる者三代目迄ハ其藝道を
 以御用立ひ様、只管致出精、若家業等閑ひる御用不立も
 のハ本之俗生通可被仰付ひ、

但三代目之もの依願外御奉公相勤居ひものハ、其子之
 代迄ハ家業致相續御用立ひ様、若取違家業不致ひも
 のハ本之俗生通可被仰付ひ、且當分致相續居ひ者、四

代目後之ものゝるも其身一代者家業取止こ不及り、右者此節別段厚

思召之譯被爲 在、右之通被仰渡り條、藝道家筋之者老一涯出精屹と御用立り様可心掛り、此旨向くは致通達り、

正月

笑左衛門

雜抄

一給地高之儀者全躰御高之内給地に被差分置、御國政御軍賦之根本こり得者、別る重キ品こり處、一統士風相衰へ自己之物之様成立、甚以取違之事り段者追く被仰渡置り通りこり、然處豪富之面く是迄兼併之高一時こ賣拂、直段下直いたしりを仕合こ存、法外下料之直段を以買入、又者連く高直こ賣渡置り、高主方も同様之應對いたし、或者重代之武器迄も致活却高相求り振合、大切成御高之譯辨無之筋こ相當りり趣共被聞召上、士風こも相拘り甚如何之事こり得共、此節者別段不被遊御沙汰り付致吟味、相當之直段を以御高之譯相立り様可被取計旨 御内沙汰被爲 在、誠以奉恐入次第こり、依之舊冬十一月十五日御改正被仰出り以後、高賣買いたしり分者、壹石こ付代錢貳拾貫文こ可致引結び、右

直成こる増代錢相渡り儀不相調者者、入附置り代錢又

老石數相請取り儀者其通りこる、來月十日限屹と致引結、其日限り殘石數等帳面こ相認、本高主・買主雙方居可申出り、左りハ、追り何分可申渡り間、其内右高賣拂り儀差留り、此旨向くは不洩様早く可致通達り、

弘化五年申二月

豐 後

笑左衛門

齊興公御譜中

弘化五年戊申春三月十五日改三元嘉永一、

白木御文書拾番箱中 三十二番

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、今般三司官役被 仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐奉對

齊興様 齊彬様毛頭不可奉存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣、堅可相守候、若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一 對國王無別心可抽忠勤候事、
一 國中^ノ之擬并諸事無鼠胤親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者

神文略

弘化五年戊申四月二十二日

池城親方

安邑判

140

雜抄

御口達御扣

島津周防(久光)

近年長崎表相州浦賀邊其外領内琉球異國舟追々漂來、剩琉球フランクに老佛嘆人共于今帶留、何分不穩時節旁に付、海岸防禦之儀從 公邊被仰出、殊に領内之儀者專海岸引受之事に付、以前より其手當者嚴重之事り得共、今度改る手當と申者無之り得共、折々渡來に付る者何れ大砲を以防方無之り得者、^(實心) 迎も敵對不相調者眼前之事に存り、仍軍役者大中様 ^(義弘) 貫明様 松齡様等執行之御流儀に相基き、専大砲等備組之主に相用ひ、此度右二ヶ條共 御先代之御流儀に作法相建り付、先達る同列内匠并其方に軍役名代をも申付り、尤當秋參府表いたしりハ、跡之儀者其方に諸事致指揮り様申達趣、 公邊に御届等表いたし置り儀者

141

雜抄

誠は不輕事付、留守中之儀者軍役に不限、當時留主中政事向懸念者存り間、其方一往家老座に出席、家老中より相談をも承り、品に寄りぬ者則直に可承り、右申聞趣懸心頭、家老中申談萬端氣を付宜可取計り事、

四月

右嘉永元年四月御承知之由

諸士之内無祿之面々多り處、猶又小番・新番者別立願、御小姓與之儀者纔高五石以上致分地、同斷願出者者其通被仰付候旨被仰出置り處、其内は無錄故格式相當之儀(儀之)難取續、本家に引取亦者致零落、終は下賦之産業をもいたし、當日を凌兼り様成り向多、第一右之躰之處より士風相衰、別る不可然事に被 思召上り、依之以來寄合並以上并小番・新番・御小姓與、二男以下別立り者者、本家持高之内五拾石以上、與力之儀者、五石以上致附屬り者者是迄之通別立被仰付、分地無之別立者勿論、往々買地等之約束に申出り者共一切御免被仰付間敷り、左りる郷土より所高五石持越、御小姓與養子願出り者者、五拾石以上持越り者迄御免可被仰付り、

但五拾石以上分地申出外者者、おのつから本家に表五拾石以上殘置可願出外、

小普請銀不納又者利銀不納有之面々、依願持高等差上、所務差引被仰付置外向表有之外處、此節滯納利銀者都の被成御免、差上置外高被返下外、本銀滯納ニの同斷之向も高之儀者都の被返下外條、本銀之儀者成丈ケ可致皆納、乍其上皆納難叶向老年府返上可被仰付候間、早速願出外様可被仰付外、就る者此節給地高御改正被 仰出、一統御軍役分限相應相勤外様、厚 思召之譯を以、當時御改革中不容易儀ながら右之通被仰付外條、難有奉承知外様向々江不洩様可申渡外、

但小普請被入置外者者別段之事ニ付、利銀御免無之外、差上置外高表不被返下外條、是又被仰付外、

四月

笑左衛門

一貳分銀并國役銀不納、又ハ利銀不納有之面々、持高等差上所務差引被仰付置外向も有之外處、此節滯納利銀者都の御免被成、差上置外高被返下外、本銀滯納ニの同斷之向も高之儀ハ都の被返下外條、本銀之儀成丈ケ可致皆納、乍其上皆納難叶向老年府返上被仰付外間、早

速願出外様被仰付外、就る者此節給地高御改正被仰出、一統御軍役分限相應相勤外様、厚 思召を以、當時御改革中不容易儀ながら右之通被仰付外條、難有奉承知外様、向々江不洩様可申渡外、

申四月

笑左衛門

右之通被仰渡外條、支配中江不洩様早々申渡、本文返納可有之外、以上、

四月十日

大番頭座印

竹内善藏也

142

雜抄

給地高御改正ニ付、餘人方名寄帳相請取置取納米不相受取者、又ハ無故餘人名寄帳致格護もの共、當四月中御勘定所江差出外様申渡置外處、未差出者有之哉ニ相聞得、御改正之滯ニ相成、御軍賦ニ付別る及差支甚以不束之至外、依之右通之名寄帳有無之譯來ル廿日限無間違可申出外、幼少又ハ旅行等之者ハ親類共方屹と可致糺方、乍此上萬一等閑罷居外者ハ右高取揚申附外、此旨向々江不洩様早々可致通達外、

五月

笑左衛門

右之通被仰渡外間、小與中_レ早_ク申渡、名寄帳持有
無一紙名書を以、來ル十八日限可被申出外、

五月十二日 六番觸役所
市田右近

雜抄

一此節給地高御改正ニ付高直之儀追_ク申渡通_ニ外、右_ニ
付當秋_方出来上納之儀、持高_ニ應_シ何石丈ケ何方向村
何門_方致上納度趣帳面_ニ相認メ、來月十五日限高奉行
所_レ無間違可申出外、

一是迄高賣入_外節_者高主_方所庄屋_方取納之儀致問合
來_外得共、此節_者郡奉行_方へ來月十五日限帳面相認無
間違可申出外、左_外所役_々へ_者郡奉行_方可申越_外、
一諸人高直之願申出御免之節_者、以來_者高奉行_方郡奉行
_レ時_々問合、郡奉行_方當秋何某_方致取納_外様、所役
_々へ申越_外様被仰付_外條、無間違取計、高主_方高問合
_ニる_者取納米持越間數旨、請持郡奉行_方所役_々可申
渡_外、
右之通申付_外條向_々致通達、高奉行・郡奉行_レ以來
無間違様可取計旨可申渡_外、

五月 笑左衛門

右嘉永元年五月十九日承知之

144 齊興公御譜中

嘉永元年今也我國家財政改革將_下及_二明年_一全終_上、而會_三外
國人來_二琉球_一、海防糧運宜_レ助_二其費_一、且江府邸館造營及
國內多少土木等其費莫大、復致_二大坂新債_一、於_レ是乎改革
之期今須_下加_二三年_一、以期_中全終_上、依告_二家老_一如_レ左、

145 白木御文書拾番箱中 三十五番

包紙_ニ
御筆仰出_トアリ

家老中_レ

所帶方改革之儀、去_々午夏委曲申付置_外通、來酉年迄之
間_ニ累年之趣法成就之積_ニ外處、琉球_レ西洋人渡來餘多
之人數差渡、其上近來琉球困窮之折柄故手厚取救、加之
糧米運送等之費不少、殊海岸防禦之手當莫太_ニ相及_一、其
上御當地栖居之儀、文化之度類燒_レ之節假建之儘_ニ外、既
上使引請_々調兼、且來_々年琉人參府之事_外得_者、夫形_ニ
_々難差置、勿論於國許_々、當時品_々造營修補取掛_外儀、
外邦響合等_ニ付深勘考之譯有_之、國威を海外_レ示_レ存
慮_ニ外、いつれ_々無餘儀譯_ニ外得共、限有産物料之事候

得者、太粧之人價難相補、當年末より大坂新借を以用途

相償ハ次第ニある、甚改革之趣法を妨ケ心痛之至ニ者ハ得共、無是非時宜ニハ、依之又々來々戌年より亥年迄二ケ年改革年延申付ハ條、一涯質素節儉を相用、於向々年限中屹と致治定ハ條、委細去々年申付置ハ通相心得、改革致成就ハ條可取計ハ、

146 齊興公御譜中

嘉永元年戊申秋八月二十一日齊興發鹿兒島、冬十月十日着ニ江府一、十三日

大家以 上使牧野備前守（忠雅）、問ニ參府一、十五日齊興登城述ニ參府之禮一、蒙ニ懇命一如レ例、

147 雜抄

（末川久平）
近江殿方被相渡ハ御書付之寫

御軍役人數賦等之次第 御先代様方御作法を基本ニ相立、尚又用捨致斟酌左之通被仰付ハ、

一 知行高百石ニ付從卒貳人、主從三人之出役被仰付ハ、
一 知行高百石ニ餘り、壹人前不相成端高并壹人前不引足ハ外小高之分者被屯置ハ、小高無高之諸士ハ配當出役被

仰付ハ、

一 高持病氣幼少等ニ其家内方出役不相調者、又者寺社領高之儀者、右同斷小高無高之者ハ配當出役被仰付ハ、
一 陣中飯米之儀五拾石以上三拾日、四拾九石ハ三拾石迄者貳拾日自飯米被仰付ハ、貳拾九石以下者御物御構被仰付ハ條、兼ハ其心得ニ可致用意置ハ、

但乘馬兩馬相立ハ儀左之通、

一 寄合並以上無格小番以下一統、高貳百五拾石ハ馬壹疋不斷相立置ハ條被仰付ハ、左ハ千石ハ貳疋、千五百石者三疋、萬石迄も其賦を以定立馬いたし置ハ條被仰付ハ、尤應高頭過分之疋數ニおよびハ向者、家中等ハ爲飼置ハ儀可爲勝手次第ハ、

但御役料高も自高同様被仰付ハ、

一 御側役以上并地頭所被下置ハ面ニ者、持高貳百五拾石以下ニも馬壹疋ツ、定立いたし置ハ條、尤御側役以上者平日登城之節乘馬勝手次第被仰付ハ、

一 江戸・京・大坂御留守居、御納戸奉行・物頭・御使番之儀者、御軍役之節物主等騎馬役可被仰付身柄ハ故、貳百五拾石以下ニも成丈ケ定立馬いたし置ハ條被仰付ハ、

一寄合並以上之儀者登城之節乘馬ニ有登城可被致段者、

安永二年被仰渡置付付、弥其通可被相心得付、

御留守居以下之御役者、乘馬ニ有登城者遠慮可有之付、

右之通被仰付付條人々謹而奉承知、兼而質素節儉等追々被仰渡趣堅相守、無滯相勤候様被仰付趣、不洩様可致通達付、

申八月

近江

笑左衛門

旗相印等之圖

今度御軍賦御改正ニ付旌印等之儀者、別冊圖形之通被改付條謹而致拜見、銘々入用之所寫取、御定之通堅固ニ可致用意旨、向々不洩様可申渡付、

申八月

近江

笑左衛門

別冊圖形略

右者佐多其外東目海岸江異國船致渡來、御人數被差出儀も付ハ、早速可差越候條、兼而致用意可罷在旨可

申渡付、

申八月

近江

笑左衛門

別紙之通被仰付付付而者、實用ニ基キ付儀第一ニ付間、^(マ)外文ニ抱り騒々敷不成立様相心得、就中御留主中之儀ニ付間萬端相慎、^(マ)專急束之御用相勤付様、兼而心掛肝要ニ有外事、

別紙之通被仰付付付而者、他國旅島渡海等之向者無間違六組觸役所江届可申出、萬一等閑ニ相心得届不申出付而者御用差支ニ付間、此旨分る申渡置付事、

御國旅ニ有も手數ニ相掛付者ハ其届可申出付、

右御通達者小番・新番名前ニ有銘々致承知付様、觸支配人堀萬右衛門方廻達也、

諸郷江被仰渡付圖形其外略

御城下一手小頭 樺山四郎左衛門・日高與一左衛門・鈴木彌藤次・大山清右衛門・牧仁兵衛・伊東仙大夫

右者佐多其外東目海岸江防禦之人數被差向付節、一番駐付被仰付付事、^(御之)

右嘉永元申十月七日近江殿方得能彦左衛門を以御内達大野清右衛門承知、

一 島津求馬・新納內藏・嶋津藏人・嶋津靱負・北郷男吏

岩下新太夫・島津相馬・島津隼見・桂外記・川上矢五

太夫・義岡藏人・伊集院隼衛・仁禮小吉・鎌田柰之丞

大野多宮・島津清太夫・豎山武兵衛・大野市助・猿渡

牧太・二階堂源太夫・小笠原轍・宮之原源之丞・伊集

院喜左衛門・東郷作太夫・相良典膳、

右佐多其外東目海岸物主

一 高城郡高城物主町田監物・久志秋目同伊集院直・大村

同嶋津左膳・蒲生同菱刈全之助・水引同高田十郎右衛

門・東郷同本田六左衛門・野田同猪飼柳太郎・高尾野

同森川利右衛門・樋脇同新納主税・鹿兒嶋郡吉田寺尾

庄兵衛・山野同倉賀野九郎、

右山川其外西目海岸物主

一 串良物主嶋津主水、野尾同比志嶋靜馬、諸縣郡高城同

畠山藤次郎、勝岡同梓岩次郎、高山同町田式部、曾於

郡同平田善太夫、櫻島同町田助太郎、始良同名越左源

太、日當山同關山糺、田代同堀四郎左衛門、高岡同蒲

生郷右衛門・平島平太左衛門・鎌田小十郎・梅田九左

衛門、國分同竹内貞右衛門・平田眞之丞、志布志同春

山休兵衛・伊東正太、恒吉同折田清八郎、須木同東郷

半助、内之浦同大野鐵兵衛、松山同染川助八、溝邊同
愛甲源五郎、綾同高城六右衛門、倉岡同中嶋清六、佐
多同有川彥兵衛、大根占同松山隆阿彌、

右老佐多其外東目海岸に異國舟及渡來、御人數被差

向外節者、御備與之内右之通被仰付、早速出役被仰

付外條、兼其旨相心得罷在外樣可致内達事、

一 御使番折田八郎兵衛・御目付肥後平九郎、

右老御領内海岸に異國舟及渡來、爲防禦御人數被差

向外節八、御備與之内右通被仰付、早速出役被仰付

外條、兼其旨相心得罷在旨可致内達事、

一 兵糧玉藥奉行普請方兼務喜入九郎・富山傳内左衛門、

兵糧玉藥普請方小荷駄方本占税所源左衛門、兵糧玉藥

普請方小荷駄方差引川畑清右衛門・川井田藤助、

右老佐多其外東目海岸に下書同斷、

一 御城下小頭白尾金左衛門・中嶋清左衛門・東郷彌十郎・

吉井七郎右衛門・大山角太郎・吉川源右衛門、

一 中郷物主郷原轉、田布施同高橋妾人、阿多同赤松主水、

高江同島津內藏、串木野同嶋津兔毛、伊作同諏訪數馬、

川邊同蘭田與藤次、始羅郡山田同北條織部、曾木同市

來次郎、川邊郡山田赤松靱負、市來同平川宗之進、川

上助七郎、指宿同調所藤内左衛門・奥勇藏、加世田同
 阿多六郎・時任武右衛門・中村嘉右衛門、伊集院一郎、
 出水同三原源五左衛門・武井四郎右衛門・近藤七郎右
 衛門・相良角兵衛、百次同兒玉喜藤太、阿久根同高田
 尚五郎、志岐太郎次郎、伊集院同樺山惣兵衛・安藤平
 右衛門、鶴田同有川庄之進、郡山同大山彦右衛門、谷
 山同速水五右衛門・中野織右衛門、山崎同中村喜多右
 衛門、山川同法元宇左衛門、隈之城同野村彦右衛門、
 坊泊同蓑田源左衛門、羽月同曾木權之助、大口同市來
 五兵衛・伊十院半五右衛門、

右者異國船及渡來、長崎江御加勢被差出外敷、又者
 御領内西目海岸江爲防禦御人數被差向外節、御備組
 之内右之通被仰付、早速出役被仰付、下條略、

一重留御目付平田清右衛門・加治木同川上四郎兵衛・垂
 水同種子嶋次郎右衛門・今和泉同益滿新之丞・日置同
 圖師崎良助・宮之城同伊集院源之丞・花岡同岩下矢之
 助・都城同最上善之助・種子嶋同檢見崎四郎、

右書同斷略、

二番組

田中太郎左衛門・山口仲兵衛・山口九十郎・井上甚吉・
 野間休八・長谷場小十郎・柴宗右衛門・中江八左衛門・
 蘭牟田半右衛門・町田助十郎・野間勘兵衛、永田喜兵衛・
 大迫吉次郎・川上東太郎・樺山良助・高山一郎・野村午
 之助・松山八太郎・高城七之進・兒玉彦左衛門・四本甚
 五左衛門・田中金兵衛・肥田正助・日高新助・永山喜兵
 衛・伊地知左太夫・平山嘉十郎・平七郎左衛門・前谷清
 太郎・勝部鎌助・福島吉之進・湯地市郎右衛門・森助右
 衛門・樺山三圓・高崎新藏・吉田宗之進・有馬新七・佐
 伯善左衛門・淵邊助八・西郷助右衛門・樺山孫九郎・福
 崎直次郎・八木新兵衛・森川孫兵衛・平田李之助・城井
 新助・大野彦右衛門・加納次右衛門・四本半九郎・能勢
 四郎次・前田十郎・松元彦兵衛・加納藤右衛門・能勢彦
 左衛門・河野半兵衛・有馬仁之助・池田新左衛門・有村
 市兵衛・^{シレス(御カ)}田淡水・長崎助六・川畑伊右衛門・毛利喜平
 太・田邊市之進・久保平次郎・竹下仲右衛門・福嶋半之
 進・谷元六右衛門・大山彦助・大山源七郎・竹下藤助・
 馬場助之進・平田萬吉・有馬小十郎・森惣兵衛・湯地甚
 之丞・長谷彦太郎・加藤新之助・黒田鐵兵衛・二之宮藤
 右衛門・松山九郎・藤山源左衛門・竹下權之丞・木原壯

之丞・千田壯之丞・齋藤源助・崎山郷兵衛・大山彦八・
野村善助・益山鐵之進・井上七郎・田代宗次郎・松永清
右衛門・勝部善兵衛・有馬郷八・松元覺右衛門・小牟田
源五右衛門・山本納助・山口矢四郎・伊集院善助・藤井
助市・是枝幸左衛門・谷元十郎・安田與三兵衛・松田直
衛・高崎喜兵衛・木藤宇左衛門、

右者佐多其外東目海岸に異國船致渡來、御人數被差出
儀も外ハ、早速可被差越外條、兼る致用意可罷在旨可
申渡外、

八月

近江

笑左衛門

山口十藏・寺師郷次郎・大牟田仙之丞・伊集院直八・町
田六郎・小山田眞八・藪田仁右衛門・里村七太郎・肥後
伊兵衛・伊勢喜右衛門・川上十郎太・肥後助五郎・坂元
彦五郎・高城元藤庵・吉村才之丞・新納彦左衛門・市來
善左衛門・本田新十郎・兒玉佐平次・船木直太郎・落合
八郎左衛門・伊東猪之助・川口二四郎・久保源助・野津
次郎左衛門・竹下仲藏・藤崎新次郎・二階堂與右衛門・
久保源之丞・川上半藏・細江彌右衛門・五代傳左衛門・

猪俣休次郎・伊東彌八郎・山田彌十郎・中馬甚七・横山
彌三次・野元彌八郎・川上柳之進・種子田正之丞・岩本
新之丞・貴嶋清八郎・山口鐵之丞・長崎正右衛門・今井
與三右衛門・肥後直助・相良小平太・津曲金左衛門・岩
山四郎・奈良原喜格・岩山吉之丞・高木助次郎・嶺崎仲
次郎・甲斐右八郎・木脇休五郎・樺山正之進・別府仙左
衛門・和田源兵衛・高野嘉太郎・鎌田諸右衛門・伊勢九
郎八・川上宗次郎・上井甚助・村田鐵兵衛・中村小八郎・
黒木吉兵衛・福山清藏、

右者佐多其外東目海岸に異國船及渡來、御人數被差出
外儀も外ハ、大砲拾挺一組可被差出御手當ニ付、爲
打方出役被仰付外條、兼る其旨相心得可罷在外、

右可申渡外、

九月

近江

上井甚五右衛門・久保次右衛門・篠原伊平次・有川藤七
郎・貴嶋嘉右衛門・森祐藏・市來十左衛門・仁禮覺左衛
門・橋口甚五郎・菱刈新五兵衛・伊東鐵兵衛・樋口小八・
木村次右衛門・吉井直八・竹下甚四郎・堀添市郎左衛門・
林二郎・久保與八左衛門・伊集院正兵衛・左近允新七・

平嶋助左衛門・川上四郎左衛門・上原喜之助・田尻彦次郎・矢野清右衛門・石神新五右衛門・坂元善次郎・谷村十郎太・和田左一郎・西田彌四郎・武五郎右衛門・千田七左衛門・中馬清右衛門・山田直五郎・本田半助・土橋三右衛門・大野彦四郎・長倉彦太郎・勝部善兵衛・大迫喜右衛門・徳田助十郎・濱田勇右衛門・美代藤兵衛・國分佐左衛門・中村孫次郎・成松伊兵衛・河俣新六・前谷清太郎・東條助左衛門・伊東萬次郎・川上三七・永山清右衛門・神宮司筑左衛門・町田仁藏・大山彦次郎・津留八之進・重田彦兵衛・川俣作之進・山元彦左衛門・河野藤次郎・萩原平右衛門・新納宗次郎・有馬伴左衛門・志和地喜太郎・有馬仁左衛門・田中七郎・植村十藏・有川直次郎・河嶋新五郎・馬場彦右衛門・肥後三之助・竹内善之進・川崎仲左衛門・岩切與兵衛・西田藤兵衛・西藤左衛門・野元吉左衛門・寺田清十郎・田中八郎右衛門・土師吉兵衛・仁禮吉左衛門・四本休之進・千田龍助・愛甲嘉兵衛・橋口權左衛門・大迫休太夫・加治木新之丞・喜入正之助・相良休右衛門・北郷八右衛門・阿多源七・大橋八郎太・村田十藏・川北喜八・石神萬兵衛・寺田平八・精松與八郎・渡邊七左衛門・村田次左衛門・田原八三次・

新納良右衛門・加藤東市郎・岩山八郎・宮之原甚五兵衛、
右老長崎江異國船及渡來、萬一從 公邊御加勢人數被
差出外様御奉書御到來外ハ、早速出役被仰付外條、
兼其旨相心得可罷在外、

右可申渡外、

九月

近江

成田彦十郎・竹下清右衛門・木脇賀左衛門・藪田新助・市來宗太郎・尾上仲右衛門・飯牟禮爲次郎・沖直次郎・深見新之進・橋口權藏・田代源之丞・隈元彦右衛門・伊東藤七郎・和田九十郎・今村源右衛門・長崎源五・三原眞八郎・田尻源兵衛・星山彌右衛門・原口吉之丞・平田茂八郎・日高眞乘坊・藤井才太郎・川村與十次郎・村田次右衛門・吉富次左衛門・中江九右衛門・川上守之進・上原孫次郎・隈元休右衛門・染川伊兵衛・中原休左衛門・法元太郎左衛門・松元喜兵衛・兒玉助太郎・宮原次郎右衛門・倉野格兵衛・川口市二・有馬糺右衛門・蓑田新平・安田喜三太・中馬傳右衛門、
右老長崎江異國船及渡來、萬一從 公邊差出外様御奉書御到來之節考、大砲六挺一組可被差出御手當ニ付、

爲打方出役被仰付、兼其心得可罷在外、

右可申渡外、

九月

近江

嘉永元申九月十五日近江殿被相渡外御書付写

御使番寺尾庄兵衛、御目付寺田平右衛門・汾陽彦次郎、

小頭小森新藏・福嶋半次郎・伊集院周八・中山甚五兵衛・

原田眞之丞・小倉四郎太、

右老長崎に異國船致渡來、萬一御人數被差出外ハ、

御備組之内右之通被仰付可被差出外條、兼其心得ニ

右罷在外様可致内達外事、

申九月十五日被仰付外事、

稅所彌藤次・松元鐵之助・市來正右衛門・伊地知嘉左衛

門・竹迫十郎右衛門・伊地知徳四郎・榎元九八郎・市來

傳次郎・有川喜左衛門・深見新之進此、名前ニアリ・永田清太郎・佐久

間仲藏・有馬藤之丞・前田源次郎・市來正一郎・林小十

郎・磯永彌九郎・掛橋岩次郎・平野休左衛門・田原直助・

土橋藤五兵衛・田中正太郎・家村彦九郎・市來善藏・伊

地知彦兵衛・水間甚助・有馬藤右衛門・本田善次郎・大

牟田吉次郎・米良六郎・鎌田十次郎・田中源左衛門・伊

藤岩五郎・奥山喜三次・鬼塚太兵衛・有馬直五郎・川上

九戸・寺師八郎右衛門・湯地伊三次・伊勢勘兵衛・小山

田勘兵衛・伊東清太郎・松岡次郎助・隈元直次郎・鎌田

岩次郎・平田友十郎・伊集院喜藤太・伊地知源次郎・池

田仲八・青山清左衛門・川上彦次郎・前田新太郎・川西

藤之助・堀直四郎・山元仁右衛門・本田孫九郎・山澤十

次郎・矢野喜三次・木村休太郎・湊川源兵衛・與倉直次

郎・伊集院藤藏・町田孫一郎・村田孫一・鎌田平左衛門・

中原四郎兵衛、

右老山川其外西目海岸に異國船致到來、御人數被差出

外儀も外ハ、大砲拾挺一組可被差出御手當ニ外間、

(方丸)

爲打立出役被仰付外條、兼其旨心得可罷在外、

一物頭六人、藤井綴喜・郷田仲兵衛・上野司・有川勇四

郎・伊集院半之丞、外ニ壹人、

右六人之内壹ヶ月ニ兩人ツ、繰廻を以立前相定む、

右御領内海岸防禦又老長崎御加勢として被差遣、御兵

具方足輕召連外等也、

御備組人數賦有之略ス、

末紙右書左之通也

右者出馬無之家來迄被差出外節、人數割等右之通被相

定外條、何篇堅固ニ被致手當置、急變之節無遲滯御差
圖之場所ハ可被差出外、到後年聊緩疎有之間敷者也、

嘉永元年申八月

御軍役方
御家老座印

148

御系圖 齊彬公御子

男女六人

篤之助

嘉永元年戊申十一月二十三日生、母伊集院兼珍女、

二年己酉六月二十二日天亡以六月二十日爲忌日、法名篤入院殿實

相起信大禪童子、

149

白木御文書拾番箱中 三十三番

知行目録

高五拾斛

鹿兒嶋小山田村之内

市來湯田村木下門之内

谷山五ヶ別府村之内

曾於郡松永村之内

名寄帳在別冊

右者御改革方ハ被掛置、江戸・京・大坂等ハ及行々被差

出、殊御領内諸郷百姓共先年來別々相勞、追々離散者共
多、太切成御年貢上納者勿論、御高格護及不相整様相成

外付、調所笑左衛門ハ廻勤被仰付、榮勞見分之上百姓共
延立外趣法を付、離散者共追々歸參、其外御新田・新鹽

濱開發、古荒引起方等可致取扱被仰付、笑左衛門諸郷致
廻勤外付被召附被差廻外處、別々懸心頭拔群致精勤、近

比ニ到外者上見部下延米ハ納等及相止、不及門割ニ及
百姓離散者共餘多立歸外時宜成立、至極之御都合相成外

段被 聞召上、別段之以 思召右之通拜領被 仰付外條、
全可有務外、仍如件、

嘉永元年十一月廿六日

末 近江 久平判

嶋 將曹 久徳判

嶋 石見 久浮判

嶋 壹岐 久武判

海老原宗之丞殿

嘉永元年十二月二十二日

大家以_レ 上使松平久之丞_レ賜_レ御鷹之鶴於齊興、

舊冬於國許海岸防禦之儀申付、專

家老中_レ

大中様

貫明様

嘉永二年己酉春正月二十五日以_レ 上使松平伊賀守_レ

賜_レ告賜_レ品如_レ例、

右大將家定公以_レ 上使久世大和守_レ賜_レ品如_レ例、(広尾)

十八日登_レ城拜_レ謝之、蒙_レ懇命_レ見_レ賜_レ馬如_レ例、

○二月四日發_レ江府、三月二十四日着_レ鹿兒島、

今也我藩地設_レ軍法_二也、所_レ以專據_レ我

大中公

貫明公

松齡公之舊制_二者、不_レ當取_レ其良_二也、又爲_レ欲_レ使_レ今世士

風法_二當時忠厚_二故也、宜_レ家老_レ了_レ其意、故詳告如_レ左、

包紙御筆

仰出

一男七人

松齡様御代之御舊法_二其基_レ致改正_レ儀、御軍法而已ならず其時分忠厚之風俗兼_レ奉慕_レ付、今般

御廟造營等爲取掛_レ事_二外、然者海防手當向_レ者何程行届_レ外共士氣衰弱_二有_レ之_レ外_レ者不用立、士之儀者平日禮讓を嗜、律儀を守文武之心得無_レ之_レ外_レ者、違變之期_二臨_レ不

覺未練之振舞_レ可有_レ之_レ外_レ條、兼る廉節を不闕儀を第一_二心掛、武士之本意不取失儀肝要_二外、勿論數百年來太平

之化_二浴し、自ら世上驕奢遊惰之習俗相成、別る數數次第_二外間、以來一統相勸、面_レ質素節儉を用ひ、分限相

應武器等用意致置、外寇隙を伺ひ_レ砌柄之事_レ外條、萬一不慮之儀於有_レ之_レ外_レ者速_二出張忠勤を盡シ、家名を不墜様常

々可心掛儀專要_二外、若舊染を不改不埒之所行於有_レ之_レ外屹と可及沙汰_レ、此旨篤と可申聞候、

一 虎壽丸

儔次郎

嘉永二年己酉閏四月二日生、母同菊三郎奥母田、官氏女、

四年辛亥三月三日立爲世子、

安政元年甲寅閏七月二十四日夭亡、法名覺法院殿眞

空自證大禪童子、

155 白木御文書拾番箱中 三十六番

一 父

御本丸御持弓頭

高木内蔵頭組與力

横瀬三郎兵衛

克己(花押)

御本丸御召方

奥坊主

丹羽惠林娘

一 御誕生弘化二年己七月廿八日

右 老

寛之助様御誕生之年月日并御實母右之親姓名實名、又
老他人之養女等相成居外儀も外老、右之譯迄々相糺可
申出旨被仰渡趣承知仕、江戸詰同役方以問合越置申外
處、右之通御座外旨此節便方申越外間、此段申上外、
以上、

酉六月廿七日

御廣敷御用人

156 齊興公御譜中 七月二日

齊興命建三軍神祠於般若院、以祀之禱之、故附高如、

左、

157 白木御文書拾番箱中 三十七番

知行目録

高三百斛

内

帖佐東餅田村之内

高貳拾壹石九斗壹升壹合四夕六才

出口門

鹿兒嶋小山田村之内

高拾壹石八斗八合八夕四才

諏訪田門

鹿兒嶋西田村之内

高拾九石四斗九升五合八夕四才

福山門

鹿兒嶋中村徳重門之内

高拾石

浮免

始羅郡山田下名村窪蘭門之内

高八石壹斗五合七夕四才

浮免

帖佐中津野村之内

高貳拾六石九斗八合七夕五才

宮蘭門

阿多中津野村之内

馬越田中村之内

高五石七斗五升七合壹夕五才

神崎門

高貳拾四石六斗八升

溝口門

串木野上名村三浮免之内

高原水流村之内

高六石壹斗五升五合三夕

浮免

高拾七石貳斗八升貳合貳夕九才

高瀬門

志布志月野村岩廣門之内

加久藤灰塚村之内

高拾石

浮免

高貳拾石

木崎門

財部北俣村萬浮免之内

百次百次村之内

高拾三石七斗五升三合壹夕貳才

浮免

高貳拾三石七斗九升四夕六才

小原屋敷

財部下財部村之内

名寄帳在別册

高拾六石五斗貳升壹合六夕七才

田之上門

右考深 思召之譯被爲 在、寺格等昇進被仰付置、此節

高山野崎村之内

大村門

高八石

大村門

串良岡崎村之内

御軍神勸請被仰付、追々重御祈禱可被仰付事付付、小

高拾七石七斗九升壹合六夕七才

徳留門

祿二の考旁難行届筈付付、別段之以 思召右之通御高被

山之口富吉村濱川門之内

末川近江

高七石壹斗九升三合三才

浮免

嘉永二年七月廿六日

久平判

諸縣郡吉田水流村水流田門之内

嶋津將曹

高拾四石

浮免

嶋津石見

湯之尾川南村之内

浮免

久澤判

高拾六石八斗四升四合六夕八才

下船津田門

嶋津壹岐

緋印判

久武判

川上東馬

久封判

般若院

右包紙
嘉永二年酉七月廿六日石見殿6冷陽彦次郎5被成御渡、白木御

文書拾番箱へ納置外事

御系図 久光公御子

一男七人

一珍彦

一女子

一忠欽

一女子

於郷

嘉永二年己酉八月十六日生於重富第、母櫻井玄淨盛

命妹、十二月十四日夭亡、法名梅含玉貌、

一女子

於盛 島津又之進忠亮夫人

嘉永二年己酉十二月二日生、實島津圖書久寶女、母

島津大炊貴柄女、

元治元年甲子四月久光養以爲子、

159 齊興公御譜中

嘉永二年冬十一月

右大將家定公行_二婚禮_一、二十五日以_三上使戸田淡路守_二、

一、御籙中以_三御使古山善一郎_二各賜_二一種_一荷於齊興_一、

160 白木御文書拾番箱中 三十八番上

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

嘉永三年正月十一日 齊興御判

161 齊興公御譜中

嘉永三年庚戌春三月三日以_三宿次奉書_二賜_二御鷹之鶴_一、

162 齊興公御譜中

先是以_下今秋率_三疏使_一參附_上、故請_二借金_一於

大家_一、三月二十三日應_レ徵島津淡路守_一、代_二齊興_一登

城、拜_二借金壹萬兩之許_一、用番老中阿部伊勢守_一、傳、

先是中山王尚育卒、尚泰繼統、今茲嘉永三年庚戌獻使於

幕府謝恩、正使玉川王子朝達・副使野村親方朝宜六月十日着鹿兒島、越八月二十一日已剋齊興率兩使發鹿兒島、十月晦日着江府、四年辛亥二月十七日兩使歸至鹿兒島、

嘉永三年冬十一月十三日

大家以_(忠温)上使戸田山城守、問齊興參府有懇命、十五日齊興登城述參府之禮蒙懇命一如例、

○十六日

大家以_(忠温)上使深谷遠江守賜米二千俵、是以下率疏使參府也、

三年十二月三日應徵登城、拜謁

大樹家慶公於座之間蒙懇命、見賞齊興襲封以來之格勤、公手自賜朱衣肩衝器、齊興謹拜受之、

吉書

一神社佛閣修造興行事、
一可專勸農事、
一可徵納國々年貢事、
右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、
嘉永四年正月十一日 齊興御判

男九人
女子

暲姬 忠義夫人

嘉永四年辛亥正月十六日生、母同菊三郎実母伊集院兼珍女

明治二年己巳三月二十四日逝、年十九、神號稚櫻豐暲姬命、

嘉永四年辛亥正月二十七日

大家以_(忠温)上使戸川助次郎賜御鷹之鶴於齊興、
○二十九日請齊興告老讓封於世子齊彬於

齊彬公御系図

大家、二月朔日老中連署之奉書以 徵齊興及齊彬、
(重要男)
 翌二日南部遠江守信順代ニ齊興一與ニ齊彬一併登レ城、於ニ
 白書院縁類ニ老中列座、以ニ用番松平和泉守乘全一傳ニ
 台命一、允ニ齊興告レ老齊彬襲レ封、
 ○十五日應レ徵南部遠江守信順代ニ齊興一登レ城、見ニ
 大樹家慶公一、獻ニ太刀一腰・馬代金十兩・縮緬十卷一、
 謝ニ告老之恩一、

嘉永四年辛亥二月二日應レ教登 城、奉ニ台命一襲レ封、
 執政松平和泉守乘全傳之、是受父齊興之讓也、是日齊彬
 受系譜・重器如例、三日改名薩摩守、十五日登レ營見ニ
 兩御所一、獻ニ御太刀一腰・御刀能登國 國長一腰・縮緬二十卷・
 銀百枚・御馬二匹於
 家慶公、御太刀一腰・御刀肥後國 房賀一腰・銀百枚・御馬一匹於
 家祥公ニ、謝ニ襲封恩一、是日家臣見亦如例、二十七日 上
 使賜レ告資品如例、越二十八日登 城見ニ
 大家ニ謝レ之、乃賜ニ御刀美濃國 兼則一腰・御馬一匹一、爲ニ嗣位初
 如レ國故也、

170の1

白木御文書拾番箱中 四十一番

包紙 太守様 御袖判

(島津齊彬) (花押 No.1)

今度

宰相様依御願御隠居、我等は家督無相違被 仰出外、領
 國之輩専重 公義之御政道、萬端可相愼之、國家之仕置
 先規之通申付外條、不致忘却堅固可相守之者也、

嘉永四年二月二日

170の2

包紙ニ

宰相様

御筆仰出

家老中は

今度我等隠居、修理太夫家督付る者、政事向等先規之通
 ころ猶又萬端相勵、各職分を相守精勤可申外、
 右之趣國中末々迄表可申付外、

口裏ニ

添書寫

此節

御隠居御家督付る者 御政事向等御先規之通ころ、猶又
 萬端相勵致精勤候様

170の3

宰相様より御別紙之通被 仰出_レ間、右之趣人々懸心頭
出精可相勤_レ、尤支配有之面々者支配下末々迄委曲可
申聞_レ、

二月

(馬津久徳)
將曹

右外包紙ニ
(朱)四十一番

嘉永四年亥三月二日豊後殿_ニ被成御渡、白木御文書拾番箱_ヲ納
置_レ事

171 白木御文書拾番箱中 四十二番

嘉永四年二月二日付每朔御條目迄通_者、文化六年六月十七日齊興
公御家督之節御條目ト同文故略ス、参照スヘシ

172 白木御文書拾番箱中 五十七番

外包紙ニ御讓狀トアリ
内包紙ニ松平修理大夫殿トアリ

(の1) 今度家督首尾能被蒙 仰令安堵_レ、因茲相傳之家實別錄
之表讓與之_レ條、到于子孫萬代可被讓渡之狀如件、

嘉永四年二月二日 大隅守齊興(花押 No2)

松平修理大夫殿

(の2)

包紙ニ
重物目錄トアリ
重物目錄

一系圖

一文書五帖

一同巻物數十軸

一家康公御墨印一通

一秀忠公御感狀一通

一御判物九通附領知目錄八通

一記錄六百貳拾三冊

一源氏重代膝丸之御太刀一腰 改小十文字
光世作

一賴朝公御太刀一腰 號大十文字
無銘

一賴朝公御守脇指一腰 無銘
鳩作

一賴朝公御本尊 弘法大師一
刀三拜之作

一五指量愛染明王像一體

一多田滿仲御守本尊

一摩利支天像一體

一忠久公御鎧一領

一右御鎧うつし一領

網切
一太刀一腰 兼永作
一旗二流 一流_新時雨之旗
一流_新白旗

八幡十

一太刀一腰 青江恒元作

一般若之劍一振 波平行安作

一太刀一腰 宗近作

血吸之劍

一劍一振 弘法大師作之由

一手鎗一本 城州長吉作

一一本杉馬驗一本

一太刀一腰 真利作

一琴一面 遠薦

一衛府太刀一腰 貞真作

一鞍一口 鐙一掛 梨子地蝶之高蒔繪紫大形繪
虎皮泥障野沓四方手添

一旗一流 八幡大菩薩之文字有之

一太刀一腰 康次作

一腰物一腰 包平作

應之巢

一脇指一腰 宗近作

八景

一釜一口

小泉

一胄一頭

平野肩衝

一茶入一箇

朱衣肩衝

一茶入一箇

一腰物一腰 長光作

一脇指一腰 弥正宗

一脇指一腰 堀尾正宗

一太刀一腰 正恒作

一腰物一腰 來國光作

一太刀一腰 備前長光作

一腰物一腰 正宗作

一腰物一腰 來國行作

一脇指一腰 筑州住左文字作

一太刀一腰 備前守家作

一腰物一腰 無銘左文字

一脇指一腰 貞宗作

一腰物一腰 國行作

一腰物一腰 則光作

一脇指一腰 備前兼光作

一腰物一腰 則宗作

一腰物一腰 備前吉房作

一腰物一腰 備前助真作

一腰物一腰 一文字作

一腰物一腰 備前長光作

- 一腰物一腰 三條吉家作
- 一腰物一腰 越中國則重作
- 一腰物一腰 來國光作
- 一脇指一腰 來國光作
- 一腰物一腰 備前則宗作
- 一腰物一腰 貞宗作
- 一腰物一腰 正宗作
- 一脇指一腰 來國行作
- 一腰物一腰 延壽作
- 一脇指一腰 尻掛則長作
- 一腰物一腰 備前助守作
- 一腰物一腰 包永作
- 一脇指一腰 延壽國重作
- 一腰物一腰 大和志津作
- 一腰物一腰 和州則長作
- 一腰物一腰 信國作
- 一腰物一腰 備前國弘利作
- 一腰物一腰 來國眞作
- 一脇指一腰 信國作
- 一腰物一腰 信國作

- 一腰物一腰 阿州氏吉作
- 一脇指一腰 備前國清眞作
- 一腰物一腰 一文字作
- 一腰物一腰 備前國師景作
- 一腰物一腰 青江貞次作
- 一腰物一腰 美濃國兼重作
- 一腰物一腰 三原正近作
- 一腰物一腰 豊後國長盛作
- 一腰物一腰 備前國清光作
- 一脇指一腰 相州綱光作
- 一鞆一口 鏡一掛 龜甲高時繪金具散四方手添
- 一鞆一口 鏡一掛 菊之御紋高時繪梨子地
- 一鞆一口 鏡一掛 桐之地紋高時繪有鏡黒塗
- 一鞆一口 鏡一掛 伊勢伊勢守貞宗作忽梨地唐閉扇高時繪鏡紋板之透燕井
- 一旗一流
- 一腰物一腰 吉房作
- 一鞆一口 紋猿金具
- 一鞆一口 鏡一掛 黒塗紋金具
- 一轡一間 正宗作

以上

嘉永四年二月二日

上包
御覚書

覺

白熊對鎗 元直 二本

長刀 嶋田義助 一振

以上

白木御文書拾番箱中 四十三番
包紙

太守様 宰相株御明細書写式通トアリ

本國薩摩

故溪山齊宣嫡子

生國薩摩

正四位上宰相

松平大隅守齊興

亥六十三

嘉永四辛亥二月二日隱居

薩摩國一圓 本國薩摩

高六拾萬五千石餘大隅國一圓

大隅守齊興嫡子
從四位下少將松平薩摩守齊彬

日向國之内 生國武藏

外拾貳萬三千七百石琉球國

文政七甲申十月十五日初 御目見、同年十一月廿一日元

服、從四位下侍從、天保三壬辰五月十八日改名豊後守、

同五甲午十二月十六日少將、同十四癸卯二月九日改名修

理大夫、嘉永四年辛亥二月二日家督、同二月三日改名薩

白木御文書拾番箱中 三十九

一筆致啓達、

公方様 右大將様益御機嫌能被成御座、間可御心易、

將又御鷹之鶴拜領、條、以宿次差越之、恐、謹言、

二月四日

松平伊賀守 忠優判

松平和泉守 乘全判

戸田山城守 忠温判

牧野備前守 忠雅判

阿部伊勢守 正弘判

松平大隅守殿

右外包
嘉永三年戌三月四日宿次を以御到来付致格謹置、條、將曹殿、
佐多徳八郎致承知之

摩守、

居城薩州鹿兒嶋

木御文書拾番箱、納置、事

右包紙
(朱、四十三番)
嘉永四年亥四月七日石見殿より江田五郎左衛門、被成御渡、白

白木御文書拾番箱中 四十八番
包紙^二

高野山 蓮金院トアリ

其院者從中納言家久代爲當家宿坊、因茲所令寄附之庄園
至當代不可有相違之條、先祖之日牌寺擔之修甫等如先規
聊緩疎有間敷者也、仍狀如件、

嘉永四年四月五日 少將齋彬御判

高野山
蓮金院

爲 嶋津家宿坊、中納言家久代興隆寺領被寄附早、今度
少將齋彬任先判之旨被遣證書之間、諸事如先例無怠慢可
被致沙汰候、仍狀如件、

嘉永四年四月五日

嶋津將曹
名乘判

包紙^二
高野山
蓮金院

嘉永四年亥十月五日豊後殿^〆平岡八郎太夫立御渡、白木御文書

拾番箱へ納置外事

白木御文書拾番箱中 四十四番
包紙御筆

仰出

今度

宰相様御隠居我等は家督蒙 仰、別る令心配り、依る者
以來不心付儀もりハ、無遠慮吳見可申聞り、且又各初諸
役人末々に至る迄、専ら

御先代之規則に基き、我意私欲等無之正路を心掛、上下
之情意致通達、國中之仕置行届り様利害得失を考、萬端
入念可取計り、諸士末々も弥文武忠孝之道を志、質素
節儉之風儀を守り、信義を専として武道之心掛可爲專一
外、農工商も代々の法令を守り、夫々の職業を勵み、
父祖之孝養無怠、日夜家業出精專一^二外、

右之趣家老中を初領國一統無心得違可令承知、猶追々
可申達外、以上、

右外包紙^二
御筆仰出書通

右嘉永四年亥五月十六日被 仰出、同廿日近江殿より可致格護
置旨町田孫一郎致承知之、白木御文書拾番箱^元納置之外事

白木御文書拾番箱中 四十六番

靈社神文前書之事

一私儀攝政役被 仰付、誠以外聞實儀難有仕合奉存候事、

外ヶ條略

右條々今度就

177の3

御家督、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背
者、

神文略

嘉永四年辛亥五月廿二日

浦添王子

朝喜判

177の2

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、冥加不淺
難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

外ヶ條略

右條々今度就

御家督、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背

者、

神文略

嘉永四年辛亥五月二十二日

座喜味親方

盛普

178

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、冥加不淺
難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

外ヶ條略

右條々今度就

177の4

御家督、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背
者、

神文略

嘉永四年辛亥五月二十二日

池城親方

安邑判

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、冥加不淺
難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

外ヶ條略

右條々今度就

御家督、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背

者、神文略

嘉永四年辛亥五月二十二日

國吉親方

朝章判

雜抄

嘉永四年亥夏

御趣意之寫

米下落之事ニ付申聞趣有之ハ處、先達ハ四千石申渡相
濟分を今度賣捌ハ様可及内諭、其餘五千石申請米之内
貳千石を直下ニ申請爲致可然ト之評儀之趣、尤之吟

味ニ付其通申付外有之間敷ハ得共、一躰此度直下り之儀申出ハ趣意左ニ申聞ハ間、今一往勘考有之度ハ、

一高直ニ申請ハ四千石、下直ニ賣捌ハ様及内達爲致賣捌、

以後申請物有之ハ節、下直ニ爲致申請ハ得共、町人共迷惑ニ者不及由尤ニハ得共、以後前文之通下直ニ爲致申請ハ得共、いつれ之筋勝手方之損亡相成ハ間、同し損亡ニ相成事ハ、此節之四千石申請相成ハ代金之内、此度下直ニ賣捌ハ様申渡ハ節、過上之金子をハ致上納ハ者ニ返し遣ハ、諸人救之爲ニハ間、何様ニも賣捌ハ様申達ハ方當然ニ有之間敷哉、尤一度ニ損失ニ相成ハる差支之廉表可有之ハ、其致方者如何様ニも可有之、且亦此度致内論、下直ニ賣捌ハ様申渡ハるも、元來利を專ニ心掛ハ者ともゆヘ、眼前損亡ニ相成ハ間、表向者命令ニ從ハハるも、内分ニ有者如何之取計有之間敷と表不被申、シハらくたりとも高直ニ申請いたしハを眼前ニ下直ニ賣捌ハ様、町人ハ對シ申渡ハ表十分之仕置と表不被存、何事ニよらす下ニ申渡ハ儀表上ニ有行ハ上ニハ得共、命令も行届申もの、由承及ハ間、上ニ有者先ツ不致損亡、町人共ハシハらくなり共及損失賣捌ハ様申渡ハ儀如何可有之哉、町

人共者大家ニ有今日渡世之以利益世を渡リハもの、武士ハ食祿を請、信義を專と致ハ處、當然と存ハ條、少し不相當かと存ハ事、

一種ニ遂吟味ハるも逆も四千石上納過之金返し遣ハ儀難調候ハ、四千石之分者一圓内論等も不致捨置、此度之貳千石ニ今千石も重ハる、無高・無役・無勤之諸士ハ割付ハる下直之直段を立、藏方ニ有直ニ爲致申請、一度ニ不相渡、當秋米穀下落ニ相成ハ迄少々ツ、割渡遣、申請上納之儀者當年迄不申付、來年方五ヶ年敷、又者十ヶ年ニ申付、其内逆も上納難叶趣相聞得ハ者者、其時之吟味年府置延申付ハるも可然、左ハ得共不申渡とも自然と市中米價及下直、末々之仕合可相成事、一十分ニ申ハ得共、五千石之内貳千石者前條通申請ニ申付、四千石之儀者下直ニ賣捌ハ様申渡、及過上ハ金子者差返度ハ、左ハ得共勤方無之困窮之面々も大ニ力を得可申事、

一前條通ニハ得共、相應之損亡ニ相成事ハ得共、當年も大坂表都合御手傳等有之事ながら、殘分相應ニ可有之、夫ニ引比ハ得共、格別之損亡ニ有差障相成程ニ者相成間敷、只内用方積金例年者不足ニ及ハ計之事と被存

外、

一右之通及不足外者、不働之様にも相聞得、旁掛念之趣も可有外得共、無用之譯こゝ及不足外にも無之、太切成國家之固メニ相成外諸士末々迄、及危急外を救外爲ニ外間、今一往吟味有之度外、

一か様之儀如何にも理屈ケ間敷外得共、近年者無之事、太平とハ乍申、日本諸所ハ吳國船渡來、第一琉球ハ若辰年以來吳人逗留罷在、追々根深く可相成哉之模様にも相聞得、其上近年中ニ者日本ハ表通商願として可致渡來哉之聞も有之、旁治ニ亂を不忘之時節と被存外、左様之御平常諸士及困窮外者、萬一吳船渡來外とも心は十分ニ存込外族も中々手整申間敷、且又兼る風俗禮儀相守様申付置外處、今日之飢餓ニせまり居外者志有之面々も學文武藝者さて置、心ニハ惡念無之外も無據非儀之働有間敷共不被申、左外者往々宜敷役儀可勤程之人柄相少者必定ニ外、上より利益計を吟味致外者、おのつから下々者猶更惡風流行無疑もの、よし承及外、右之通ニ外ハ、第一金銀之損亡より者別々大成國家之損亡と存外事、且吳國船手當之儀者老中方も分る承知之趣も有之、事ニ依る者當家計にも無

之、日本之御國體にも響キ外間、能々心得外様存外、

天之時地之利よりも人和第一之よしも承及外、將又浦々末々ニ到る迄、我知行と存込外儀第一之心得違ニ外、從

天子國家人民を奉預りと存外得者間違有之間敷存外、右様不入迄も大造ニ考外ハ、此節之損亡ハ鎖細(マツ)ニ外、國家之損亡と者雲泥と存外、尤此節之一儀ニ外永年諸士之救ニ者不相成儀ニ外、其事ハ追々評儀之趣可有之外へとも、先差當ニ外衣食住をしハらく成とも暮安くいたし遣外得者、人氣も引立可申、其上追々取計様も可有外、

一米價下直ニ外よひ外者、他國拔米之掛念も有之よし尤之事ニ存外得共、唐物取締其外他國に出取締之手數有之事故、此節者分る趣意申達、横目其外人念改外ハ、左様掛念ニ者及間敷哉と被存外、尤右之通ニ外ハ、大目附々急度申渡、町奉行又者諸郷役々船持并賣人共ハ申達外可然事ニ外、餘り手強可存外得共、一人之奸商を殺し、萬人を助る趣意にも可當存外事、

一家督涯萬事不案内之事ニ外斟酌存外得共、諸士末々迄困窮之儀聞捨も難致、其上長防并藝州・筑前等去年多

分之及損亡、米穀拂底之由り得共、此地より米價下直之様子相聞得り條、公邊に聚斂甚敷様相聞得り者不可然、且者出立前老中方分内達之次第も有之り間、無據申聞り、將又家督に付る者品々祝儀等も有之、恩赦之ものともを吟味有之時節なる、有罪のものさへ恩赦之儀御座り間、まして無罪困窮之士民に條、祝儀遣りと存、米價格別之下直に相成り様致し遣度申聞り事、

一市中其外共一度に大造之賣買等不致様申渡りハ、拔米之爲にも可然、且又錢之儀も町人共之内多分は圍置り様承及び儀も條、是又拔米同様急度申渡、末々不及困窮様取計有可然存り、當時なる者兩替等急なる難調様は條、左りる者下り一日かせきものとも必定難儀り間、實に錢不足之譯ありハ、引足り様吟味有之可然事り付、古より國家之動亂者人心之動亂より起り申り、人心動亂之基十か八九者米錢不勝手より萬事起ものよし承及び條、國家之節儉者金銀を貯、利益を考ル計なるハ相濟申聞敷り、

一米壹石壹貫程直下り可申渡との事り得共、折角之事故、市中小賣を拾三四貫より上に不相成様有之度り、

一當春も於公邊者御救之爲、御米を世上之米價を格別下直に御拂被仰付り事も有之、筑前なるも昨年大凶年之譯なる別段に者御座り得共、公邊を被仰出置り國役之圍米迄も届之上、救助之爲國中に相渡り由、夫とハ相違之事り得共、當地なるも公邊の如く圍米差出、下直に救遣りるも當然之事と存り、前文之趣事々敷可存り得共、兼る存込之事も序にまかせ申聞り、尤加様之書面表に可申達事なる者無之、其方とも四人者側近要用之役場相勤り間、何事も打明申聞り條、前文之趣尤之事も御座りハ、此趣意を以皆く取扱り者に程よく申聞遣度存り事、

右嘉永四年亥夏御側役に被爲 仰聞り由り事、

179 白木御文書拾番箱中 四十五番

御短刀一腰

右馬尉源國頼作裏に象眼に而
豊後守齊宣帶之

一長九寸五部

一鞆白木

一袋緞子裏白小柵紗綾紐勝色糸打

右文政十三年寅七月廿七日從

齊宣公

齊彬公に被進、追る御讓御道具之内に被召入置け様被遊 御承知置け

御短刀に、此節御納戸御格讓被仰付、御讓御道具に被入置け條、至後年鹿抹之儀共無之様可記置者也、仍如件、

嘉永四年亥七月廿七日

(末山) 近江久平

(島津) 石見久浮

(喜入) 多門久通

(島津) 豊後久寶

御納戸奉行

右包紙^二 書附寫

(末) 外包紙^三

嘉永四年亥七月廿八日豊後殿より被成御渡可致格讓置旨、町田

孫一郎致承知之、白木御文書拾番箱へ納置外事

180 或日誌中

一嘉永四年亥八月十一日組中窮士之面々別段之以 思

召、壹戸に付三盃入壹俵宛御救米被下成り、右に付其

后 御角之藏下芝原へ神前に、供物之如く御賽錢之紙

包爲有之由、

181 齊興公御譜中

四年秋八月十九日

大家以^三 上使水谷彌之助^二賜^三御鷹之雲雀於齊興^一、齊興告老後始有^二此賜^一也、

182 白木御文書拾番箱中 四十七番

包紙^二寫

久

右者二男以下寄合並以上別立被仰付外人而已久之字可被相用旨、被

仰付置外得共、此節願之趣有之、別段之 思召を以別立之不及沙汰、二男之儀老實名右久之字可被相用、依

仰如件、

喜入多門

嘉永四年九月廿六日

久通 名乘判

鳴津周防殿

183 白木御文書拾番箱中 四十九番

御記録奉行に

(舟置男、久珍)
種子嶋彈正殿

一年頭

御座之間御一門方御禮一列被罷出、御座之間二之間
上御敷居より四疊目ニ御太刀表御年男備之出座、五
疊目ニ御禮、御縁類之方御一門方・部屋栖次ニ着座、
御祝儀被申上之、御家老御取合、
御意又御取合有之、

但御式向頂戴物御一門方之通ニ御盃頂戴席

御座之間下御敷居より一疊目、

一八朔御禮之儀、御一門方・部屋栖迄御禮相濟退座之上、
疊目等年頭之通ニ御太刀御側御用人備之出座、御禮
不及名披露、直ニ御縁類之方ニ着座、御祝儀被申上之、
御家老御取合、

御意又御取合有る退座、

一五節句并月次御禮於

御座之間御一門方御禮相濟、引續疊目等は迄通ニ御
禮、御家老名披露着座、御取合申上ハ様被仰付、

一登城之節御樓門橋涯ニ下乗有之ハ様被仰付、

但乗物置所御樓門前通供屋北御門下乗所ハ右ニ可準、

一上り口虎之間高欄、

一御番所并御門番下座御一門方之通、

一謁席并扣所是迄之通、

右老御續柄別段厚以

思召、一世右之通被仰付、此旨帳面可記置、

十月

(島津久重)
豊後

右外包紙ニ
嘉永四年亥十月十二日豊後殿ハ橋口與一郎被成御渡、白木御
文書拾番箱正納置外事

白木御文書拾番箱中 五十番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可専勤農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

嘉永五年正月十一日 齊彬(花押 No.1)

185 雜抄

常平倉大意并愚考

一常平の法ハ前漢の宣帝の時、耿壽昌と云へる人、建儀
せしより始りし事にて、其仕向ハ穀賤時ハ増價而糶、穀

貴時ハ減價而糶ストテ、豊熟の年、米價下直なれば、諸士農民の米穀を以て世を渡るもの、不勝手なる時、直段を増して倉に入置、また高直ある時ハ、無祿の諸士、或ハ職人・市中浦々の面々困窮をなす、其時前文買入置たる米を時相場より引下げ賣出して、萬人都合よき程の價になす、是を常平法と云ひ、圍置く倉を常平倉と名付しなり、其後も晋・唐・宋其外代々の天子此法に基き、常平の法を用ひ、諸人の便利なりしよし、然るに此法も世の末に到りてハ、宋の王安石といへる人の考にて、青苗の法といへるを立しごとく、當座の便利よきとて、深き遠慮もなく常平の法を止め、口にまかせて法を立しより、天下の争亂を引出したる事數々ありしと見へたり、又我朝にても常平倉を置れし事、國史の中毎々見えたり、是も中比より藤原氏天下の權を専らにして、上奢り下苦ミテ自然と其法もすたれ、終にハ保元・平治の逆亂にも及び(遂に)

天室おとろへたり、且又右の仕向を常平と名付しハ漢より初りたれと、其以前も同様の法有しと見えて、管子といへる書に、米價高き時にハ上より賣弘めて價の

下る様こなし、下直に遇れハ上に買しめて直段を増すといふことあり、又戰國の時魏の李悝か説にハ、豊年に大中小の差別を定めて買入米の多少を分ち、又凶年にも大中小ありて賣米の多少あり、たとへハ大凶年の時に大豊年に買入たる斛數程を賣出すとなり、されハ耿壽昌か常平ハ、これらの説に基きたるものにて大抵同じ意なり、此法よく行ふ時ハ上下の便利よく、諸人の大幸となるべきなり、

一常平の起本ハ大凡前文の通なれとも、只今にても取起すにハ國の高頭人躰に應し賣買の斛數、米價の高下迄も時と位を考へ定むべきことにて、右躰の事ハ何によらず古法の意味汲取、其成法に拘はるへからざること勿論にて、此事にあつかる人々よく前文の譯を會得して、其風土時節相應の處を評議の上、手抜なく取あつかはされハ、死物となりて折角の良法もかへつて害となるべきなり、夫に反してよく、常平の法行はるゝ時ハ、國中の便利たる事疑ふべからず、されバ米價の位は當務の人々の吟味すべきことにて、委しく記すに及はねとも、常平の仕向増減賣買の次第を知りやすからしめんかために、例を擧る事左の如し、先つ中年世

上の米價を一石にて十貫文と定めたる賦にて

納米十石 代錢百貫文

同 百石 同千貫文

右之通に中年ならハ此度のことく少しの割を加へ、中年の價相應に買入置き、引つゝき毎年同様の出來ならハ幾年も其通りにて、年々斛數相重ミ貯へ置べし、尤新古米入替等ハ見計ふべし、其内格別の豐熟にて直段相減し、

納米十石 代錢八十貫文

同 百石 同 八百貫文

右之通下直になりてハ、小知行またハ纔計の作得にて渡世するものとも難澁する事もあらは、中年買入の斛數ハ勿論、別段相嵩^(米)買入べし、其直段を増すの次第左の如し、

納米十石 代錢八十五貫文^(米)

同 百石 九拾貫文^(米)

同 百石 同八百五十貫文^(米)

同 百石 九百貫文^(米)

右之通仕向にて、増價而糶といふ本文の意味に合すべきなり、是又引續き豐熟にて米價下落し、諸人困窮の

節ハ買入の穀數を増し、上下よき程の米價に相成様、

幾年も右之通の仕向たるべし、萬一天災かた／＼にて

年からあしく米價高くして、

納米十石 代錢百二十貫文

同 百石 同千二百貫文

右之通高直にして諸人困窮する時は、貯へ置たる米穀を下直に賣出して窮民を救ふべし、

納米十石 代錢九十貫文^(米)

同 百石 百貫文^(米)

同 百石 同九百貫文^(米)

同 百石 千貫文^(米)

右之仕向にて減價而糶といへる本文に叶ふへし、但し増減の次第、豐年凶年共に中年の價に賣買を定めたる時に平等の様なれと、豐年^(是より)に不勝手をいふハ知行にても作得^(米)にて所持するものにて、凶年に困窮する衣食住不如意の者にハ競べかたけれハ、其心得にて増事ハ少く、減する事ハ多かるへき事當然たるべし、

一前文に述ることく、圍米之斛數ハ國々の高頭人躰に應ずる事なれとも、是また大略の員數を定めて年々に相重むべき例を擧る事左の如し、

一 現米十萬石の高頭にて一石ニ付二升ツ、買入、凡二千石の圃米に相成つもりにして

初年圃米 二千石

二年同 四千石

三年同 六千石

四年同 八千石

五年同 一萬石

右を中年大概(之概)にして、此外にも其時の都合にて買入を望む人あらば、作得米をも分限に應し買入れ遣へし、尤豐熟の年にハ猶更斛數を増し買入へし、其内不幸にして凶年ありとも掛の役々心を盡し、其内困窮を恤む心しんせつならハ、各右の圃米にて食を足すまでにハ至らずとも、米價のみなりに增長する勢を抑るにハたりぬべきか、(なり)いつれの筋にても能く右の法に基き、當時の時勢を考へ斟酌して、此善政成就なすべきなり、行わるゝと行はれざるとハ、役々の心を用ゆると用ひざるによるべし、

一 歴代の常平倉邊(を)諸方に造立せしと見得たり、是また人夫の費勞をはふく專要のことなるべし、何國にても此仕向專一なり、たとへハ大村は一村に一ヶ所、小村

ハ一二ヶ村組合たるへし、諸郷藏々出物藏等の内に株分にて圃置も然るべきか、扱又城下を離れし遠き諸郷に至りてハ、事の辨利よからず、圃米買入等聚斂の様に思ふ人々も有へきなれハ、地頭・郡奉行其外より幾重にも申論し、此常平倉の法ハ全く諸人の難儀を救ふためにて、聊も聚斂の意にハあらずといふ事をしらしめて、末々迄承知致させ買入へし、左もなくて掛の下役等若も心得違ひ、作得米(ま)など無理に催促する如きことありてハ、大に諸民の苦となるへきなり、城下にても同様、萬々一役人中心得薄き族(り)あらハ、右の圃米(じ)して常平の取扱するまでと心得違ひ、諸色賣買の高下等取締向等閑に致置事あらハ、諸人の難儀ハ勿論、豪富の面々并奸商の輩ハ手數を盡し諸方より買集め、萬人の困窮をかへりミス、利潤をのミ考る習俗終にすべき(二)様なし、されハ常平の良法ハ企置(立)とも、圃米相嵩(高)ミ、直段等の増減心の儘に取捌く事ハ、數年の後にあらざれハ十分にハ叶ひかたきことなれハ、夫迄の内に少々の水旱などにて、格別に米價を増さんもはかるべからず、然る時ハ折角の仁政の條目ハ定りながら、國民實に恩惠を蒙るにハ至るへからず、憤(世)むべき事ならずや、

仍て常平の一儀規定の上ハ、役人中別して正路を守り、油斷なく商賣の奸計を察し、嚴重に憲法の仕向を設くへき事第一の専務なり、

一前文に述たる奸商を禁絶する事ハ今の時にてハ常平法第一の急務なり、彼等ハ本より金錢の利のミを謀る事なれハ、上より憲法を設る時ハ猶また臨機應變に邪智を廻らし、權家に取入、奸計を逞ふすること昔よりためし多けれハ、役人中油斷の事ありてハ常平倉も有て無かことくなるべし、扱又米穀ハ他物と違ひ、人力馬足又ハ船を借らすしてハ運ハるゝものにあらず、夫を米價下直に過れハ他國に拔賣の掛念あるなと云事、船改行と云かざる故か、亦者奸商共にたぶらかされ、不束の取締して拔米有ての事か、いつれにも尤の義論とハ思はぬなり、是も商人ともの奸計にて、右様の虚説云ふらしめ、米價を下けざる様にと計りしもしれず、若又是迄拔米の事實ならハ役々の無念通例のことにあらず、しかし今更論して益なき事なれハ、以後の處よく吟味に及ふべし、固より奸計の工ミハ時々に品もかはるなれハ、初めより定置べきことハなしかたけれども、第一常平の仕向ハ仁政にて、無據譯合なる事を委細に

書記し、扱城下ハ諸番頭・諸物頭、市中ハ町奉行、諸郷ハ地頭・郡奉行・郷士年寄より津々浦々まで拔めなく町嚙に申聞、此上不正之手筋致すものは嚴科に行ふへき旨得と云ひ諭さハ、假令愚民奸商たりとも十に八九ハ承服すべし、其うち不届のもの罪を犯さハ早く嚴科に行ふべし、小を殺して大を救ふの譯なれハ、少しも宥免の沙汰有へからず、たとへバ拔賣ハ極罪、直段の高下を成さんと不正をはかるものハ其次、密々圍置ハ又次といふことし、明白に示し置たきものなり、さてまた罪の輕重等委細の吟味ハ大目附の任たるべし、一法度行はるゝ時に至りて大奸の輩ハ却て時を得て奸計を廻らし、大利を考ふへけれハ、取締の手續ハ猶々嚴密たるへし、其仕向ハ津々浦々第一たるべし、番所を初め浦役のものとも船出入の折々ハ、穀物の員數逐一改め、國中往來の船も雙方より役々の改し證書引合せても然るへし、又他國への通船出帆の節ハ勿論歸國之節も改見て、船中の人數飯料算をし見て、出帆の時改たる員數に引合せなハ拔米のこと先ツハ叶ふまじきなり、又大船の中にハ尋常の荷物飯料積込て番所の改濟の上、沖中又ハ夜中なと小船にて密々に運漕して他國

へ賣出もあると聞得たれハ、是また取締之爲壯年無役の郷士など五人、十人ツ、輪番にして見廻りいたさせ、小船なりとも他村へ乗廻すにハ浦役に届出る様に定め、又船所持の者ハ最寄にて四五人ツ、組合を極め置、萬一抜米其外不正の手數(趣)あらバ組中迄も輕重の咎め申付然るへし、且又浦人末々のものゝ中にて正道成もの撰ひ置、自然不正之手筋見及ひたる時ハ役々迄申出様に命、訴人へハ相應の褒美の品遣しても然るへし、先海邊浦々の取締ハ右の如く規定もなし、其上ハ役々吟味して取締を成すへきなり、將又城下ハ別して大商の集り居る所なれハ一入嚴密たるへし、表向改方大凡前文の振合にて、市中藏々収め置たる米穀ハ凡の斛數調置事も然るへし、扱米價相増すべき様子(存)の折々ハ不意の改もすへし、其上時節定め置、春夏の比武家市中(存)有米圍米の斛數申出させ然るべし、左ある時ハ常平倉直段高下の考にも相成へし、扱また米價高下の爲常平米出入の節、一手に申請并賣上いたさすること奸商の惡計の媒なれハ平等に取計ふべし、申に及ハざる事ながら、此事に預る頭役ハ勿論下役末々迄、人に先たち萬事正路を心掛制令を守らされハ、何の法も行れかたきもの

なれハ能々心得べし、右之通圍米申付、常平法取建り趣意者、近年追々諸色高直相成、城下并田舎迄及困窮り趣相見得、只今之内急度取救之趣法不相建りる者後年益困窮こおよひ、凶年等之節如何之國難到來も難計、且老文武之學問并風俗容貌等に至る迄困窮にて者、志有之者も今日の饑渴に被追、其儀不相叶儀者眼前之事こり間、先ッ人命の爲第一此常平の法を設け、自然と萬人の困窮を救ひ致根本度り間、前文之趣申聞り條、此上調事(趣)ハ役人中可及吟味、法ハ至る易り得共、其法を能取扱り人物者少き者り由、古來より申傳り間、折角入念りる常平之可爲常平様取計專一こり、且又是迄萬端申渡等毎々有之り得共、兎角最通兼り儀も有之哉こ聞得り付、此節ハ永久連續いたしり様急度申付り、掛役々之儀も人柄能々吟味之上、常平法取扱ハ勿論、遠郷迄も趣意叮嚀申論方行届り様有之度、將又抜米之儀者前文こも申述り如く、以來嚴重取締勿論之事こり、併なから心得違之者有之、權威につのり非道之取締いたしりる者、却る諸人の迷惑こも相成り間、遠郷等取締申付り人柄者別めよく吟味可有之り、此段掛役々末々まで心得違無之様可申達り、以上、

嘉永五年正月

(本文書ハ順聖公年譜ニヨリ補正ス)

去秋方給地米等御買入ニ御團米被仰付リ 御趣意、專
常平倉之意味合を以右通被仰付置儀ニ付、 御趣意分
明奉承知リ様、御別冊之通御書取被遊 御下ケ外條、御
役々初一統致拜見 御深慮之趣可奉承知、勿論御趣法掛
御側御用人并郡奉行ニ者受持之御役場ニハ間、尚又
御趣意ニ基キ無手拔取計リ様被 仰出外、

但御別冊之儀者寫取、下々之者たり共拜見不苦外、
右之通段々被 仰出外 御深慮之趣、誠以難有御事共ニ
外條、一統謹可奉承知外、於諸向表何篇懸心頭 御仁
惠之 御趣意ニ基キ廉直ニ致取扱、聊取違之儀有之間敷
外、未々迄及一統不洩様手堅可被申渡外、此旨向々致
通達、諸郷・私領に及可申渡外、

正月

(島津久宝) 豊後
(喜入久通) 多門
(島津久浮) 石見
(末川久平) 近江
(榊山久成) 伊織

186

雜抄

一 弘化之度

宰相様より分る被 仰渡り奥向出入并酒會之儀、程過
り得者緩せニ成立外間、以後急度可相守、奥向中及用
向之外無用之參會可相慎り、萬事弘化之度被仰出外御
規定之通可相守外、

一 天明之度被 仰出外弓・鐵炮稽古之節勝負取外儀、
第一風俗ニ相拘り外間可相慎り、近比鐵炮玉取等取企、
其中ニも當日不參之者過玉とか名付、爲差出外向も有
之哉ニ相聞得外、稽古之勵ミ之爲ニ者得共、心得違
之者共右之爲ニ致出席、射前等者不及吟味、中りを好
ミ外風儀ニ相成りる者修行之本意を失ひ、第一風俗之
障ニ外條、急度可相慎り、向後者文武之修行眞實ニ可
心得外、

一 衣裳之品折角節儉可相用、縮緬・羽二重等ハ先ハ可爲無
用、紬・太織・西洋布・木綿類之内、成丈鹿服可相用
外、尤是迄相用外分無用ニ相成りる者可爲迷惑外間、
平日者何品ニも持合之品着用不苦、朔望・廿八日其
外急度立外節者鹿服可相成外、江戸ニ及同様、客來
等之節も鹿服可相用、肩衣袴等も右に準鹿品可相用、

尤拜領紋服者別段之事ニ、

右之通心得違無之様可相守、奥勤之儀者表方見當ニも相成リ間、猶更可相慎候、且又衣裳之儀夏冬共同斷ニ、衣服も冬ニ準シ着用可有之リ、美服平白着用之儀も、來ル寅年十二月限可相用心得ニ、以來可致出來リ、將又此度僉服之儀分ル申達リニ付ル者迷惑之面々、忝可有之リ間、服用之品奥向之者に遣リ間、趣意厚汲受心得違無之様可申付事、

嘉永
五年 子四月

(本文書ハ順聖公年譜ニヨリ補正ス)

187
雜抄

近年諸士之風俗不宜、聊之事より及爭論、以竹木打合、郷中集會等も不行儀之向も有之哉ニ相聞得、甚以不可然事ニ、武士道ハ律儀相嗜リ得者、此比之様不謂事より及爭論リ儀有間敷事ニ、武士者禮義を專として武藝之心掛ハ勿論、學問武道をはげミ國家之固めに相成リこそ武士の本意にて、城下ニ多人數能存リも下々之無法をいましめ爲可鎮非常ニ處、却る無法之及爭論リ儀、全武士之氣質衰リ譯となげかはしき事ニ 思召リ、其上番頭

等申諭方も不行届、親共申付方等閑之處より右様成行たる事ト 思召リ間、急度風俗立直リ様可申付、以來無法之爭論等有之リ者、當人者勿論支配頭・親兄弟迄も急ト 思召被爲在リ段承知仕リ事、

五月

此度

御前に豊後被召出、近年諸士風俗不宜、無法之及爭論リ儀武士道有間敷事にて、全武士之氣質衰リ譯と歎ケ敷思召リ、其上番頭等申諭方不行届、親共申付方等閑故之事リ間、急度風俗立直リ様可申付、以來無法之儀共有之リ者 思召被爲在リ段、別紙之趣 御直ニ承知仕、誠ニ以 御尤之御儀奉恐入事共ニ條、一統謹可奉承知リ、御國恩を以蒙生育リ得者、專忠勤を心掛、士道を嗜 御恩を可奉報事リ處、其儀も不辨、追々被 仰出リ趣を相背無禮法外之働、其身ハ素より支配頭・父兄等迄蒙御勘氣リ儀者不忠不孝之至リ條、 御趣意之趣厚奉汲受、向後學文武藝を相勵ミ、朋友之交互ニ禮義を盡し、士道興隆御用立リ様可相心掛リ、年若之者に者兼々無油斷父兄等より可致教戒リ、

五月

豊後

多門

石見

近江

伊織

右貳通嘉永五年壬子五月八日被仰渡、奥表諸役人ハ老即日於御殿拜見被仰付、六組諸士之儀者銘々支配御小姓組番頭宅ニ拜見有之、六番與之儀ハ同日於末川久馬殿宅組方書役相弘致拜聞、

矢五太夫殿より被相渡り御口達書寫

近年諸士年若之者共之内、於途中ニ行摺等より事起り及爭論、互ニ法外之致方毎々有之由相聞得、士道ニ有間敷卑劣之仕形にて甚以不可然事ニ、兼取締之者有之事外得共、兎角届兼り處より右様之義致到來り間、大番頭御小姓與番頭ニ者請持之事外付、以來屹と取締之詮相立、右習俗致一變り様手厚被遂吟味、評議之形行我々共方江可被申出旨達置り折柄御沙汰之趣承知仕外付、其段も譯の達置り處、尚又此度

御前に豊後被召出、諸士風俗等之儀ニ付細々被仰出趣有之、御沙汰書一統謹る奉承知りニ付る者、此上取違之者共者有之間敷り得共、若哉心得違不守之者有之り者屹と不相成時節ニり間、別紙細々被申出吟味之趣尤之事外得共、猶又當座におひても得と致吟味り處、年若之者共喧嘩口論稠敷御制禁之段者、先年來追々分る被仰出趣有之、面々承知之通ニ、尤支配頭役席又ハ於宅容貌見聞之節も何篇叮嚀ニ被致教示、幾重も手厚申渡者有之り得共、取締不行届り哉、人々汲受薄く何れも其詮不相見得り、當時口論之基大形ハ年若之面々身持之憤薄く、途中又ハ何そニ付他之方限人交り場所ニ、猥々無禮を云掛仕掛り儀を手柄之様心得違り習俗相成り處より、繁々事を引起及爭論、互ニ意趣を合、終ニ者致怪我り儀も有之り間、此節者屹と心底を改、風俗立直り様無之り者不相成事外付、此以後者仮初にも人ニ無禮を仕掛又ハ無禮之過言を言掛り儀一切無之様、組下之者共十五才より二十五才迄支配頭宅へ一方限ツ、召呼、得と致納得り様手厚被申諭面々承知、

靈社神文前書之事

一今般浦添王子跡役私に被 仰付、誠以外聞實儀難有仕
合奉存候事、

外ヶ候略

右條々偽於申上者、

神文略

嘉永五年壬子五月二十一日

大里王子

朝教判

全拾番箱中

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、今般三司官役被 仰付、冥
加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相
勤候事、

外ヶ條略

右條々偽於申上者、

神文略

嘉永五年壬子六月六日

金武親方

正孟判

御系圖 久光公御子

一男女十二人

一久封

悦之助

嘉永四年辛亥十一月九日生於重富第、母櫻井玄淨盛

命妹、

文久元年辛酉四月從父久光去重富第而入於本室、

齊興公御譜中

嘉永五年壬子春正月二十二日、

大家以^ニ 上使會根内匠^一賜^ニ御鷹之鶴於齊興^一、齊興告老
後始有^ニ此賜^一也、

或日誌中

一嘉永五年壬子三月廿八日老人御祝被下、八拾才以上諸士

男ハ太平布、女ハ金百疋、御役人以上者紗綾、且極救^(窮カ)

士へも御救被成下、

一同年四月八日奥表出入一件、弓・鐵砲賭勝負并衣服追

々花美ニ成立^レ付、龜服可相用 御筆を以被仰出、

一同五月三日御城下方限々々郷中都る平日之作法取調書

差出^レ様、左^レの掟書等も有^レ之^レハ、同様可差出、尤

嘉永五年壬子五月二十七日生、母同菊三郎実母伊集院兼珍女

典姫 島津忠鑑室

—男女十人
—女子

御系図 齊彬公御子

一同十月十九日組中窮士別段之以 思召、御救として壹
家部に金壹兩、家族ハ壹人ハ應人數金貳朱ツ、被成下、
一同十一月十二日櫻島御差入、肝付表より根占・日州眞
幸御巡見、十二月廿五日蒲生御立にて御歸殿、

箱抄

覺

一 勤農之事、

農者國之根本ニ外間、百姓不及困窮、追々戸口相増外
様、掛之人々日夜心掛末々迄行届、勤農之文字ニ相叶

或日誌中

一 嘉永五年八月三日眞米三盃入壹俵宛、右者當時米穀拂
底ニの兼る極難澁者共、猶更當日之取續も出來兼外由
相聞得外付、別段之御取譯を以爲御救右之通被成下外
條、難有奉承知外様可被申渡旨、御小姓與番頭ニ可申
渡旨豊後殿より被仰達、

一同月廿四日勸業・風俗・衣服・軍役等之事件 御書取を
以、來年御下國之節ハ屹と其詮相立外様被仰出 前日廿三日御參勤
として御
發掘也、

右本日御小姓與番頭宅にて小與頭被召出、小與中人
別宅ニ呼出申渡外様被達外事、

郷中作法ニ依る者他方限に秘密之事も有之事之由、右
類者封緘之上可差出被仰渡、

一同六月廿五日今日ハ於外御庭表方勤之面々被召出、

御直ニ御指揮ニの砲術稽古被仰付、御側向勤之面々ハ

先月末より同斷式日被召立稽古被仰付、

一同七月廿九日御小姓與番頭・當番頭詰衆之面々、磯

御茶屋被召呼、砲術調練被仰付、相濟外上御庭拜見被

仰付外、

嘉永五年秋八月三日、
大家以ニ 上使京極左衛門一賜ニ御鷹之雲雀於齊興一、

外様可及吟味事、

但取箇、夫役・打起・收納之時節、其外之雜事迄入
念上下共辨利相成り様可取計事、

一 締方之儀、諸郷出旅前致誓詞り趣意ニ基キ、奉公正路
ニ心掛り老勿論ニ有、無證文ニ有出郷之者、所ニ有邪
魔ニ相成人物、所役々之邪正、所榮勞等之事心掛及見
聞、貨財を貪り酒色ニ耽り、富家ニ近寄貧賤を遠ケ外
類之儀無之、勸善懲惡を晝夜心掛、所之痛々不相成様
廻勤可致旨毎々可申達り、

但締方ニ不限、寺社方・山奉行・郡奉行其外諸役々
ニも同様相心得、華美之振舞無之様可申達り、

一 諸士風俗并文武之道修行之事、

諸士風俗不宜時老一國之風俗亂り基ニ有、先達外申達
り通、弥不作法之所業無之、武士道相守、文武之諸藝
無懈怠可致修行旨、諸頭之面々より可申達り、諸郷之
儀程遠之場所多り間、地頭より郷士年寄等ハ急度相守
り様可申達り、

但諸地頭役之面々も文武之兩道無懈怠心掛り儀第一

ニ有、自身怠り有支配ハ何程申達り共難被行ハ當
然ニ有間、此段能々相心得、風俗立直り文武兩道

共眞實之修行ニ相成り様可取計り、

一 孝子并平日心掛宜敷者を引立遣し、鰥寡孤獨・長病等
之面々を心付、救筋取計遣り儀、第一風俗立直りり根
本と存り間、未々迄心付り様可申付事、

一 音信贈答之事、

音信贈答老禮節之事故、分限ニ應し輕き品贈答老當然
之事なから、往年之習風ニ有間ニ老内意等申込り節、
過分之贈品老有之、其内ニ老賄賂かましき進物致り向
も有之哉ニ相聞得り、此儀第一風俗亂れ立、利欲ニ趣
り媒ニ有間、急度立直りり様可取計、各中初折角差送
りを押返しり儀ハ義理合ニ有難致答り間、以後急度無
用之進物無之様表向諸向ハ可申達、別有町人等之進物
之儀急度不相成段可申渡事、

但進物等ニ有推擧之儀無之事なから、未々心得違り

有老不宜り有間、急度可申達り、

一家宅營作屋敷取廣等之事、

近年老自然と家作立派ニ成立、未年初て下向之比考合
り得老拔群ニ相見得、他國之外見等老可然事り得共、

一 統困窮成立根本ニ有間、以來心得違之者無之、分限
相應ニ成丈質素ニ取建、餘計之家作等無之様急度可申

渡り、進物沙汰・家作之兩條を分る申達り間、以後役

々心付ケ、華美物數寄無之様急度可申渡り、

一衣服之事、

先比申達り通弥堅固に可相守旨可申渡り、

一軍役之事、

武士第一可心掛事に外間、音信等節儉相用置、非常之節

糧食を初め萬事不差支様用意第一心得り様可申渡り、

且又海岸防禦調練等之儀も、折角心掛行届り様毎々可

申渡り、

一米價之事、

城下より諸郷末々迄格別高下無之、上下共通用宜敷様

入念りゑ、毎々聞札無抜目様可申渡り、

右之條々申達り間篤々と及吟味、諸郷末々迄不洩様申

渡、來年歸國迄に詮立り様取計專一に候事、

嘉永
五年 子八月

白木御文書拾番箱中 五十三番

包紙

書附写トアリ

覺

御茶入朱衣 肩衝 壹

但高貳寸九分二厘

明貳寸三分八厘

口壹寸三分

底壹寸四分八厘

糸切

一象牙蓋壹

一淺黄羽二重御物袋壹

一挽家

但内梨子地外黒塗金粉逸掛

一挽家袋

但黒天鷲絨裏紫海氣緒茶柄結

一桐白木箱

但印籠蓋木丁面遠州眞田緒付白縮緬服紗包

墨銘書

朱衣肩衝

一上下蒲團貳

但黒天鷲絨

一四方詰黄海氣

一黒塗箱入

但印籠蓋茶色眞田緒付黄木綿包

金粉銘書

朱衣肩衝

一桐白木箱壹

但印籠蓋淺黃真田緒付白木綿包

墨銘書

朱衣

御茶入之袋二

同替蓋二枚

一御袋貳

內壹

一萌黃雲鶴緞子

但裏玉虫海氣緒紫柄結

一茶色海氣單服紗包

壹

一白茶日野廣東

但裏黑茶丸緒紫柄結

一茶色海氣單服紗包

一御替蓋貳

但象牙

一小堀大膳家之留書相添

但上包紙銘書

齊興公御筆

一外家箱

但黑塗白木綿包

金泥銘書

齊興公御拜領

朱衣肩衝

朱衣

御茶入袋 二

御替蓋 二枚

右老從

將軍家慶公

宰相樣多年之 御精勤

御満足之段御懇之 上意被爲 在

御手自被遊御拜領候付、此節御讓御道具被入置、岩崎

御數寄屋藏格護被仰付外條、到後年紛敷無之樣可記置

者也、仍如件、

嘉永五年子八月廿三日

伊織久成

石見久浮

多門久通

豐後久寶

御數寄屋頭

右外包紙
朱衣肩衝御書附壹通

右嘉永五年壬子十一月十八日多門殿の大嶋休左衛門(御渡脱カ)江被成、白木

御文書拾番箱へ納置之事

198 齊彬公御系図中

嘉永五年壬子十二月十六日敍從四位上、任左近衛中將、

舊御番所御文書四番箱中

199の1 上卿 久我大納言

嘉永五年十二月十六日 宣旨

從四位下源齊彬朝臣

宣敍從四位上

藏人權右中辨兼左衛門權佐藤原長順奉

口裏

口 宣案

右一通

199の2 上卿 三條大納言

嘉永五年十二月十六日 宣旨

左近衛權少將源齊彬朝臣

宣轉任權中將

藏人權右中辨兼右衛門權佐藤原胤保奉

口裏
口 宣案

右一通

199の3 從四位上 薩摩中將

從四位上

上卿 久我大納言

同

職事 葉室權右中辨

左近衛權中將

上卿 三條大納言

同

職事 廣橋右中辨

右一通

199の4 左近衛權少將源朝臣齊彬

正二位行權大納言藤原朝臣實萬宣、奉

敕、件人宣令轉任左近衛權中將者、

嘉永五年十二月十六日大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣

右一通

師身奉

從四位下源朝臣齊彬

右可從四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、直申榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

嘉永五年十二月十六日

朱イ

二品行中務卿 幟仁親王

正四位下行中務大輔臣卜部朝臣久隆

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣資生

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言兼左近衛大將臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

(三條)

實萬

(久我)

建通

(二條)

忠香

(二條)

齊敬

(九條)

幸經

(德大寺)

公純

(中山)

忠能

權大納言正三位臣

(姉小路) 公遂

正二位行權中納言臣

(野宮) 定祥

正二位行權中納言臣

(万里小路) 正房

從二位行權中納言臣

(水無瀬) 有成

從二位行權中納言臣

(廣幡) 忠禮

從二位行權中納言臣

(鳥丸) 光政

從二位行權中納言臣

(正親町三條) 實愛

從二位行權中納言臣

(三條) 公睦

從三位行權中納言兼左近衛權中將臣實良等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

嘉永五年十二月十六日

朱イ

制可

月日辰時從四位上行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身

右中辨胤保

關白從一位朝臣

(廣司政通)

太政大臣闕

從一位行左大臣朝臣(九条尚忠)

從一位行右大臣朝臣(近衛忠總)

從一位行内大臣朝臣(廣司輔熙)

三品行兵部卿貞教親王

兵部大輔正五位下紀季

參議正四位上行右大辨資宗

告從四位上源朝臣齊彬奉

制書如右、符到奉行、

正四位下行兵部少輔兼因幡守嘉純



(天皇御璽)

大錄

少錄

少錄

朱イ

嘉永五年十二月十六日

200

白木御文書拾番箱中 五十四番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

嘉永六年正月十一日 齊彬御判

201

舊御番所御文書四番箱中

仰口裏 嘉永六
三三三

さつまの中將より今たひ昇進の御禮として、黄金百兩・御きぬ三十疋しん上おはしましり、ひろう申てりへは、おもしろく思しめしりよし、よくこゝろへりて申せとてり、御心へりてつたへさせられりへくり、かしく、

御いまの

御局へ
る申給へ

右箱蓋

齊彬公從四位上中將女房奉書一通

202の1

白木御文書拾番箱中 五十五番

福昌寺に

(重要文、徳川家貞等)
廣大院様御眞像一幅

一御表裝金筋立一文字風帶淺黄緞子模様唐草

一中縁赤綾地模様鳳凰

一上下萌黄龍紋緞子

一軸金減金唐草毛彫

一淺黄羽二重袷服紗包

一内箱桐白木木蝶面鑄掛金粉銘書

一環金滅金白あんだ打緒付

一内箱紫縮緬袷服紗包

一外箱真塗金粉銘書金物鎖前有、二箱共箱裏住吉内記筆と銘書

一環銀滅金白あんだ打緒付

一外箱黄木綿袷風呂敷包

一掻合塗鑰箱壹

右考

淨岸院様御靈屋内
(竹姫、緒豊様室)

廣大院様御位牌脇に箱入附之儘被遊 御安置候、左

ゐ到後年塵抹不相成様、屹と入念致格護置、毎年御正

忌日等ニ考御位牌脇に奉掛外様被 仰付外、

右可被申渡外、

五月

豊後

千眼寺に

常興善院様御眞像一幅
(舎興女、近衛忠熙考)

一御表装金筋立一文字風帶鼠地紫青江緞子

但

光格天皇之后

大宮御所御装束之切れ之様ニ

宰相様被遊 御鑑定候、

一中縁縹子錦織模様唐寶

一上下紺地龍紋緞子

一軸金滅金唐草毛彫

一淺黄羽二重袷服紗包

一内箱桐白木木蝶面鑄掛金粉銘書

一環金滅金白あんだ打緒付

一内箱紫縮緬袷服紗包

一外箱真塗金粉銘書金物鎖前有、二箱共箱裏藤原篤之筆

と銘書

一環銀滅金白あんだ打緒付

一外箱黄木綿袷風呂敷包

近衛忠熙公御筆

般若心經御軸物一卷

但 金字

一御表装花色綾金欄模様菊ニ竹袖裏金砂子

一軸水晶

一緒紫あんだ打

一下題般若心經

一淺黃羽二重袷服紗包

一内箱桐白木木蝶面鑄掛金粉銘書

一環金滅金白あんだ打緒付

一内箱紫縮緬袷服紗包

一外箱眞塗金粉銘書金物鎖前有

一環銀滅金白あんだ打緒付

一外箱黃木綿風呂敷包

一搔合塗鎗箱壹

但御懸物并御軸物鎗貳入

右者御國許御寺に御納被遊置度、從

近衛右府様

宰相様に御頼被進付、護國殿に 御安置被 仰付

條、毎年

常興善院様御正忌日に老寺役計を以於 御靈前御經致

勤行外様被 仰付、左の到後年塵抹不相成様、屹

と入念致格護置外様被 仰付、

右可被申渡外、

五月

豊後

右外包紙
嘉永六年丑五月廿七日豊後殿を被成御渡致格護置外様、町田孫

一郎致承知之、白木御文書拾番箱へ納置之事

或日誌

203

嘉永六年丑六月九日 太守様御事舊蠟十六日 御城に

被爲召、從四位上中將御任官被爲蒙 仰旨、昨八日

御到達、今日一統於席へ御祝儀有之、

一同年六月廿二日御下國御暇に御着城、然處去ル三日

取米利加之軍艦四艘浦賀に渡來之旨申來、御着城直に

御小姓與番頭御用人勤嶋津隼人江戸へ被差出、翌日廿

三日若年寄嶋津右門同斷、同廿五日四本次郎左衛門初

三拾餘人・與力三人・足輕廿八人出立被仰付、

204

御系圖 久光公御子

男女十三人

女子

於成 島津久寶室

嘉永六年癸丑六月十三日生於重富第、母櫻井氏妹、

文久元年辛酉四月從父久光入於本室、

明治七年一月九日卒、神號萬富豐成姫命、

雜抄

今度亞墨利加船より差上り書翰、和解之寫貳册拜見被仰付、商法不否^{可カ}不容易御事ニ^レ間、存念之趣不殘申上り様被仰付奉畏り、

亞墨利加人願之儀者、此以前阿蘭陀より申上り、琉球佈留之吳人よりも毎々噂仕事ニ^レ間、一朝一夕の事ニ^レ間者無之、彼方ニ^レおひても御制禁之段者承知之上押る渡來仕り間、御國法之趣被仰渡相成りぬも一通ニ^レ間者承知仕間敷、乍併御打拂之儀者御防禦御手薄之折柄故、弥必勝之儀無覺束奉存り、假令一往追拂り共海上自在之吳船、殊ニ近來ハ唐國并無人島邊へ數艘滯船罷在り様子ニ^レ相見得り間、時々海運之妨可仕り、此度之御處置ハ實以御一大事之場合と奉存り、且此度願筋御許容ニ^レ相成りぬ者御威光薄き形、其上阿蘭陀國王へ對りぬ者御義理合ニ^レ不相濟譯合ニ^レも相當り、且亦戰爭を御厭ひりぬ御免ニ^レ相成り哉ニ^レ外國ニ^レの心得りぬ者、永年之御爲殘念千萬ニ^レ奉存り、就る者此節御免被仰付りぬ者不可然御時節敷と奉存り、乍然來年渡來之節直ニ^レ御斷ニ^レ相成りぬ者戰爭之端を開り表難申り得者、成丈年を延しり様、無據御譯合被仰聞りぬ歸帆被仰付、其内海岸御手當十分ニ^レ被仰付度儀と奉存り、三

ヶ年程も夫形ニ^レ延り御所置可有之奉存り、左りぬ三ヶ年も相立り得者諸國一統御手當整りぬ者必定と奉存り、軍役相整り得者勇壯之人氣ニ^レ御座り間、打拂被仰出り共必勝之計策如何程も可有御座奉存り間、御手當場所之儀者浦賀を第一ニ^レ被仰出、其外要地之場所御評議之上委細被仰出度、兼り於吳國日本之人氣勇壯之儀懼罷在り段及承り間、御手當嚴重ニ^レ相成り得者無禮振舞仕間敷り、軍船御全備之上通船妨りぬ者如何程之御處置をも被爲在り間、其上ニ^レ間も急度打拂被仰出方可然哉と奉存り、且亦海防御手當被仰出り得者、頭必定一身ニ^レ引受致惣裁り者無御座りぬ者行届間敷、殊ニ人心第一ニ^レ間、御連枝方之内御一人諸指揮被仰出度り、御人体之儀迄申上重疊恐入り得共、當時御年輩と申人望と申、事情委細御知識被爲在り得者、水戸前中納言殿之外被爲在間敷奉存り間、海防之儀御委任被仰出り様奉念願り、今度之儀者天下之御一大事ニ^レ御座り間、彼を知り己を知、得と御處置無御座りぬ者必勝之御良策者行届申間敷り、能く御評議之上被仰出り様奉願り、何れにも此度直ニ^レ御免被仰付りぬ者御國体之處如何にも恐入奉存り間、前文之儀申上りぬ者實以恐怖之至御座り得共、不顧恐慮之趣不殘申上り、以上、

但石炭置所之儀も御免不被仰付方奉存り、

七月廿七日

御名

寛永六年六月甲寅利加合紫園便船始て油質儘ニ到る、此等ニ当ルカ

雑抄

此節質素節儉之儀被 仰出、於 公邊も^(敷脱カ)殿御儉約被

遊り間、海防一筋ニ力を用ひ、弥嚴重ニ手當仕り様

被仰出、難有奉承知り、左之趣奉願り、

一此度之被仰出ニ付段々勘考仕り處、臺場嚴重ニ相構り

而吳船打拂調り而も、遠沖に退去之節追打之手段無之、

關州ニの無法ニ追掛り而も必勝之儀無覺束、打捨置り

得者彼方舩取つくろひ又々襲來仕べく、左り得者頭上

之蠅を追うも同然に奉存り間、御制禁之儀申上恐奉存

り得共、堅固之軍舟并蒸氣舟も急速之辨利宜敷、軍事

要用之品ニ御座り間、何卒御免被 仰出り様奉願度、

蒸氣舟之儀者一昨年來家來に申付、工夫之上可也ニ製

作可相調奉存り處、此度家來被召呼本望之至難有奉存

り間、何卒軍舟・蒸氣舟兩様共御免之儀偏ニ奉願度、

左りへハ

皇國之御爲者勿論、琉球迄も弥御威光相響り様仕度心

底ニ御座り、尤琉球砲舟者製造最中ニ御座り得共、

皇國之軍舟製造御免之儀奉願度、且亦乘習之爲に平日

者運送川ニ相用申度、左り得者吳舟海路妨り儀も有之

間敷奉存り間、何卒願立仕り様御評議奉願り、

一以來關州に軍事要用之書并大小砲其外御手當必用品之

分、奉行に相達注文被 仰付り儀相叶り様奉願度、彼

を知己を知て後ならてハ必勝之計策も難調奉存り間、

何卒願之通相叶り様仕度、左りへ者不及ながら彼國之

善法利器之分相撰ミ、御手當之一筋仕度奉存り、申上

りも恐入り得共、二百年來太平之御代ニ御座り間、戰

場之實地を踏り者者絶り無御座、彼國々者今以て戰爭

も有之、實地ニ臨ミ試之上追々と利器新法考り事故、

便利之儀多く可有御座、既ニ蒸氣之儀も蘭書にて工夫

者仕り事ニ御座り間、何卒諸品注文之儀御免被仰付

り様仕度、左りへハ弥嚴重ニ手當向申付、御國恩を奉

報度心底ニ御座り、此段奉申上り、以上、

寛永六年

八月十九日

御名

御付札 左之通ニ同十一月廿二日海防御掛御老中牧野備前守様より御

被ニ相成り事

軍船并蒸氣舩製造致し不苦り間、舩形并間敷等巨細

繪圖面ニ相認、船數共取調猶可被相伺、其外之儀
考追る相達ニ有可有之、

207 齊興公御譜中

嘉永六年癸丑九月十二日 上使森川出羽守俊民來高輪

邸一賜二

(徳川家慶)
尙徳廟遺物脇差美濃國一腰、

208 雜抄

一今度從

公邊被 仰出外海岸手當向折角入念及吟味、考付之儀
考不差置可申出外、且又此節造立申付外二ヶ所臺場其
外海防之儀考、萬端國家肝要之大事、萬人之性命ニ掛
り外條、人目を厭ひ利益を考へ製作鹿略有之ける考不
宜、兼之節儉も非常之爲ニ外間、平日入價を厭ひ萬
事致省略外儀考不致心得違、申付外法之通堅固ニ致製
作外様、軍役方ハ勿論、大目付・横目其外掛奉行を始
末ニ迄可申渡事、

嘉永六年
六月廿丑九月

209 御系図 齊彬公御子

一男女十人
一典姫
一女子

寧姫 忠義後夫人

嘉永六年癸丑十月晦日生、母同典姫、

明治二年己巳六月六日爲近衛前左大臣忠熙公養女、

十二年己卯五月二十四日逝、神號綾御衣寧姫命、

210 雜抄

嘉永六年丑十一月十六日組中に御達

城下六組之内二組ツ、毎年六ヶ月以交代、東目・西目手
當申付、佛組小頭并加農小頭・目付、玉竿・口薬之儀申
付有之、殊ニ小頭考進退急徐之次第不相辨ける考、實地
之勝負ニ至り誠以大切之役目、目付役も同様專要之重役
ニ外處、是迄於砂揚場訓練考ペロトン之進退而已之事ニ
外間、試ミも無之外得共、當年も江戸・長崎に度々吳船
渡來、從 公義海岸軍事手當(數脱之)被仰出、右船迄も造立被
仰付外時節ニ付、誠ニ以不容易事ニ外、右ニ付及勘考外
處、兼之軍役方より夫々役掛等申付置、手當行届外筈と

ハ存外得共、一度も其備こゝる行軍訓練無之の間、萬々一

不心得之者有之の者不宜の間、兼る砂場場訓練可致見

分申出置り得共、右之儀相止、此度者先來正月より當分

之三組之分家老組・番頭組其外城下之分者定通之行軍こ
る吉野に参り、於彼所訓練下知可致見分と存の間、來正
月十五日後ハ急度相調り様可申付り、尤兼る役目申付心
得り者こゝるも、萬一不快こゝるハ、早斷申出り様、左りハ

、人撰こゝる跡代申付り様可取計、此段急度申達り、

右之通被 仰出り條、難有 御趣意之程一統深可奉汲

受り、此旨向々には不洩様可申渡り、

十一月

豊後

211 或口誌

嘉永六年丑十二月比より、無故酒食取はやし勝負事等
取企、酒量を取忘れり者有之由、右者去ル申年 宰相
様分の被仰出置り處、近比こゝるに緩せ成立り由、別る
不可然事付、屹と相守り様被仰出、

一同月廿八日組中窮士之面々には、歳末尚亦行迫り可爲難

儀被 思召上り、壹戸に金壹兩ツ、被成下り、左り
の御直こ被成下事この間、御禮廻など之儀こ不及り旨

御達、

212

白木御文書拾番箱中 五十八番
(朱)五拾八番
嘉永七年寅正月

御上下之節御鐵炮拾挺、以來御道中御行列之内に爲御持
可被遊御伺書壹通、右こ付御留守居首尾書五通、江戸詰
御家老衆御問合書壹通留、

右冊ノ蓋紙也

御記録所

(の1)

近來吳國船度々近海に渡來付御警衛向段々手厚被仰度、
其上先達る萬石以上之面々、其御地に鐵炮差廻り儀苦ケ
間敷哉之旨、御噂有之り段無急度致承知り、然者此節柄
何方に歟吳國船渡來々不相知、遙々無雙之遠國、若哉於
道中何様急變之御用々難計り付、以來道中筋鐵炮拾挺爲
持り様致度、此段相伺り、以上、
御付札
可然何之儀候

九月十五日

松平薩摩守

(の2)

御書附一通 御付札有

但近來吳國船度々近海に渡來こ付、御警衛向手厚被仰
渡り付、以來御道中筋御鐵炮拾挺爲御持被遊度御伺

之儀ニ付、

去月
御用番

松平和泉守様
御用人

田中鐵兵衛

右方被成御達ハ儀御座ハ間、今日中壹人罷出ハ様御用人
中方之切紙致到來罷出ハ處、御書附ニ被成御附札、右御
用人を以被成御渡ハ間、御國元ハ可申上旨申述置ハ、
御書附差上申ハ、

右之通今晚私相勤、此段申上ハ、以上、

丑十二月十日

早川五郎兵衛

近江様

追ル申上ハ、被遊 御承知ハ上、表方以御使者御請
可被 仰達儀と奉存ハ、且又大御目付衆ハ御届之儀
者、毎之通御留守居附役名前之書附を以、御用御頼
深谷遠江守殿ハ申出爲置ハ、此段も申上ハ、以上、

(03)

近來吳國船度々近海ハ渡來付、御警衛向手厚被仰渡、其
上萬石以上之面々御當地ハ鐵炮差廻ハ儀苦ケ間敷哉之旨
御尊御座ハ趣、無急度於國本致承知ハ付、此節柄道中筋
如何様急變之儀々難計御座ハ間、以來道中筋行列之内ハ

(04)

書附一通

俱御道中筋以來鐵炮爲御持被遊度御願被置ハ處、今以
御差圖無之ハ、御追願之儀付私名前、

先月
御用番

松平和泉守様
御用人

西八右衛門

右ハ持參仕、右御用人ハ致出會、先達ル中御願被置ハ御
道中筋鐵炮爲御持被遊度御願之儀、今以御差圖無御座ハ
付、あまり御催促ケ間敷奉恐入儀ニ御座ハ得共、實々別
紙書付を以奉追願ハ通ニ御座ハ間、何卒急速御差圖被成
下ハ様仕度旨相應申述差出ハ處、和泉守様被成御承知、
書付御願被置、追ル御挨拶可被成旨、右同人を以被仰聞

外、

右之通今朝私相勤、此段申上外、以上、

丑十二月五日

早川五郎兵衛

近江様

追る申上外、本文ニ付る者最初御書附及阿部様入御内見置外末之儀ニ付、猶又右に持參仕、御用人渡邊總兵衛に致出會、演說之上書付入御内見、且者兼る御内用御頼之儀ニ及御座外間、前條之趣厚御含、早目御差圖御座外様私方御内意を以、猶又申上外旨申述差出外處、伊勢守様右御内意之趣者被成御承知、書面何之思召寄及不被為在外間、和泉守様御方に可被差出外旨、右同人を以被仰聞外付、本文之通相勤為申儀御座外、此段及申上外、以上、

(05)

近來吳國船度、近海に渡來付、御警衛向段、御手厚被仰渡外間、於道中何様急變之儀及難計外付、以來薩摩守道中筋鐵炮拾挺為持外様仕度旨、今般伺之通被仰渡外、依之參勤御暇之節道中行列之内に為持申外付、右之趣箱根・今切・碓氷・福嶋御關所に兼る御達被置被下外様仕度奉願外、此段申上外、以上、

十二月十四日

御名内
半田嘉藤次

(06)

書附一通

但近來吳國船度、近海に渡來ニ付、御警衛向段、御手厚被仰渡外間、御道中筋御鐵炮為御持被遊度、御伺之通被仰渡外付、箱根其外御關所に右之趣御達被置被下外様と之儀ニ付私名前、

御用番
松平伊賀守様
御取次
飯塚勝之助

右に持參仕演說之上差出外處、被成御落手外旨、右御取次を以被仰聞外、

右之通今朝私相勤、此段申上外、以上、

丑十二月十四日

半田嘉藤次

(参)

「御上下之節鉄炮為御持被遊外儀、御願之通相濟外付之事
正月三日夜到來
極々急飛脚便」

近江様

(07)

御書附一通

御用番
松平和泉守様

右者近來吳國船度、近海に渡來に付、御警衛向手厚被仰渡、其上萬石以上之面、御當地に鐵炮取寄り儀不苦哉、御觸達有之、以來、御上下之節御鐵炮拾挺爲御持可被遊、

右付御願書爰元調被仰付り付、御都合能御願濟相成り様可取計旨被、仰付越、御留守居御右筆に致吟味、去方聞

合之上九月十五日御日附被仰付、先月朔日阿部伊勢守様并御用番松平和泉守様

に表向被差出り段者、先月二日式中急便申上越通に、然處

公邊御大禮等こゝる涯、運兼り御模樣に付、尚又御留守居

に致吟味、別紙案文之通御追願書爲差出り處、去ル十日和

泉守様より御留守居御呼出こゝる早川五郎兵衛罷出り處、

御願書に可爲伺之通旨被成御付札、御取次を以被成御渡

り付、御國許に可申上旨申述置り段、別紙首尾書之通申

出り付、

宰相様達、御聽、向、に申渡り、就る者、御上下之節

御道中御行列之内に爲御持被遊り付、右之趣箱根・今

切・碓氷・福嶋御關所に兼る御達被置被下り様、是亦別

紙案文通

御名内書面取仕立、去ル十四日御用番松平伊賀守様に爲

差出り處、被成御落手り段御取次を以被仰聞り旨申出り

付、御留守居首尾書等六通相添、此段申越り條被達

貴聞、其許申渡之儀者何分表可被取計り、以上、

但御願濟に付る者

御承知之上、表方御使者を以御請可被仰達儀故、往

返日積を以其通取計可仕り、

丑十二月十七日

島津右門
末川近江
(久福)
(久平)

鳴津豐後殿
(久吉)

川上筑後殿
(久忠)

島津石見殿
(久忠)

樺山伊織殿
(久忠)

右一冊終り